

山岳時報

時 報

No. 2

1963年7月

京都大学学士山岳会

目 次

はじめに……………四手井 綱彦 (1)
 サルトロ・カンリ登頂を終えて……………加藤 泰安 (2)
 サルトロ遠征概記(カラチより登頂迄)……………四手井 綱彦 (3)
 キ ャ ラ バ ン……………平井 一正 (9)
 登頂の前後……………高村 泰雄 (14)
 帰 路……………谷 泰 (25)

装備食糧その他に関する覚え書

1. 装備について(付装備表)……………平井 一正 (29)
 2. 無線機について……………平井 一正 (37)
 3. 食糧について(付食糧表)……………斉藤 惇生 (38)
 4. 写真について(付写真表)……………上尾庄一郎 (46)
 サルトロ 雑感……………四手井 綱彦 (49)
 サルトロ・こぼれ話……………斉藤 惇生 (51)
 サルトロの反省……………岩坪 五郎 (61)
 サルトロ新兵の言……………上尾庄一郎 (63)

木 旺 講 座 —その2—

アッサム・ヒマラヤ入門……………高橋 旨象 (65)

会 員 紹 介 サルトロカンリ遠征隊員

四手井綱彦氏…鈴木 信	岩坪 五郎氏…高野 昭吾
加藤 泰安氏…梅棹 忠夫	高村 泰雄氏…田附 重夫
林 一彦氏…舟橋 明賢	谷 泰氏…酒井 敏明
斉藤 惇生氏…中島道郎・本仁久一郎	前小屋 端氏…松尾 稔
平井 一正氏…脇坂 誠	上尾庄一郎氏…高橋 旨象

付 遠征隊行動日程

地 図

写 真

編 集 後 記

—この表紙の“AACK”の文字は、カスティラオによってイタリア語に訳され、セビリアにて1503年出版されたマルコポーロ著「東方見聞録」より採写したものである。京都大学図書館蔵—



ビラフォンド・ラよりのサルトロ・カンリ



ベース・キャンプにて

上段左より R・バシール、谷、加藤、四手井、バシール大尉、林
 下段左より 上尾、平井、高村、斉藤、岩坪、前小屋

はじめに

サルトロ・カンリ遠征隊長

四 手 井 綱 彦

1962年7月24日サルトロカンリ(Saltoro Kangri)の登頂はなしとげられた。思えば、サルトロ・カンリへの道はながかった。この峯へ登頂しようという計画は随分古くからAACKで温められていた。1935年のハント(J. Hunt)の試登報告は、山岳雑誌ケルンだったと思うが、鈴木信君がそのほん訳を載せている。これがサルトロ・カンリが注目されたはじめてであろう。アンナプルナ遠征隊が帰国して以後、いつの計画にも、この峯が話題にのぼらなかつたことはない。アンナプルナ再挙の計画のときにもこの山の話はでていたし、チョゴリサ行を論議したときにもこの山は有力な候補であった。

サルトロへのアプローチとしては、ハントの通ったリカ(Likha)氷河の道は問題外とするも、5500米のビラフォンド・ラ(Bilafond La)を越えて、シアチェン氷河へ一度下るか、ビラフォンドウォールを突破するかである。どの登路をとってもアプローチがながく、トランスポートに相当の困難がある。この山はもう少しカラコラムでの経験を得てからにしよう、という考えがあった。チョゴリサ隊が帰ってからも、せめてサルトロ川(Saltoro River)あたりだけでも偵察してくればよかったというような話もでていた。この次はサルトロへということは、一致した考えであった。この間、私達はワークマン(Workman)の著書を度々読み返していたし、あの本についていたシアチェン流域の地図は、重要なよりどころとして、会議の席上にも度々持ちだされていたものである。

AACKの30周年遠征計画をたてる時、サルトロ・カンリへというのは論議を要しなかつた。1959年6月にパキスタン政府に登山許可を申請するとともに、実行段階に入った。募金活動はそれ以前から活発に行なわれた。9月が終っても許可はこない。10月中にはと期待してテント等装備等の発注を10月迄おさえて待ったが許可は下りない。11月に入って、たしか中旬頃であったと思うが、許可の前提であると解釈できる文書——隊員名その他を通知せよというような内容だったと思う——がパキスタン側から来た。しかし、その後情勢は一転して12月初旬には、不許可の通知を受取った。当時K₁₂を計画していた英国インピリアル・カレッジ(Imperial College)のミラー(K.J. Miller)からも正月に手紙が来て、彼等の計画にもパキス

タン政府当局はウンともスンともいってこない。われわれの計画はおさき真暗だといってきた。英国でもそうならわれわれの計画不許可も止むを得ないと、いささかなぐさめていたが、彼等はその後許可をとってシアチェンに入っている。英国には一目おいてるらしい。

その後1960年も許可が得られず、1961年の夏には御承知のように、私と高村君とがパキスタンに渡航した。これは今度もむずかしそうだという日本大使館からの情報で、最後の現地交渉にでかけたわけである。遠征もカラコラム・クラブとの合同遠征という形式にした。この時万一の場合を考えて、第2候補クンヤン・キッシュ(Kunyang Kish)、第3にガッシュャーⅢ(Gasherbrum III)をもっていった。私達も必要なときは、ヒスパー氷河からクンヤンを見てこようと、その準備もしていった。その後長期にわたる高村君のねばりと折からの池田首相の訪パを機に事情は急転直下解決し、我々の積年の希望の許可が得られたことはすでに御承知の通りである。一方日本大使館の援助もわずれることはできない。特に牧内書記官には終始協力指導をいただいた。また、本隊のいったとき牧内さんは往路はスカルドまで同行、帰路はペンデイまで出迎えていただき、御迷惑のかけっぱなしで、お礼の申しようもない。

シアチェン氷河とピーク36氷河の合流点付近にベースキャンプをおくとしたときに、ベースキャンプ入りを何日に想定するかは、一つの問題であった。1961年の夏カラコラム・クラブとの打合せのときも、この期日は論争の的であった。ベグ(Beg)教授は7月10日以後15日頃を主張したが、結局6月25日から月末頃までということにして帰ってきた。AACKでも両論があった。7月に入れば快晴の日が期待できることは一致した見解である。問題は深い積雪の時期にビラフォンド・ラを越えるか、雪が解けてから越えるかにある。おそらく行けば雪は解けるが、登頂への行動日数が少なくなる。私達は早いめの計画ででかけ、7月1日、シアチェン氷河との合流から少しピーク36氷河を上ったアドバンスドベースキャンプ(Advanced Base Camp 所謂ABC)に集結した。ほぼ予定の通りである。当時はまだ天候は充分よくなりず、7月に予見していた夏型の快晴つづきの日は、今年は少しおくれ

て、7月2日以後にやって来た。登頂のあと毎日毎日快晴で、帰路氷河は見違える程歩き易かった。天候に関する限りはおそく行ってもよかったようである。しかし、早いめにでかけたことはいろいろの点で好都合であった。たしかにシアチェンに入ってから雪が深く、先発隊は大分難行した。ピラフォンド越えの偵察も少々悪天候の中を強行しなければならなかったこともある。一方、日数に余裕があったので、途中のキャラバンをのんびりやれたし、ピラフォンド越えのトランスポートも順調に進行した。

今度の隊では、誰が登頂隊員になってもよいという程、隊員一同調子がよかった。これは一度5500米の峠をこえているので、高度順応がよかったこと、食料係りの努力で栄養がよかったこと、ドクターの健康管理が適切であったことが、好い結果を導いたのであろう。しかし、全行程を通じて余裕のある行動ができたことも見のがすことはできない要因である。山へ入ってから体重のふえた隊員もあったし、私なども、でかける前にはなんとなく胃の調子がわるいように思ったが、山ですっかり元気になってしまった。

緒言を終るにあたって、この機会に遠征隊に対して好意ある御援助御指導をいただいた多くの方々に、心から御礼申し上げますとともに、隊員諸氏の労苦に感謝の意をささげる。

サルトロ・カンリ登頂を終えて

副隊長 加藤 泰安

前記：この文は先に現地より内地新聞原稿として投稿されたが、都合でけい載されなかったものをここに再生したものである。内容的に、前文の「はじめに」と重複する点もあるが御勘弁願いたい。 —編集者—

7月24日正午、私は6000mのキャンプで登頂をしらせる斎藤隊員のはずんだ声を無線機の奥に茫然ときいていた。そしてよるごびにおどりまわる三人のポータ達を眺めながら、長かったこのサルトロ・カンリ計画をいつしか静かに思いかえしていた。

1953年秋、京大アンナブルナ登山隊の帰国をむかえた夜だった。数人の仲間とこの次の目標について語りあっているうちに、誰かの手にあったサルトロ・カンリの東北面の写真に皆の眼がすいよせられていた。

1935年、エベレスト登頂に成功した英国隊の隊長サー・ジョン・ハント (Sir John Hunt) が25歳のときこの山にむかった記録である。彼はこのとき、中途にして空しく撃退されている。考えてみると彼と私はおなじ年である。彼がサルトロ・カンリに挑戦したころ、

私は日本の山や蒙古の草原を、他日のヒマラヤを期してうろついていた。

1953年、彼がエベレストの登頂に成功したころ、私はマナスルの第一次隊員として彼の成功をベースキャンプできいていたのである。

大登山家である彼にはどうていかなわぬまでも、やはり一登山家として彼に一矢をむくいたい気持は多分にある。それ以来この山は私とは離れがたいものとなってしまった。しかしその当時のわれわれの会の力ではこの山は登るどころか近づくことさえむつかしかった。しかし、その夜、1959年にむかえるわれわれの会の三十周年事業として必ずこの山に登ろうと誓いあったのだった。その後1955年にカラコラム、ヒンズークシ探検、56年にパンジャブ・ヒマラヤ、57年にスワート・ヒマラヤと調査隊を派遣し、58年にはチョゴリザ登頂と、われわれの遠征はつづいた。59年いよいよ三十周年の前年、この山の登山許可をパキスタン政府に提出したが、中国ならびにインドとの国境問題の故を以て許可を得ることはできなかった。60年、61年と許可申請は続けられたが、一向に許可の見通しは得られない。しかしこの山に対するわれわれの執念は衰えず、60年にはアフガニスタンの最高峰ノジャック登頂に成功し、仲間の経験はさらにつままれていった。61年には今回の隊長四手井教授と高村隊員がパ国に渡航し、必死に奔走したが、その見通しは更に暗かった。しかしわれわれの懸命の努力は遂に在日日本大使館の強力な援助を得られるに至り、時あたかも池田首相訪パの機会に急転直下この計画の許可が得られることになったのである。最初の誓いより八年日、計画決定より四年日、遂にわれわれはこの久恋の山に近づくことを得たのである。

この間この山の唯一の登路である東北面の写真は、私のデスクの上から一刻もはなれなかった。またこの山の付近にたち入った各国隊の記録は常に私とともにあった。そしてこの山の真のむづかしさがどこにあるかは充分に理解していたし、昨年のくれ、会より副隊長を命じられたときには、すでに私には私なりの作戦が決っていたのである。すなわち5500mの峠を越え、5000m前後の無人の氷河を月余にわたる輸送の問題と、60度をこえる常になだれの危険にさらされている比高2300mの氷壁の登攀を如何に安全に行なうかの問題である。このカラコラムの名山が今日まで25年間、各国隊によって試みられなかったのも、この二つの難かしい面をもっているからに他ならない。隊員の選定にはずいぶん仲間の中にも意見がわかれた。有能な気のきいた隊員を以て前者を解決しようとする意見、若い元気の優秀なクライマーを以て後者をのりきろうとする意見、さまざまであった。しかし私はそのいずれもとらなかつた。辺境に住む多くの異邦人を長期に

わたって駆使することが、気のきいた口先のできることであろうか。ヒマラヤ登山になれた有名な外国隊でこの故に反感をかい、ストライキを起こされ、隊が危険にさらされた例を私はいくつか知っている。またこの巨大な山が若さと一、二のクライマーの技術によって登りおおせるものだろうか。幾多、外国の優秀なクライマーがその技術のゆえにゴリアテの犠牲となってあたら若い生命をヒマラヤに散らした例も知っている。多少気はきかなくても、技術はやや劣るとも、誠実で互いの心をかばい合う仲間こそ、この巨大な山に挑み得る最大の要件であると信じていた。そしてこれが私の作戦の根本であった。この点、会が選定した若い隊員については完全に私は満足していたし、これが今回の成功の根本でもあったと信じている。事実この気のきかない凡々たる登山者達は見事に悪名高いバルティスタン人夫を駆使して困難な輸送をやりおおせ、また危険な氷壁の登攀にも、悪天候にも、深い雪にもお互いの心をかばいあって見事にその高さのうちかつたのである。如何なる困難も彼等の顔から笑いを消すことはできなかった。私は、いまこの若い仲間を心から尊敬すると共に誇りに思っている。

今回の登山はパ国のカラコラム・クラブとの合同登山であって、こうした経験のないわれわれはかなりやりにくい面もあった。事実登攀に参加した二人のパ国隊員は殆んど経験もなく、登山技術については初心者に近かった。彼等はこの二人をよくいたわり、教え、遂にはそのひとりを自分たちの登頂を犠牲にして、頂上にまで立たしめたのである。これはなみなみならぬ努力と言わねばならない。勿論登頂したパ国隊員バシール (Bashir) 君は、精神的にも体力的にもすばらしい青年であった。この異国のこのすばらしい新進登山者を友達に得たことは、われわれにとってこの上ないよろこびである。

われわれのなしとげた行為は一つの山登りという取るにたらないものであるかも知れない。しかし、若者が困難な未知の世界に敢然として挑む心の多少には、やはり民族の消長を思わざるを得ないのである。

夕日に美しいカラコラムの高峯は、今回は頂きをゆずったがこの次にはきっと辛い目にあわせてやるぞといわんばかりに空を圧して連なっている。しかし私はこの峯々に次のように答えながら、たのしい帰路をたどったのであった。

「それは君たち、カラコラムの山々は高いだろう。しかし決して人の心よりは高くはない。」

サルトロ・カンリ遠征概記

四手井 綱彦

前記：一この文は、当時現地より内地新聞用に書かれたものが、都合によりけい載されなかったものをここに再生したものである。話ののちの平井氏の「キャラバン」とだぶるところもかなり多いがこの両文をあわせ読まれて往路の行動の概略を知って戴ければ幸いである。 —編集者—

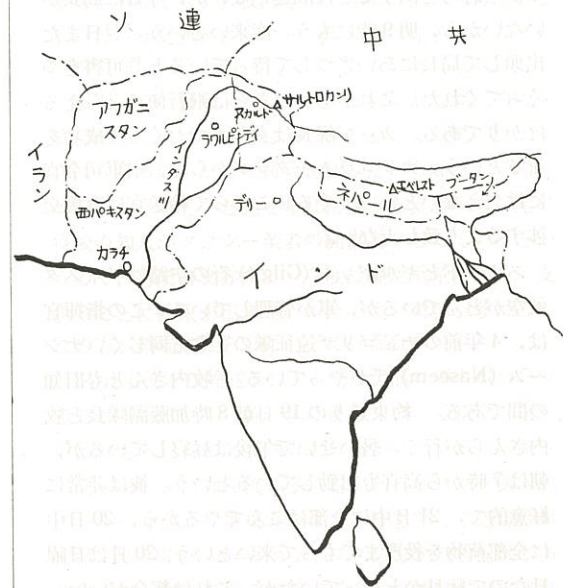
1) カラチからラワルピンディへ

5月11日夜、予定通りカラチ空港につく。大使館の米田さん、先着の林以下の隊員、連絡将校のバシール大尉 (Capt. Bashir) 等にむかえられる。バシール大尉は28歳、早くからカラチに来て出発準備をよく手伝ってくれた由。大使館の一方ならぬ援助と先着隊員の活動とで殆んど準備が完了している。船でもって来た荷も2台のトラックでラワルピンディ (Rawalpindi) に向い、上尾隊員の乗った車はもう先着している。平井隊員の車はエンジン故障で立往生中、暑さでやられねばよいが。

昨年来、この遠征隊に献身的な援助をしていただいた大使館の牧内書記官がホテルに現われる。隊に同行していただくことになっている。感謝の外はない。

翌日は土曜日である。午前中は大きいそぎであいさつまわり、夜は大使館に招かれて心づくしの御馳走になる。みんな昨夏以来の旧知なので、おそくまでくつろぐ。平井隊員の乗った車も20時間おくれてピンディ着、日本語、英語、ウルドゥ語まじりの電報がくる。これで安心。

去年出した申請書と隊員を変更したことが、外務省



で一寸ひっかかっていた。これも14日には解決して許可が出る。15日早朝ラホール(Lahore)に発つ。斎藤、谷、岩坪の3隊員は、ビンディに直行する。

ラホールの空港からの路は何度通っても美しい広いみどりの森と芝生の中を走る。日本にもこんな路がほしい。今日はお祭りの休日で夕方からにしてほしいとベグ(Beg)教授は言う。教授はカラコラム・クラブの副会長で、この遠征隊のパキスタン側隊長である。ラホールへ来たのは教授と打合せのためである。今日はイスラムの大きいお祭りであることを承知で来たのだから致し方ない。官庁も事務所も明日は休みである。カラコラム・クラブの準備はまだ充分できていない。ベグ教授等3人は6月15日に発つ。それ以前には立てないという。それではと日本隊のみ予定通り先行することになる。去年から約束してあった軍の飛行機をスカルド行きに借用する件も、20日以後でないと成否はわからぬという。とにかく18日に空軍司令官に接触するよう約束する。ここで始めてパキスタン側の若手隊員ペルベツ(Pervez)に紹介される。パンジャブ(Punjab)大学の学生で好青年である。5日に試験がすみ次第、日本隊のあとを追いたいという。昨秋から留学している前小屋は病院に入っている。彼も近く退院してあとからくることになる。2日間の打合せを終って、16日の夕方ビンディにとぶ。1ヶ月半振りて全隊員が集結した。皆それぞれ大活動して少々疲れ気味である。ビンディでの主な仕事は、カシミール省でカシミール入りの許可をとりつけること、スカルドへの空輸計画をたてること、現地調達物資と食料の買付である。21日ビンディ発が予定される。

まずカシミール省に出頭し、ケイ・エッチ・カーン(K. H. Khan)課長に会う。外務省から連絡が来ているから許可を出すことは間違いないが、今日は局長がいらないから、明9時にもう一度来いという。翌日また出頭して局長にあいさつして待っていると許可書をつくってくれた。これがあればあとは飛行便をとらえるばかりである。カーン課長は玄関までおきて成功を祈るという。カラコラム・クラブからは、空軍司令官には会えないといってくる。こちらで輸送官に直接交渉するより致し方ない。

スカルドとギルギット(Gilgit)行の空路はパキスタン航空がとんでいるが、軍が管理している。この指揮官は、4年前のチョゴリザ遠征隊のときと同じく、ナシーム(Naseem)氏がやっている。牧内さんとも旧知の間である。約束通りの19日朝8時加藤副隊長と牧内さんらが行く。暑いせいで午後は昼寝しているが、朝は7時から高官も出勤しているという。彼は非常に好意的で、21日中に全部はこんでやるから、20日中に全部荷物を役所までもって来いという。20日は日曜日なので駄目かと思っていたが、これは都合がいい、

トラックも世話してやるという。ただし、飛行機の運賃は負けられぬと言う。目方をごまかすと過重になって危険だとのこと、もっともな話で致し方ない。

この日は忙しい日だった。10時から文部次官のお茶によばれていた。大統領に会うことは残念ながら何うに時間がなく帰路になる。若手隊員は物資の買付、地図の取得等、バザールから官庁へと走りまわる。

ビンディでは、パキスタン側の若手隊員第2号が現われた。バシール(R. Bashir)(24歳)という。ホテルの中のパキスタン航空の事務所につとめている。カレッジを出て中学の先生をしばらくしたこともある。今の勤めはアルバイトで秋には大学へ入りたいと言っている。日本隊と同行することになる。

同じホテルに、ナンガ・パルバット(Nanga Parbat)を試みるドイツ隊が泊っていた。ヘルリヒコッハー博士(DR. Herrligkoffer)を隊長としている。時々食堂で見かけたが、遂に会談の機会を得なかった。若い女性隊員が一人いたので、若手の連中も残念がる。

2) スカルド(Skardu)へ

5月21日、スカルドに飛ぶ日である。昨夜は築山さんのパーティに一同招かれてよくねむってしまった。加藤副隊長におこされる。時計を見るともう出発の時間である。5時15分前に空港につくことになっている。副隊長は少々あわてている。車もまだ来ていないし、牧内さんの室をノックしても電話してもでてこない。

幸いにも今朝は快晴である。これなら今日は飛べる。この飛行は天候次第である。雲があると欠航になるし、飛び出しても目的地直前から引き返すことが度々ある。昨夏もギルギット行で2日間待たされた。この飛行はナンガ・パルバットに続く5000m級の山脈をとびこえ、ギルギットやスカルドは、インダス川のせまい谷間の飛行場に着陸しなければならない。翼が岩山に引っかからないかと思わずヒヤリとさせられる。

空港では、昨日はこんでおいた荷物の積込中であった。飛行機はフォッカーの双発フレンドシップ。ギルギット行のDC-3と比べて新鋭である。朝食代りに食堂でお茶をのむ。早くおこされたせいか皆少々食欲がない。予定より少しおくれて6時とびたつ。昨日大統領が出席して完成の式典が行なわれたという新しい首都の水源地が水を満々とたたえているのが見える。パキスタンの軽井沢ともいべき山上の街マリー(Murree)を右に見て、機は山岳地帯に入る。雪の山が美しい。昨夏ジープで行ったカガンバレー(Kaghan Valley)の氷河湖のあたりも雪の中にあり初期のカラコラム探険隊がキャラバンを組んで越えていったバブサル峠(Babusar Pass)もまだ雪にとざされている。

ナンガ・パルバットもはやくからひときわ高く見えてくる。峠を越えると、インダスの溪谷である。谷をこんで荒々しい岩山がそびえている。飛行は快調である。昨年のようにゆれることもない。ところどころに緑のオアシスが見える。やがて右にナンガ・パルバットがま近に見える。ヘルマンブールが一人で往復した長い稜線、マンメリーはじめ多数の犠牲者をのんだ氷の斜面が静かに輝いている。だれかが写真の通りだと叫ぶ。左の窓からははじめて見るあこがれのカラコラムの秀峯が立ちならんでいる。

岩山の間をとぶことしばし、翼から車輪がとび出した。もうスカルドにきたのである。砂けむりを立てて機は広い河原の飛行場に着陸する。軒の低い建物がならんだ簡素な飛行場である。われわれ6人がおけると、荷物が次々とおろされた。私達は二つ立っているピーチパラソルの下にひと休み。若手隊員は荷物の管理に忙しい。これで暑い平原の都会からもわかれ、文化圏からも遠く離れて、未開の地カラコラムに入ったのである。

宿舎であるレストハウスに向う。柳がところどころ茂っている砂道をトラックで走る。道端に小さいあやめが花をつけている。高いポプラが立っている。インダスの河原は白々と輝いている。レストハウスに着くと人ばかりである。フンザ帽をかぶりうすよごれた布をまとった人々がむれている。チョゴリザ遠征隊の隊員であった、加藤、平井、岩坪、高村の四人には当時のクーリーやポーターだった人々が早速かけよって握手している。中にはだきついて涙を流しているものもある。バラサーブにも握手してくるものもある。桑原バラサーブと間違えているのかもしれない。スカルドは今西隊も来ているので日本人を知っている連中も多い。

天候は午後くずれて雲が出て来たが、一便の貨物機を含めて3便の飛行で全隊員と荷物は全部空輸できた。誠に幸運であった。

どこからききつけてくるのか、高所ポーターの経験をもった連中がうすよごれた証明書をもって、ぼつぼつ志願してくる。チョゴリザへいったイスマイルは、もうポーター顔で荷物の世話をしている。レストハウスの芝生に荷物を集積し、テントを張る。荷物を飛行場に運び残したので心配していると、警官が2人夜中見張りをしてくれるという。レストハウスにも警官が2人来て見張りをしてくれる。この警官はとうとう11日間庭にベッドをもち込んで24時間ぶっとうして、警戒に立ってくれた。

3) スカルドからカパルー(Khapalu)へ

スカルドでの第1の仕事は、奥地への装備の輸送計画を立てることと、こく暑の中で走りまわったために

多少疲れの出た隊員に休養をとらせることである。まず翌日から、輸送計画の検討がはじまる。方法は三通りある。一つはクーリーをやとってここからキャラバンを組織することである。この方法は従来からとられている方法で、チョゴリザのときもここでキャラバンを組んで谷をさかのぼっていった。第2の方法はロバや馬をやとって、荷物を輸送すること。第3の方法はここから上流約60マイルのカパルーまでジープを利用することである。クーリーをやとうことはさして困難でない。毎日朝からクーリー志願者がレストハウスのまわりに多数すわりこんでいる。しかし、クーリー賃が上っているの、なるだけ外貨を節約しなければならない。ロバや馬は山におい上げてあるので、集めるのに4~5日かかる。これは経済的には最も安上りであるが、いろいろ問題が多い。最後に残るのはジープ輸送であるが、約12~13回の往復を要することになる。クーリーをやとって歩いてゆけば、4日でゆけるのに、これでは一週間以上もかかる。しかし、早く出てきたので、日数には余ゆうがある。経済第一の立場でジープをとることにする。遠征隊がジープを使うのは、これが始めてである。今後の先例にもなる。スカルドには、タクシ・ジープ(Taxi Jeep)は2台しかない。ほかには、この地域を統轄する政務長官ともいべきP.A. (Political Agent) と呼ばれているもの下におかれている。ラウルビンディから日本大使館名で遠征隊への援助を依頼する電報を打ってもらってあったのだが、あいにくP.A.もA.P.A. (Assistant P.A.)も不在で、28~29日頃にならないとかえって来ないという。P.A.がすべての権力をにぎっているの、彼が不在では、P.A.のジープを借りる訳にはいかないし、タクシー業者にも交渉がしにくい。足元を見て高いこと吹きかけてくる。牧内さんと連絡将校の努力でやっと一台だけ交渉がまとまり、23日から輸送することを契約する。

23日の朝、約束通りジープがやって来たが、荷物を積むためにホロをはずせというと帰ってしまった。一回いくらの約束なので荷物を積みたがらない。「これがパキスタンだ」と見せられたような気がする。連絡将校の知人がタクシー業者の経営者をしていっているの、再度の交渉する。今度は輸送重量によって支払うことに約束が出来る。カサの高い荷物が多いのでこの方が結局はこちらにとっては都合がいい。

24日早朝から輸送をはじめる。門前の柳の木からつるしたバネ秤で一個一個計量してつんでゆく。周りには6時というのに見物人がつめかけている。エキスペディションには経験の多い岩坪とパキスタン側隊員のバシールが、一番乗りをする。今までこの辺境地帯では、人の肩か、ポニーか、ラクダ位しか貨物輸送の方法はなかった。最近この地方でジープ道路が開発され

つつある。バブサル峠を越えてギルギットまでジープ道路が通じている。ギルギットからスカルドまでの路も、現在建設中である。天候に左右されて、何日も待たねばならない飛行機輸送にジープがとって代る日もくるにちがいない。昨年も貨物を満載してぞくぞくと峠を越えてゆくジープを見て、ジープの文化的価値を見直した。しかし、この道路は、車一台分の巾しかない。それが急峻な岩壁にきざまれている。しかも急な登り下りがある。キモをつぶしたことも度々であった。カバルーへの路もどんなであろうか。昨年高村が一度通ってはいる。無事につけばいいが。

途中でもう一台の業者も2往復、P.A.の小型トラックも借りることができた。結局10往復で、隊員12名と貨物6.5トンばかり輸送が完了した。もう5月も終りである。

スカルドのレストハウスは広大なインダス川の段丘の端にある雪をいただいた4000~5000mの山にかこまれている。気候も日中は日射しが強いが朝夕ははだ寒い。午後になると風が出て、砂嵐が吹いてくる。これはどうにもならない。どこも砂まみれになり、山も曇って見えた。毎朝ジープを見送ってしまうと、朝食になる。エデ玉子とチャパティとミルクのたっぷり入った紅茶がでる。11時頃にまたお茶をのむ。パキスタンの紅茶は世界一だと連絡将校は自慢する。いや日本のお茶が世界一だと誰かがまげかえす。日本からもって来た玉露を彼はよくのまない。パキスタン人は甘いものか、辛いものしか分らんのではないかと誰かがいう。味の素のよさもわからぬようである。2時頃にランチ、夜食は8時になる。ひると夜は、羊の骨付肉の入ったカレー汁、チャパティそれにポソボソしたパキスタン米の御飯、時たまニワトリが出る。野菜がないので皆閉口する。もうトウの立った道端の菜種の花をつんで来て菜の花漬けをつくる。仲々おいしい。大根の塩漬をコックにおしえたりする。

加藤副隊長は毎朝夜明け前につりぎおをかついて、河原に下りてゆく。若手の隊員が一人二人ついてゆくと皆素人である。仲々獲物がかからない。遂に最後の日に十数尾をあげて貫禄を示す。隊長は毎日日本からの海外放送を捕えようとして遂に成功した。合わせて老人の執念だと若手がいう。

快晴の一日、はるばるもって来たゴムボートを浮かべる。仲々快適である。釣りをたのしむものもある。子供達が寄って来て、ボートにのせてもらう。どこへいっても子供達は可愛いものである。写真機を向けると逃げ出す子もいる。のどかなスカルドの休日。

貨物をジープで送ることがはじまると、クーリー志願の門前の連中も日に日に減ってくる。カバルーでやとわれるつもりで行ったにちがいない。高所ポーターの志願者も内定した。連中はあいさつをしてカバルー

に向って行く。裸一貫であるから気楽なものである。

サーダー(ポーター頭)は、スカルドで決定した。隊員と共にジープでカバルーへ先行する。パキスタンにはネパールのようには、シェルパはいない。インドから連れてくることもできない。現地人で探検隊にクーリーとして参加したものが経験を積んで高所ポーターになる。彼等は参加した隊からのお墨付もっている。サーダーになれる資格の持主は余りない。サーダーにしたグラム・ラスールは見たところ仲々紳士である。赤いチェックのワイシャツ等着込んでいる。靴もちゃんとはいている。ズボンもあのだぶだぶのパキスタン風ではない。彼はラダック(Ladakh)の出で軍隊にもいたという。57年以来5回のエキスペディションに参加している。60年のアメリカ隊に参加してマッシュャーブルム(Masherbrum)に登っているし、昨年はオーストリア隊とゲント(Ghent)にいっている。

28日にP.A.が帰ってきた。早速面会を申し込む。今日は白いワイシャツに背広という第一装でゆく。お茶を御馳走になり、歓談する。帰路の援助をたのむ。彼は全く紳士である。

スカルドからカバルーまでのジープの旅は天気がよければ快適である。私の通った29日はあいにく天気が悪く、時々冷雨に見舞われて困難した。広河原を行く、広い砂原もあれば大きい岩石の乱立したところを右に左にぬってゆくようなところもある。奥に行くに従って、岩壁をへつって行くところもあり、時には岩山の急な傾斜をジクザグで越えてゆく。岩壁の中程に巧みに水路を開いて、思いの外豊かなオアシスができてい。変化があつて面白い。あの水は山上の万年雪から出てくるのか、雲がかかって見えない。

人々の顔立ちも何んとも東洋人的なものを感じる。女性もちらほら見える。逃げかくれはしない。みな物めずらしそうに見送っている。手製の下駄をはいている男に2度ばかり出会った。日本の下駄と違って左右がある。大多数はやはりはだしである。ドライバーの運転は極めて慎重である。とうとう6時間かかって、カバルーの川岸につく。たちまち住民にとりかこまれる。迎える隊員は向う岸からザークで渡ってくる。水の流れは毎日増水しているというが、まだ100m足らずである。流れを渡って砂の川原を横断30分、古いモレーン(Moraine)のかけの芝生にあるテントに迎えられる。気持ちいいテント地である。いよいよエキスペディションに来たという感が深い。

翌31日には総員カバルーに集結。6月2日出発と定める。昨日の雨は山上は雪だったのか、4000m以上は新雪に美しい。サーダーのラスールの他6人のハイ・ポーター(High Altitude Porter)を採用する。イスマイル、バクリー、石の地藏さん(オラム)、シワと4人のチョゴリザ組が入っている。本名よりアダ名の

方が覚え易い。みんな服装を支給されて、見違えるようになる。

午後は流しの芸人がやって来て、テント地のそばでおどりがはじまる。おどり手は群集の中からでる。〇〇やれというような声がかかる。伴奏はフェエとタイコ、おどりも日本のおどりになんとなく似ている。音楽もお神楽みたいである。このおどりは夜ついでに行なわれたらしい。キャンプ地の後の林から暁をつげるころまでタイコの音がきこえていた。翌日は荷物はこびのクーリーを200人程やとい入れて出発準備を完了する。

4) サルトロの谷へ

5月31日、全隊員はカバルー(Khapalu)の対岸サリン(Saling)のテント地に集結を終った。カバルーには、このあたり一帯を支配するラジャーがいる。先着の隊員はお土産をもって挨拶の訪問をしているが川を渡って行かねばならぬので、隊長の訪問は帰路にした。この地方のバルチスタン語と日本語との単語の中に同じものがあると上気嫌だったそうである。

明日の出発を前にして、6月1日クーリーの雇入れをする。毎日テント地の西側にはクーリー志願者が200人程終日すわり込んでいたが、今日は早朝から400人以上もつめかけてくる。例のダブダブのズボンに毛布のような布を肩からかけている。帽子はフンザ帽がうんと減って、丸い羊毛でつくったオワン帽を被っているものが多い。この帽子は水飲みにも使える。

この大群の中から約170人をえらぶのである。連絡将校とサーダーが主役で、警官が一人立合う。

志願者達はこの流域の村々から集ったもので、中には4~5日かかる谷からもきている。まず地域別に代表格のもの10人余りをえらぶ。つぎに各グループ毎に一段と低い芝生に座らせる。これが一騒動である。鞭をつかって整列させて選定がはじまる。経験者を中心にえらんでゆく。以前に外国隊に雇われた証明書を差し出すものもいる。えらんだ者を上段に座らせる。パシール隊員も言葉が通じるので活躍している。一寸油断していると下段から上段の列へ飛び込んでくるものがある。鞭で追い返されるもの、座り込んでつまみ出されるもの、大さわぎである。現金収入が得られるまたない機会であるからみんな必死である。5時間ばかりかかって172人を雇入れる。落選した人々も去りがたく、番号符をわたされる人々を見ている。

いよいよキャラバンが始まる前夜というので、盛大なキャンプファイアをたく。紫がかつた焰が上る。アンズの木だという。歌声の絶え間にカジカの声がきこえる。村には夕べのお祈りが今日もこだましている。星空が美しい。

6月2日、山には少々雲がかかっていたが、新雪に

朝日がかがやいている。

6時、6つのグループに分れて、ポーターの指揮の下にクーリーの一団一団が、色とりどりの荷物をせおってサリンの村に入ってゆく。隊員は先頭・中央・後部の三つに分れて隊列に入る。隊長、副隊長等一隊は三頭の白馬にまたがって中央を行く。村はずれのとある家の窓が開く。女性の顔が見える。バラの花束が差し出される。よい香りがする。胸にさしてゆく。前途を祝福してくれるのかこのあたり野生のバラは時に見かけるが一重である。八重のバラはどこに咲いているのか。クーリーもポーターもバラをさしているのを見る。上流になると柳の白い花をさしている。オアシスの緑の外は荒涼たる地域である。色彩を愛しているのかと思ったが香りであるらしい。このあたりはショウク(Shyok)河に、フーシェ(Hushe)とサルトロ(Saltoro)の二つの支流が合するところで、3~4哩もある広い河原である。真白い川砂がひかりかがやく。私達の行先はサルトロの谷であるが、橋はかかっているし、川は雪解けて増水している。サルトロ川の合流点を右に見ながら、北へフーシェの谷に入る。雪の合間にマッシュャーブルム(Masherbrum)の秀峯が見える。アメリカ隊に登っている。よく登ったものだ。

約5哩谷をさかのぼり橋を渡って左岸にとりつく。右岸には村々がつづいてきたが、左岸には橋を渡ったところのバラゴン(Baregon)以外には村がない、ガラガラ石の台地や急傾斜をへつって道がついている。今日の泊りはサルトロ川の入口フルディ(Huldi)の村である。村はずれの丘陵地の芝生にテントを張る。ここでは谷がせまく谷の水は巨石の間を流れ、一寸日本の谷のようである。水は白くにどっている。

第2日はまた広くなった川原を右に見ながら右岸に行く。左岸にも道がある。午前中にチノ(Chino)につき河原に宿営。林の後には巨大な岩峯がつづき、林の緑との対照が美しい。齊藤ドクターが村人の診療をはじめた。

第3日も再び河原の台地を行く。明らかに氷河の削痕と思われる赤ちゃけた花崗岩がころがっている。3時間足らずでコンダス川(Kondus)の出合につく。サルトロ川はここでコンダスとダンサム(Dansam)と二つの谷に分れる。コンダスの谷は上流に大きい氷河をもち、シア・ラ(Sia La)をへてシアチェン氷河につづいている。またサルトロ・カンリの東南面を氷河ではいる支流もある。約30年前ハント(J. Hunt)はこの谷奥のドンゴン(Dong Dong)氷河をへて、サルトロ・カンリの登頂を試みている。この登路は最短路ではあるが荷物の輸送がより困難と判断して、われわれはビラフォン峠(Bilafond La)を越えてシアチェン氷河への道をとる。

コンダスの出合では、昨日連絡してあったので、ダ

ンサムの人達が橋をかけてくれている。私達乗馬組はその下流を渡る。村人は乗馬はお手のもので、何回か流れを横ぎって隊員を渡ししてくれる。この村を過ぎると道はダンサム川の左岸にうつる。ここには橋がある。谷はこのあたりからせまく、兩岸は絶壁つづき、畑をつくる余地もなく、泊り場もない。今日は強行軍である。夕方谷がひらけてマンディク (Mandik) の村をすぎたところで泊り場を見つける。ポログランドにでも使うのか。川原沿いの広い芝生である。星が日本の10倍もかがやいている。

キャラバン第4日は再び開けた広い河原と畑の中を行く。大快晴雲一片も見当らない。昨日の入れ合せて今日は半日行程で最奥の村ゴマ (Goma) につく。村に入る前、右岸にはじめて氷河を真近に見る。アイスフォールが岩壁の間に青白くかがやいている。ゴマには二三日滞在して食糧の補充とクーリーの雇入れをする予定である。

この四日間、多くの村々を通り過ぎた。どの村も豊かな水にめぐまれて畑に麦がのびはじめている。石垣つみの段々畑である。長い柄のついた小さなスコップで、無造作に水を自分の畑に引いている。水争いもなさそうである。村には柳、アンズ、リンゴがしげってその下に石積の二階家が密集している。階下は家畜の住家らしい。大きな家では石垣を広くめぐらしている。石・石・石である。村中の通路はせまく、迷路のようである。やっと一人が通れるくらい。村人はめずらしそうに一行を見に集ってくる。中にはラシー (乳製品) をすすめてくれる老人もいる。容器がいつ洗ったか分からないので一寸辟易するが、なかなか美味しい。ニワトリ、玉子を売りにくる。羊肉とともにこれらが毎日の食料になる。キャラバン中は現地食である。野菜がないのが閉口である。畑に咲いている菜の花をつままして花漬をつくる。ノビルのような野草の塩漬をもってくる。ピリッとして風味がある。日本人は何んでも食べるとポーター達は感心している。

谷をさかのぼるにしたがって女性が開放的になってくる。村を通ると赤ん坊を抱いた婦人連が集まって見ている。写真を撮っても町のように逃げかくれはしない。斉藤ドクターの診療にもマンディクやゴマでは母親が子供をつれてくる。女性の一団がテントの近くでながめている。このあたり家畜の放牧は主として女性の役目とさく。女性が解放的なのは宗教的な相違からかも知れないが、女性の労働力が大きい地位を占めているからではなかろうか。隊員の奥さんそっくりの女性に会ったという報告もある。東洋的な顔立ちが多い。

ダンサムから谷に入るとサルトロ川の流域に比べて風景が一変する。ここではアンズもリンゴも生えていない。段々畑のところどころに柳が淋しげに立っ

るばかり、畑の作物も麦がへってエンドウがふえてくる。ソバが芽を切ったばかりである。カナガラが黄色い花をつけている。高山植物らしいのがところどころに咲いている。荒々しい風土が人の心にも影をおとすのか、マンディクでもゴマでも、泊地では村人とトラブルが起った。ここは高度3000mを越えているのだ。よくもこんなに住みついているものだ。

5) ビラフォンド氷河へ

6月5日に最終の村、ゴマについて、ここを出発するのは9日になってしまった。村の代表達はクーリー200人を全部入れかえないとアタもキャンプ地の燃料も供給しないといい出す。連絡将校が大奮闘する。彼の権力と弁舌とはは仲々解決しない。すぐ下流のガガル (Gagalu) の村人が協力することになって、ゴマの人々も急に折れてくる。出発予定を1日延期して1トンのアタが調達される。カバルーから荷物をかついで来た人々の中、35人が希望退職してかえってゆく。新たに50人を雇い入れて、キャラバンは約220人となる。高所ポーターも二人を補充する。

この四日間、テント村ではエンジンがうなり出し、高所医学のため隊員とポーターの心電図がとられる。日照計、気圧計、風速計が動き出す。隊員は思い思いに調査にでかける。谷の奥から午後4時を過ぎているのに雪崩の音がきこえる。夕方になると流れがにがり、水量が急に増してくる。山の雪線も晴天続きで大分上ったようだ。きのうまであった橋が一夜のうちに流されている。現地雇入れのクーリー達が流れた橋木をどこからか拾ってきてかけ直す。手なれたものである。

今日はビラフォンド氷河の末端にあるギャリ (Ghyari) までである。6時に出発して10時にはキャンプ地に着いてしまう。下の村から家畜を追い上げている牧場である。広いけれども乏しい草地に羊・山羊・牛・ヤク等が放牧されている。牧人の住居と家畜の囲いが石積でつくってある。氷河の末端付近までは白い広い河原である。兩岸には柳・バラ・ジュニパーの林が茂り、その中を氷河の水が流れる。谷は典型的なU字谷で、花崗岩の巨峯が兩岸にそびえている。右岸の岩峯の間からも所々小さな氷河が押し出している。

アイベックスだ。その声に双眼鏡を向けると、岩壁の下に5頭のアイベックスが見える。村人の眼の好いにおどろく。われわれも村人も、武器をもたない。アイベックス、スリーピングとポータがいう。このあたりは狐や狼もいるらしい、獣や小鳥の楽園である。

6月10日よいよ今日は氷河にとりつく、左岸からチュミック (Chumik) 氷河が合流して広大な末端をつくっている。左岸を登る。見たところ高さ150m位に見えた。モレーン (Moraine) のガラガラ石は行けど

も行けどもつきない。いたるところ氷壁に囲まれた池がある。美しい青水の柱が立っている池もあるが、美しい池だとはいえない。モレーンからとけ出すどろ水をたたえている。モレーンの山を越え、氷の池を廻り、巨岩の間を行く。今日もアイベックスが二頭間近く走り去る。クタクタになって右岸の泊り場につく。クーリー達は岩の下に石を積んで泊り場をつくる。今日は午後から大分雲が出た。4日以来の大快晴もこれでくずれるのではない。風が寒い。

6月11日ビラフォンド氷河も上流らしい形態を現わしてきた。広い雪面上に五筋ばかりのモレーンの流れが走っている。右岸寄りのモレーンを伝ってゆく。今はモレーンの山も小さく歩き易い。右からも左からもアイスフォールをつくって氷河が合流している。中々壯観である。雪面の部分が多くなり、クーリーから雪眼鏡の要求がでる。今日も行程は短く、午前中に本流のアイスフォールの直下につく。慎重にテント地を選定する。モレーンの山を一つ越えた中央のモレーン上にキャンプ地も定める。かくれたクレバスが多いので初めてロープを出してクーリー達を渡す。氷の面をビッケルで平にしてテントを張る。賃金の支払いで一悶着あったけれども、ビラフォンド峠越えの要員70人を残してクーリー達も帰ってゆく。下流の方に悪い雲がでている。

6月12日ベースキャンプ地の整理がはじまる。荷物を集積して快適の食堂ができ、その近くに調理場の赤いテントができ上る。テントをつなぐ道路をつくる。4800mのモレーン上に基地ができ上る。午後から小雪が降る。ガスの中にパキスタンと日本の国旗 AACK の会旗がはためいている。峠は曇って見えない。明日からビラフォンド峠越えの作戦にかかる。

6) 作 戦 開 始

7月に入ればカラコラムでは快晴がつづく、というのが私達の予想だった。はたして7月の4日雲一片も見られない大快晴の日が来た。しかしこの快晴も8日までだった。その後は日は照っても山には雲がかかり時には雪が降る。とくにサルトロ・カンリはいつもその南側のリカ氷河から吹き上げてくる雲に中腹以上とざされている。

5日に前進キャンプへ出発した林隊、7日に後をおった加藤隊は、幸いにもこの悪天候の中にも予定の計画を進めることができた。19日、20日と降雪をともなう悪天候のあとをうけて待望の快晴がやってきた。23日早朝第一登頂隊は、第五キャンプを出発する。午後になって天候は依然快晴であるにもかかわらず、登頂隊との連絡がとだえてしまった。

サイトウ隊、感あれば応答せよ……アタック隊感あれば応答せよ……C₄ から、C₃ から、C₂ からのトラ

ンシーバーの発信に何の応答もない。夜になっても連絡はとだえたままである。どこかに露営しているにちがいない。アタック隊長の斉藤君は、はじめての遠征とはいえ、多年の冬山の経験を持ち、在学時代は山岳部のリーダーであった。信頼できる岳人である。この遠征隊でも食糧係、医療係をつとめ、ピラフォンド峠越えの困難な荷物輸送をよく計画通りやってのけた男である。つづく高村隊員は先年のチェゴリザ遠征隊員であり、昨年は単身少数のポーターを連れて、リカ氷河よりサルトロ・カンリへの道をさがした男である。パキスタン側のバシール隊員は経験も浅く、多少の不安がないでもない。しかし2人がついていいるから心配はない。しかし一まつの不安はのこる。

24日朝になっても連絡はない。C₄ に上っていた林隊が迎えに登高する。12時の交信時間になった。こちららはアタック隊、こちらはアタック隊……10.45登頂しました……これから下山にかかります……。元気な声が私のC₂ できいていたトランシーバーに入ってくる。いつも不安そうに遠くから私のトランシーバーをながめていたポーター達も、いつの間にか私の周囲に集っている。登頂成功の報に彼等の顔も輝いている。丁度C₂ に上って来ていたカラコラム・クラブ副会長のベク (Beg) 教授も、バシール隊員の登頂にひとしおのよろこび、これはわがクラブのみならず、全パキスタンの喜びであると握手を求めてくる。

もうあとは下降のみである。天候もまだ崩れない。午後5時25分C₃ のある稜線上に豆つぶ程の3人の姿が現われる。これで登頂は完成した。

こうして世界最大の山岳氷河シアチェン、その流域の主峯、サルトロ・カンリは1962年7月24日われわれによって登られたのである。

キャラバン

平 井 一 正

カラチ (Karachi)

カラチには5月6日の昼着いた。神戸を出てからちょうど1ヶ月。飛行機で先発した隊員の林、高村が船まで迎えに来てくれた。着岸してもなかなかおろさないタラップに業をにやした林さんが下からどなる。

—何故タラップをおろさないのだ。—

—着岸したらすぐおろしますよ。—

—ナンダトオ、船長みたいなこと言うな。—

カラチの土を踏まないうちに早速どなられた。

船に積んでいた荷物をおろすのはまだ2、3日かかる。ひとまずタージ・ホテル (Taji Hotel) におちつ

く。荷物の個数は全部で約 200、重量は約 6 トンであった。

5月9日にこれらの荷物が船から運び出された。荷物が全部集ったのを見るのはこれが初めてであった。日本大使館は荷物の無税通関について実によく世話をしてくれた。私たちはすべての荷物を、チャーターした2台のトラックでラワルピンディ (Rawalpindi) まで運ぶことにした。事実それがいちばん確実で早いのである。しかし、かけがえのない遠征隊の荷物であるだけに、このトラックには隊員が1人ずつ乗って行くことにした。上尾と私が選ばれ5月9日の午後9時、トラックでカラチを出発した。他の隊員はカラチ、ラホール (Lahore) で用事をすませて、飛行機でラワルピンディに飛ぶ予定である。

トラック旅行

カラチからラワルピンディまではおよそ下関から青森ほどの距離である。トラックは5トン積程度。1台について正運転手の外に助手がつき、交代で車を運転する。9日の夜は雨でつぶれたというガタガタの砂漠の道をつっぱしり、3時間程道ばたでござる寝る。大陸の夜は暗黒で得体の知れぬ恐怖に迫られる感じがした。

暑い日だった。2日目の午後1時ごろ、1台のトラックが故障してしまった。給油ポンプが折れていることに気がついたのは2時間もしてからだった。ここでは修理はできない。クワイヤルプール (Khairpur) まで他の1台にひっぱってもらい、ここで別れた。私が故障の車に残った。

ここはサッカル (Sukkur)、ローリ (Rhorli) と並んでパキスタンで1番暑い所だそうである。事実トラックがついたのは夕方6時だったが、太陽は砂煙りのためか度霧を通して眺めるようにかすんでおり、熱気はむんむんとしていた。たまたぬくらしい暑さであった。

羊肉とチャパティのばんめしを食って、郵便局に事の次第をカラチに知らせるべく電報をうちに行く。トラックの運転席に横になってウトウトしようとするが、修理屋がガンガンとやっていると寝られたものでない。

5月11日

トラックの運転手は40歳ぐらい、名前はミンナ、助手はアクバルといい、26歳。彼等は実に親切にしてくれる。ゆうべは郵便局へ馬車でつれていってくれるし食事はすべてミンナがおごる。そして今朝はめし屋のうらへつれて行き、タライ1杯の水を用意してくれてこれで体を洗えという。昨日から40°Cを越す砂漠の中を走り続けてきたので皮膚はかさかさで砂まみれである。これ程うれしかったことはない。体を洗ったら実に気分そうかいになった。

ミンナとバザール(市場)に行きパイプの溶接をたのむ。このバザールは大きく一応大がいのものはある。病院もある。しかし照りつける太陽の強烈さには参った。すべてはかさかさに乾いている。半そでにポロシャツという私のスタイルはここでは通用しない。巾の広い長ズボンと袖の長いシャツで出来るだけ皮膚の露出部分を少なくしなくてはならない。

余り水のみすぎたためかひるめしの羊肉とチャパティには食欲がなかった。ミンナが心配して何か好きなものをいえという。ムルギ(ニワトリ)はないかときくとないという。"あしたは着かさ"と慰めてくれる。何度もめしを食いに来て顔なじみになっためし屋の番頭マンズール・フセインがこの界わいでの唯一の英語使いだ。20歳のこの青二才は親切にしてくれるが、すぐ帽子をくれたの万年筆をくれたのやかましい。そして私が30歳だというと目を丸くして、それからというものはこのめし屋に立ちよるトラック運転手仲間とさかんに私の年を宣伝する。まるでいい見世物である。しかし運転手の中にはこのジャパニ・サーブに握手を求めにくるものもあり、戦争中のことについて語ったのもいた。皆すごい体格で私の少なくとも3倍はめしを平げる。マンズール・フセインはいう。ミンナはグレート・マンだ。偉大な紳士である、と。たしかに彼はパキスタンには珍しい人間だ。乞食にはおめぐみをする。横でみている子供にめしをおごってやる。

午後2時ごろ寒暖計は45°Cを示す。熱風にふかれると気が狂いそうになる。万年筆の金具、時計の金具がさわれない程あつい。めし屋にいますと熱風にふかれてたまらないので、トラックの中に移る。トラックは野天だが、しかし少しはましだ。アクバルがゴップに水を入れてきてこれで手拭いをぬらせという。よく気がつく奴だ。ビショビショにした手拭いがカラカラに乾くのに15分とかからない。

ミンナとアクバルは小さな小屋の中で職人あい手に何かゴソゴソやっている。前部を分解したトラックをみていると果して今日出発できるのかあやしくなる。無数のハエだ。このまちを歩きまわってもつまらないのでじっと時間が過ぎるのを待つ。いろいろとやったが結局この修理屋は自分の手におえないと悟った。別の修理屋から応援をよんできた。そしてどうやらメドがついたらしい。5、6人でばんめしも食わずにがんばっている。熱気がこもるまちを再び馬車で郵便局まで電報をうちに行く。午後11時半ごろやっと修理が完成する。調整に1時間程かかり出発したのは夜中の1時近かった。このまちには30時間程滞在したわけだが、いろいろな人間としゃべってぼくは彼等の人となりを知り、暑さで苦しんだわりにはその印象はよかった。

5月12日

ランタンをつけてラクダの隊商が夜の街道を進んでいく。トラックは今までのおくれをとりもどそうと夜中走りつづけた。やっと南の砂漠地帯をぬけて北のパンジャブ (Punjab) 沃野に入ったらしい。道の両側に木の緑が流れる。道はムゾフォガル (Muzohorgal) で2つに別れる。右へ行けばラホール経由でピンディへ。左へ行けばピンディに直行する。直行ルートは砂漠の中のいやになる程真直な道だ。道標はアラビア文字だけと変わった。余り外人は通らないのだろう。午後3時砂漠の中で雷がなり、雨がふる。2時間降ったか。雨あがりの砂漠はうそのように寒い。昨日の暑さが夢のようだ。セータがほしい程。

毛をぬくかそるかの話からがぜん話は急転直下。私のつたないウルドゥ語も大いに活躍。どうやらこういう話は世界各国共通らしい。パースコントロールの話からサックの説明(ウルドゥ語でこれをわからせるのは実に大変手間がかかった)。その他Yさんがよろこびそうな話多数。

5月13日

気持のいい朝だった。ピンディまでやっと2ヶタのマイル数になってきた。道に無数のいなごが死んでいる。死がい食べに集まったいなごがひかれてその上へその上へと重なって死んでいくのである。

ラワルピンディには午前9時に到着した。積んでいた荷物は連絡将校の友人のカリッド・カマル (Khalid Khamal) 少尉の家の倉庫にあずかってもらうように手配してあった。上尾の車は一日前到着したようだ。荷物をチェックし少尉に礼を言って、トラックでホテルまで送ってもらう。私は別れの最後の瞬間にミンナが"ボクシス"(チップ)と言いはしないかと心配していた。何も金が惜しいのぢやない、私が彼に対してもつイメージが破れるのをおそれたのである。しかし、彼は何も言わなかった。私はむしろうれしかった。ルピー札を出して彼に握らせた。しかし彼は手をふって言った。

—ボクシスはいらない、サーブお元気で……—

—せめて道中の私のめし代でも払わせてくれ、ミンナ—

私はあわててポケットをさぐった。仁丹が2ヶとメンソレが1ヶ、それに私のサングラスを与えた。

"すべてのパキスタン人は金をめあてで人に親切にするから気をつけた方がいい"とはよくきかされて、そういうパキスタン人のイメージを作ってしまったが私はこの小柄な、色の浅黒いトラックの運転手を思い出すとそれを否定することにしている。どこの国でもすばらしい人間はいるものである。残念なことは私のパキスタンへの2回の遠征を通じて彼程の人間をみたのはこれが最初で最後であったことだ。しかし幸福なことはそういう人間もパキスタンにいるということ

体験したことである。でなければ私はまだ「すべてのパキスタン人は金をめあてで……」の文句を頭から信じていたであろうから。

ラワルピンディからスカルド (Skardu)

齊藤、岩坪、谷が5月15日カラチから飛行機で到着。16日にはラホールでカラコラム・クラブとの接衝をすませて、四手井、加藤、林、高村、連絡将校それに日本大使館の好意でスカルドまで色々の交渉のために同行して下さる牧内氏の6名が到着した。やっと全員が集結したのである。ただ、前小屋は肝臓をわるくして今ラホールの病院に入院中とのこと。この日のために留学していたのに残念なことだろう。しかしまもなく退院出来るそうで、退院次第われわれをおいかけると約束。林ドクターもそれを許した。

カラコラム・クラブ側が顔をそろえたのは5月18日の夕方だった。ラホールからバスでやって来た。ベグ (Beg) 隊長、ハイヤット (Hyat)、それに若手のバシール (Bashir)、ペルベツ (Pervez)。この二人は24歳と20歳。しかし結構ひねてみえる。彼等にとってわれわれの年は全くわからぬらしい。曰くタイアン30歳、ポコ18歳。

カラコラム・クラブには若いアクティブメンバーがいなくて今度の隊員の選定にはかなり苦労したらしい。新聞広告までしたが集らず、やっとこの2人をつかまえたという。我々がラホールに行つてはじめて2人の名前、サイズが知らされた。彼等の装備ことに靴はサイズが合わずそのやりくりで装備係は苦労した。19日の朝、日・パ・サルト遠征隊の全メンバーが文部次官のお茶に招待をうける。どうしてもこういう席になると英語の力のない日本側はバ側に比べてひげ目を感じる。

バ側隊員は都合でバシール以外は約半月おくれるという。それはお互いに全く都合だった。バシールが1番幸運だった。彼は1人だけ我々と行を共にしたおかげで早く日本食になれ、後に頂上の栄をつかんだからである。

5月21日午前6時、ラワルピンディを発ち、スカルドに飛ぶ。ナンガパルバット (Nanga Parbat)、ハラムシ (Haramoshi)、ラカポシ (Rakaposhi)、そして遠くに K₂、やがてなつかしいスカルド飛行場に到着した。まるで条件反射のように加藤さんは腹痛を訴える。加藤さんの腹痛といい、飛行場の建物といい4年前と全然変っていない。

レストハウスについたのは8時をまわっていた。群衆の中からイスマイルがとびだして来た。加藤さんにだきつき、高村に、そして私に抱きつく。黒い顔をクシクシにしてそして彼はうれし涙を流していた。

やがて第2陣が到着した。全隊員が一日でスカルドに集結できたことは何と言っても非常に幸運といわね

ばならない。

続々とハイポータ (High Altitude Porter) 志願者がつめかけてくる。その中にまじってなつかしい顔がみえる。シワも、バクリも、オラムもそしてチョビヒゲも。彼等のうちのあるものは荷物の整理をまめまめしく手伝っている。チョゴリザのときウルドカスまで一緒に行ったポリスが乾アンズをもって挨拶にくる。午後になると相変わらずのサンド・ストーム。すべてがなつかしく、私は帰ってきたという感じを強くした。スカルドからインダス川沿い60マイル程上流にカパルー (Khapalu) という部落がある。歩けば3日かかるがジープだと5、6時間で行ける。われわれはすべての荷物、隊員をジープでカパルーまで輸送することに決定した。しかし使えるジープは1台しかない。あとでP.A.のジープが借りられたが、ジープに乗る荷物はせいぜいで700kg 足らず、人間も2人しか運べない。運転手も毎日ぶっつけでは1日の休息も必要とあってスカルドを最後に出発した私とキャプテンにとっては実に10日の滞在となってしまった。

24日、岩坪とバシールがまず荷物とともにジープで出発。残りのものは荷物の整理と魚つり。大体毎日こういう日課である。心配していた前小屋は28日元気な姿をみせた。

連絡将校バシール大尉 (Capt. Bashir) は連日精力的に外交交渉に当る。彼は28歳、独身。熱心な愛国者でパキスタンの軍隊は日本の軍隊を除けば世界で最強という。次がドイツ軍だとがんばる。アメリカはどうかときくと顔をしかめる。日本軍を深く尊敬しており、世界最強はともかくとして実によく研究して乃木、東郷から山下将軍、はては浅沼刺殺の山口乙矢まで深く興味をもっている。何故日本は軍備をもたぬかと所謂戸締り論を展開してわれわれを煙にまいた。彼は好んで議論をぶっつける。あるときは酒の害について、またあるときは女性の美について。

“ぜったいお前の妹を高村に紹介するな。彼はヘビードランカーだ。ヘビードランカーという者はな。彼は声をひそめて或日私にささやいた。金は浪費する。クレイジーになる。そしてもう1つ悪いことはキスをするとき口がくさくて嫌われる。世界のどんな女性もそのような男を好きになるはずがない。” (ここで反論して私はひどい目に会った。この話は別に斉藤が書くだろう。)

カパルーについた連中はほとんど運ばれる荷物を対岸のサリン (Saling) にザークを使ってピストン輸送していた。

5月31日、いろいろとお世話になった牧内さんはカパルー行きを断念してピンディに発った。キャプテンと私はスカルドを引き払ってカパルーへ。谷とバシールが出むかえてくれる。サンドストームの中をザーク

で河を渡ってサリンへ到着した。そしてこれではじめて登山隊の全員が揃ったのだ。ハイポータも支給の服にきかえて勢ぞろいしている。チョゴリザ以来のイスマイル、オラム、シワ、バクリに加えてゴリラ、アブドラヒーム、それに彼等の長たるサーダー、コックのタキ。

キャラバン

6月1日は隊員全部にとって忙しい日だった。人夫の採用と、人夫がかつぐようにすべての荷を30キロに分配する仕事だ。今年は大きな遠征隊がこの地方を通らない。人夫志願者にとってここで人夫になれるかなれないかは1年分の生活費がかかっているので彼等も必死だ。採用者側グループに横からもぐりこもうとする奴、それを棒をふりあげて追い払うキャプテンやハイポータ。ようやく採用が終ったのはひるに近かった。もぐり込みにも成功したラッキーボーイもいる。人夫の数は172人。

荷物の整理も順調にいった。一番重たい荷物は発電機であった。約40キロあり、高処で心電図をとるための設備なのだ。分解できないので1人分の荷とし、ボックスをはずむことにする。それから厄介なのは2米のスキー、標しき用の竹であった。

夕食後、大きなかがり火を囲んでうたをうたう。キャプテンもバシールも全然うたをうたわない。彼等にエンヤラヤのうたを教える。エンヤラヤの大合唱。

6月2日、サルトロへの前進が始まった。時刻は午前6時半。人夫の統率はすべてサーダーにまかせられるのでサーブは大いに助かる。ハイポーターもしっかりしてきたものだ。

マチュル (Machilu) を過ぎる頃から正面にマッシューブルム (Masherbrum) が見えてきた。ここからみると屏風をたてたような雪と岩の絶壁だ。アメリカ隊はどこにルートをとったのであろうか。大きなアンズ、桑の木でかこまれたタリス部落をすぎる。村の女がむらがってわれわれが通るのをまるでこわいものを見るようにおそろおそりみている。その中に斉藤夫人にそっくりなのをみつけて皆よろこぶこと。

フルディ (Huldi) についたのは2時半だった。空はどんよりとしていた。先着の連中はすでに芝生の上にテントをはりはじめている。コックのタキは火をおこし始めていた。着いてから30分もしないうちにニワトリのスープとチャパティができた。こんなに早くできるとはチョゴリザのときに比べるとゆめのようである。私は概して彼の料理は良かったと思っている。ハイポータの食料とサーブのそれとははっきりとけじめをつけたし、紅茶の欠乏という事態に当面してもなんとかそれをうまくこなしていった。もさっとしており丁度穴ぐらから出てきた狸という感じがする男だったが、時にはタキの値段のことから村人とケンカをは

じめる戦闘的なところもあった。彼はいつもキャンプ地へ先行して紅茶の用意をして待っていた。彼のすぐれた才能はお菓子和アイスクリュームが作れることで、ベースキャンプでひまになってから好んでそのうでを發揮した。岩坪のおふくろさんの名前と同じ名前なので彼はこのときとばかり好んでタキノとよんだ。

フルディからチノ (Chino) へは1日分としては距離は短かったが、それ以上となると長すぎるので6月3日はチノまでであった。午前11時半にはわれわれはチノの河原のテントの中でくつろぐことができた。暑い日だった。食事はフライシートとスベアポールで作った日よけの下でした。ジャムの缶を前小屋がひとり $\frac{1}{2}$ 平げる。これは肝臓の病気のあとでは生理的に要求しているとの林ドクターの言で以後彼には甘いものは特別におお目にみてやることにした。

わが隊には医者ガ林、齊藤と2人いる。キャプテンに言わせるとドクター齊藤は practical doctor で林さんは theoretical だという。もっぱら現住民の診療は齊藤ドクターが当たった。今日の午後も村人に囲まれて彼は仕事をはじめた。ドクターの英語をキャプテンがウルドゥ語に、そのウルドゥ語をハイポーターのひとりガバルティ語にするのでかなり時間がかかる。夕方寒い風が吹き、あかりがつくまで診療を続けたのでキャプテンはすっかり感激してしまっただけで、その前からキャプテンはドクター齊藤は great man であり、すばらしい gentleman だといっていたが、今日はもうすっかり頭にきて叫んだ。“おれはバ政府に正式に書類を出して感謝状を出させる”。しかしそれはあとで実現しなかったが……。

今般はいつものチャパティとニワトリのスープの他にたくさんごちそうがあった。ネギをざっとゆでてリノールサラダ油とショウ油につけたもの。なの花と大根のつけもの。それにデザートとしてタキが腕をふるった卵と牛乳のお菓子。

翌日は一番長い日だった。それもダンサム (Dansam) をすぎてサルトロ川に入ってから村1つない荒涼とした道だ。ガラガラ道をあがったり、さがたりしていくと突然目の前がひらけて雪山が展開する。それは疲れを忘れさせるのに充分だった。

キャンプ地には5時についた。マンディク (Mandik) の村はずれの芝地だ。高度3100m。マンディクからゴマ (Goma) までは4時間足らずだった。一番短い日である。ピラフォン (Bilafond) 谷の出合の河原にテントをはった。この部落が人の住む最後の部落であり、峠越えの人夫の食料その他はここで調達しなければならぬ。翌日はそのため1日滞在とぎめて午後はゆっくりと洗たくやらボーカーやら。はてはトイトイバクちまで。

ゴマと近接してガガル (Gagalu) という部落がある

が阿村がとりぎめてアタ (メリケンコ) の値段を1セル2ルピーとふっかけてきた。ダンサムでは1セル1ルピーだった。きっと足もとをみているにちがいない。それならこちらもちろ持久戦、少し情勢待ちと行く。

ひるごろ発電機を働かせてサーブ、ポータの心電図をとる。午後はうらの山、ピラフォン谷とか思い思いに散歩でかける。

7日、8日もゴマに滞在した。その間荷物の整理、人夫の再整理。アタも1セル1ルピー10アンナとなった。ハイポータ2人新たに雇入れる。ジジイとタゴール。タゴールは30年前ハントについてピラフォン峠に行ったことがあるという。経歴は立派だが山では要領よく立ちまわって我々の期待には応えなかった。

6月9日、225人にふくれあがった人夫がピラフォン谷を登っていった。谷の両側は水で浸蝕された岩肌がでたらと輝いている。このうちの一つでも日本にもってきたらたちまちハーケンツノの巣となるだろう。針キ峰がわれわれを見下してそびえていた。柳の木の下をきれいな水が流れる気持のいい所をすぎると今日の泊場ギヤリ (Ghyari) だった。午前10時半に到着は早いようだが、自由な時間が多いのはたのしかった。午後は柳の木の下に赤いグラウンドシートをひいて野だてする。それが終わったら高村と五郎は赤いグラウンドシートで闘牛ごっこをやっている。高村のうしろからタイアンが頭からつっこむ。谷が走る羊をおいかけている。

翌日、われわれははじめて氷河をふんだ。氷河のツング (Zunge) は柳、白楊、ジュニパの林で気持がいい。鳥も多い。この氷河はバルトロのようにふみあとがしっかりしていなく、石がごろごろとして歩きづらい。

この日は大失敗をやってしまった。ハイポータに率いられたクーリーと、サーブ連が氷河の右と左のルート
を別々にとって結局キャンプを別々に張らなくてはならぬようになってしまったことだ。クーリー達は左岸を
通ってナラム (Naram) へ直行し、サーブ達は右岸を
通ってナラムの100m程下の気持のいいキャンプ
サイトでクーリーのくるのを待っていたのだ。タキが
こちらにいるので一晩ぐらいはなんとかなる。しかし
タイアンの雷がおちた。“AACK ともあろうものが、
このザマは何だ……。お前達は隊行動を考えているの
か。” 一同シミマセンとあやまる。

前小屋と五郎は風邪がこじれて熱があり、お説教がすむとすぐ六人用テントで横になった。このキャラバン中風邪がはやり、皆多かれ少なかれ風邪を引いた。ゴマでは私が熱を出したし、バシールも水バナを出している。一度も風邪を引かなかったのは、四手井、加藤、齊藤、それにキャプテンの4名だけだった。

ナラムをすぎるともう緑はない。氷河のまわりに立ち並ぶ峰々は鋭くがって、そのカミソリのような薄い山稜はとうてい人をよせつけようとしな。事実これらの山々を見ているともうそれだけでたくさんで登ろうという気はなくなってしま。モレーンが右に曲っているあたりから私の心の中で次第に興奮が高まってくるのが感じられた。そしてとうとうピラフォン峠が見えた。あの真白い高い峠を5トン近くの荷が越さねばならないのだ。見ている限りでは困難な仕事である。クーリー達はもう雪めがねをくれと要求しだした。まだモレーンの上じゃないか。しかし一応全員に配ってやる。真中のモレーンから右側のモレーンに渡るときに雪が深くて人夫が大混乱をしている。9ミリの赤ザイル200mでフィックスして人夫を渡す。人夫たちはじゅくじゅくの雪の中をはだして渡った。雪が深くアリブランザ (Ali Brangsa) までは到底行けそうにない。時間的にも無理である。止むなくこのモレーンの上に B.C. を設けることにする。モレーンは狭く平地はないがウナギの寝床みたいに1列に並んでテントを張った。クーリー達は50人残して残りは解雇する。支払い金額が少なすぎたことからクーリー達は大いに怒り「もう金はいらぬ、帰ってスカルドで P.A. に訴えるまでだ」と支払いに当たったキャプテンにかみつかんばかり。そして人夫一同帰りはじめ、結局キャプテンが折れた。1日10ルピーという規定賃金で支払って彼等を帰したのは6時をすぎている。残ったのは50人のクーリーとハイポーター、サブで約80人足らず。しかしせまいモレーン上の人口密度から言えば世男一だろう。クーリー達にはテント、グランシを貸し与える。こうしたゴタゴタのために夕食は8時すぎとなった。しかし、ともかく峠越えのベースキャンプはできあがった。あとは如何にうまく50人のクーリーと10人のハイポーターを使って荷をシアチェン (Siachen) 氷河に運ぶかである。この荷物のトランスポートは実にこのサルトロ・カンリ登頂の大きなヤマ場であった。気温はまだかなり低く、雪は深い。人夫たちは寒い寒いとふるえている。

登頂の前後

高村 泰雄

第5キャンプ

頂上攻撃のためのアタック・キャンプをどの高さまで進めるか？ アタックの方法は？ アドヴァンス・ベースキャンプではサルトロの正面を遠くに眺めつつ

幾度も討論が繰り返された。日本を出発するまでに出していた結論は、できるだけ高くアタック・キャンプを進める。約7200mの肩のあたりがよかろう。そのため、6500m付近にわれわれの第4キャンプができたとして、さらにもうひとつ7000m近くに第5キャンプをたて、その上で7200mにアタック・キャンプをということになる。文字どおりオーソドックスにポーラーメソッドを採用するならばこれが妥当な線だと考えられた。ところが、さてサルトロの正面を眼の前に見てみるとこれをもう一度考え直す必要がでて来たのだ。5500mのとりつきから6000mのプラトールに出るルートが思いがけず悪い。その上の斜面は雪崩が牙をむき出して獲物を待っている。そういうところを幾度も上下して、当初の計画どおり沢山のテントをあけてがっちり足場をかためつつポーラーメソッドを展開することが果して許されるかどうか。第3キャンプをプラトールに建設しても、高所人夫が辛うじて使えるのはそこまでだ。荷上げ能力にも限度がある。「第3キャンプから上のキャンプの数は極力少なくして、高所キャンプでの滞在人員、日数を最低限におさえよう。雪崩の危険も大きい。こんなところであたり前のポーラーメソッドを採ったのでは生命がいくつあっても足らぬ。この山はラッシュで登る山だ。それで試みて駄目ならばこの山は放棄だ。ラッシュ・タクティクスの気持で突っ走らない限りこの山は登れないぞ！」加藤副隊長がいろいろ考えた末、全員にこう話した。たしかにその通りだと思う。しかし、若い隊員である私たちの胸中には何だか割り切れぬものが少し残された。私たちは、今度のサルトロは、できるだけ余裕をもって願わくば全員登頂をやりたいという風に考えていたのだ。その上、突撃戦法をとって再びハント (J. Hunt) の二の舞をしたくはないという気もあつた。ハントがサルトロに挑んだとき、かれらの最前進キャンプは、高度6700m足らずの地点にあった。最初第7キャンプまでつくる予定だったが、頂上までの距離を誤算し、頂上はそこ第6キャンプから討てると考えたのだ。不幸にして高度計が狂っており、第6キャンプの高度を実際よりも300m高く7000mと誤解していたせいもある。悪化した天候のため登頂を断念し、ハントがガスの中にみえかくれする頂上を無念のままざしでみつめながら引返した地点は実はようやくサルトロの肩をすぎた辺りだった。頂上まであと高度差200mばかりとかれらは報告しているが、実はもっと低いところまで達したにすぎなかったのではないかと。たとえ頂上攻撃がラッシュ戦法の気持で行なわれるにしても、アタック・キャンプは7000m以上のところに欲しい。そのためには、基本的にやはりポーラーメソッドでがっちり荷上げしなくてはならぬのじゃないか。そういう疑問が湧く。ハントの隊のプラン・メーカ

ー、ジェームス・ウォラー (James Waller) も、当初は全員登頂を考えて7000m以上にキャンプを進めるつもりではあったのだが、天候悪化がすべてをふいにしてしまった。「充分な時間的余裕と好天候に恵まればわれわれの次に来る者は必ず登頂に成功しよう。ただし、この山で7000m以下の地点から頂上攻撃するのは賢明でない。エベレストの経験が示したように、問題は高度差だけでなく、頂上までのたいへん長い水平距離だ。このことをよく考えておかねばならぬ。」ハントの報告はこう結ばれている。

ハント隊がこの山に挑んでから27年後の7月22日、われわれはサルトロの、高度まさに7000mの地点にアタック・キャンプを設営した。第5キャンプ。林登攀隊長はじめ多くの強力な仲間によってつながれたフィクスド・ラインの終着点。そして頂上への最後の出発点。そこまで押し上げられた斎藤・高村・バシールの胸の中はこれからはじまる大詰めの幕開きを前にして、責任とサポート隊に対する感謝の気持で一杯になる。6500mの第4キャンプから上の斜面はいぜんとして雪が深かった。かたちはポーラーメソッドのようではあるがとにかく第5キャンプを一日のうちに出来るだけ高いところまで押し上げようと、重荷を負ったサポート隊の苦闘は午後4時までつづいた。すでにラッシュ・タクティクスがくりひろげられていたといつてもいいようにおもう。肩につづく広大な斜面の一角、ほんとうに猫のひたいのような一寸した平坦地が氷塔のかけにある。あたりは乳色のガスでおおわれ、視界は悪く、この広大な斜面の上部がはたしてどんな具合にひらけているのかよくわからない。もう時間も遅い。林登攀隊長以下サポートのため頑張ってくれた谷、上尾も疲れている。いっそのことここに全員、少し無理しても泊って、サポートをさらにつづけようかという意見がちょっぴりとび出した。しかし、ツェルトの準備もあるとはいえ、テントはもともと2人用だ。食糧も乏しい。もし悪天候にでもなったら共倒れは必定。われわれを心配してくれる好意はありがたいが、やっぱり方針どおり3人だけでやってみよう。林さんが別れぎわにわれわれにとって貴重なはなむけの言葉を残して呉れた。「大切なアタックの日に寝坊するなよ！」。握手を交し、ひとりひとりと静かにガスの中に沈んでゆく。重いサポートの荷を肩からおろしたとはいうものの、登攀隊長としての気苦労がその肩にどっかとのっかっているように見える林さん。谷、上尾は高度とともに食欲が増し7000mのラッセルも日本の冬山のラッセルと同じ調子でやってのけた連中だ。うす汚なく陽やけしたかれらの顔が笑っている。「まあ高村、できるだけやれよ。あかんかったら僕らがすぐ応援に行ってやるからなあ。」

かれらがまだ完全に視界を去らぬうちにテントは張り終えた。その頃、私は突然、胸にむかつきを覚え、雪の上に茶色っぽい液体を少し吐き出してしまった。かくさずに言えば、サポート隊がすでに相当遠のいていたことを私はありがたいと思った。すぐにテントに入り、夕食の準備にゆくり時間をかける。リプトンのトマトスープにサラダ油、肉、野菜を入れ、別にアルファ米を煮る。ストーブは、フランス製のキャンピング・ガス (Camping Gaz)。その夜の日記には、「かんたんなオカユを作り、喰う。食欲普通」とある。エアーマットを2つ並べて敷くとテントは一杯になった。その上に羽毛服を着て羽毛ズボンをはき3人並んで横になり、たった一枚のシュラフザックを拡げてかけた。眼覚し時計は2時に合わせる。いよいよ登頂前夜だ。Yさんといろいろ話したい気もするが、バシールの奴が飯を喰ったらもう用はないとばかり眠ってしまったので、少しでも暖かいうちに眠ることにした。バシールは暇さえあれば眠っている。これはひとつには日本人ばかりのうちにかれバキスタン人が1人という環境のせいもある。しかし、だいたいキャラバン中からそうだった。われわれにとって、たださえ面倒くさい英語を高い山の上で頭を痛めながらしゃべるのは決してありがたいことではない。かれにしたところで、われわれとまだるっこしい、舌足らずの会話をするのは面白くないだろう。飯を喰ったり道を歩いているあいだに交わす言葉は単純でお互いに疲れない。そういう際に意志の疎通がもし少々欠けたとしても、大したことであるまい。たとえば、食事のときに味の素と塩とを間違えて手渡してやるくらいのものだ。ところが食事のあとでゆくりと交わす会話はそうはゆかない。われわれ同志の何気ない会話にしたところで、これをかれに伝えようとすると言葉を探すのにひと苦労、それを待つかれもまたひと苦労するにちがいない。平地でならともかく、ここ酸素の稀薄な上空では、かれのとった策はまことに賢明であったといえよう。ただし、かれがはつきり意識してそうしていたのかどうか疑わしい節もある。なぜなら、後日、アタックを終っての帰途、ともすれば雪面に尻をつけたくなるのを我慢して歩いている私に、かれはうしろからそっと声をかけたものだ。それも英語とウルドゥ語のちゃんぽんで。「ワイズマン、アラーム・カロ (賢者は休養をとるもんだよ。)」

いろいろ考え討議されていた第5キャンプも7000mの地に根をおろした。あとはとにかくここから突っ走ることだ。しかしどうもまだ頂上までの距離、立体的に組み込まれた距離がどうもピンと来ない。もうひとつキャンプが要りはしないか？ ここから上は技術的困難よりも、むしろ単調で長い雪の道だろう。われわれ3人はとにかくまあやってみると、ここにほうり出

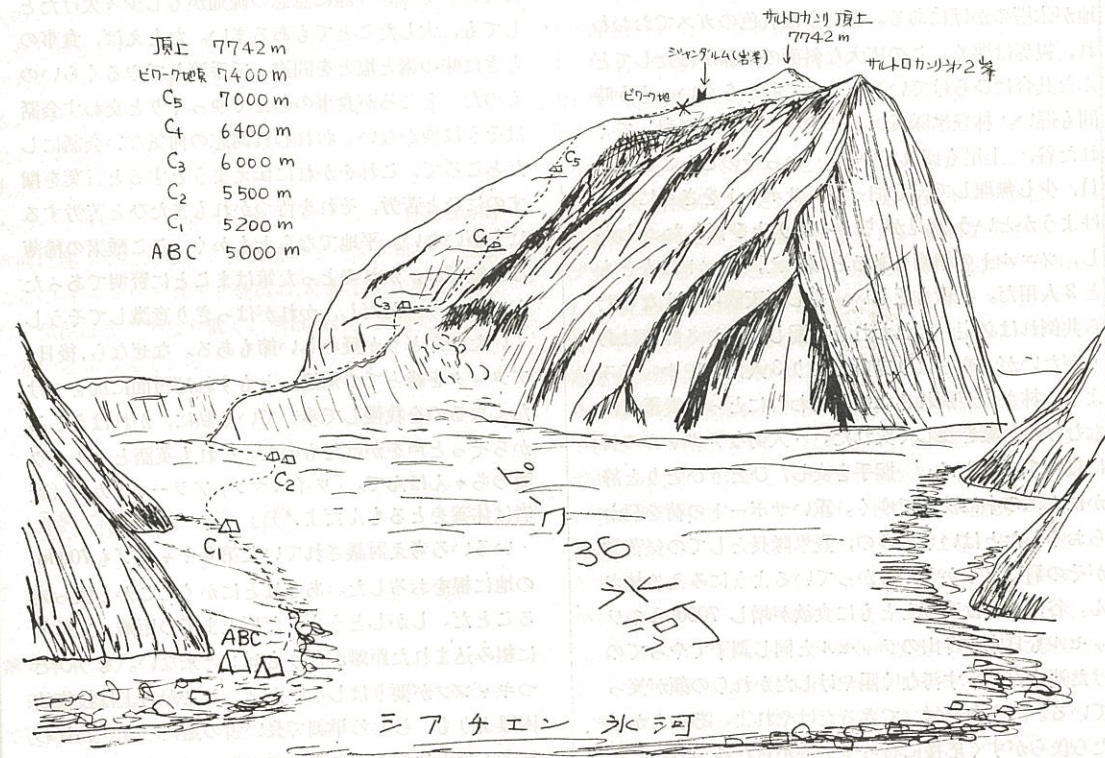
された前走者だ。平井・岩坪という 7000 m 以上でのギランティーをもった男たちも控えている。谷・上尾はもとより林さんも上向きの意欲にうずうずしている人たちだ。けれどもできればわれわれ 3 人で頂上まで突き上げたい。頂上にでかけるときは単なる非常用としてだけでなく、予想されるビバークのためツェルトそのほかの装備・食糧を持つべきだろう。しかし、正直いって出発前にはビバークということをそれほど切実に考えていたわけではなかった。いつもの日と同じように第 5 キャンプの夜は静かにすぎわれわれは深い眠りについた。

第 5 キャンプをあとに

全く同じ傾斜でつづいているようにみえた第 5 キャンプから上の斜面も足を踏み入れてみると、わずかながら緩急があった。第 5 キャンプからかぞえてふたつめのやや緩い斜面にさしかかったとき、深かった雪が消えて、シュカブラとなった。午前 10 時。テントをあとにしてから 5 時間半は歩いた。高度は 200m もかせいでいたであろうか。眼覚し時計の世話にもならず 1 時半頃起き出して、例によって雑炊で腹をつくり、ツェルトとキャンピング・ガスそれに極く僅かの非常食をサブザックにつめ、いちどは 4 時前に出発した。しかし、雪が深いので、アイゼンの上にワカンをつけ、快晴のあけがたの空を仰ぎつつ今度は本当にテントをあとにしたのはすでに 4 時を少しすぎていた。全員コンディションは良好。乾燥粉雪にずいぶん悩ま

れ、ラッセルを交互にくりかえしながらただひとすじに登って来た。ワカンを脱ぎ捨てもう背負ってゆく気がしないので雪面におく。アイゼンだけで再び登攀をはじめたところ、またしても突然胸にむかつきを覚えた。前をゆくバシールに合図を送ると同時に私は雪面に手をつけて吐いていた。あわててザックを外そうとしたら、運悪く、これがするりと手から離れて雪の上を転がり落ちて行ってしまった。さいわい、ここは斜面の下がスリバチの底のようにゆるく、カールボードンのようになっていたので、ザックはとまった。へばっているつもりはなかったけれども、また立上ってザックを追う勇気もなかった。Y さんが私の様子を見て黙ってひとりザイルをはなれ、ゆっくりもと来たルートでザックの方へ下ってゆく。高度差は 50m くらいかもしれぬが距離は長い。Y さんには済まない気持ちでいっぱいだ。ビバークに必要なものも入っている。帰りに拾うというわけにもゆくまい。平地に近いところならばなんでもない筈の自分とザックのあいだの距離が実に遠く思われた。Y さんは全く元気だ。しかしこんなところでつまらぬ消耗をするのは決して愉快ではあるまい。私としたところでここで、Y さんの好意に甘えているのは何とも情ない気持ちであった。これではまるでスキー場でスキーの片方を流し、ボーイフレンドに拾って来てもらうのを待っている女の子みたいなものだ。しかし、私の気持は女の子のようにはあわせではなかった。私はチョゴリザのときも 6000 m の第

- 頂上 7742 m
- ピナクル 7400 m
- C5 7000 m
- C4 6400 m
- C3 6000 m
- C2 5500 m
- C1 5200 m
- ABC 5000 m



4 キャンプでひっくりかえっている。あのときは腹具合がおかしくて、その上いささか生ガスを吸って、意識モローとしてしまったものだ。あれ以来、私は自分の高度に対する適応性に疑問を抱くようになった。他人が何と慰めてくれようと、私は高度に負かされたという印象はぬぐえなかった。と同時に、若し許されるならば、もういちど高度に挑んでみたいという大それた気持も、もちつづけて来た。ところが今、私はここで完全に負かされているのではない。サルトロにやっ来てからは 6000 m 近くで一度頭痛を覚えた。6500 m の第 4 キャンプでは、食欲が必ずしも充分ではなかった。無理をして飯のお代りをし、それを食べ切ることができなかった上、隣のテントにとんで帰り、ふうっと吐息をついたのを誰かは気付いていたにちがいない。私はアタック隊に入ることを辞退すべきだったろうか？ 自分の力を知って、いさぎよく能力の範囲内にとどまるべきだったろうか？ 強力メンバーがうんとこぞ控えているこの隊ではへばりながら頂上にむかう奴が許されるはずはない。だが、私は頂上に行つて来ますと出かけて来た。日本を離れる前の精密検査でも別段どこにも異常はないとの診断をえている。昨日、今日と嘔吐はしているが、他に自分で気をつくような故障はでていない。現に今こうして吐いてしまうと、あとはもうさっぱりしている。吐くときの苦しさをうすうすらとにじみ出た涙をどうしてみるシアチエンの山々はいつもと変らぬ感動を私に呼びますし、眼の前の斜面を登り切ればサルトロの頂上が見えるのではないかという期待に心臓もちゃんと高鳴る。そうだ、これはひとつの保障作用だ。吐かなければもっと悪い状態になったかもしれないが吐いたためにちゃんと気分もよくなったではないか。私のひげづらのボーイ・フレンドが拾ったサブザックを肩に、もうすぐそこまで帰って来てくれた。「大丈夫か」と心配顔の Y さんの問いに、私は「大丈夫です。」と答える。ウエファースを二・三枚食べ終ると、バシールが「サアイコウ」と Y さんの真似をした。ザックを落してからすでに 30 分が経過していた。

午前 11 時。頂上稜線上のピナクルがみえはじめた。それはまさに「かのにのささみ」のようなかたちで突っ立つ黒い岩峰であった。ハントのいうジャンダルムである。最初はそののささみの先端がちょっぴりみえ、登るにつれて少しずつ基部の方がみえはじめた。小さな岩だと思っていたのにこれは馬鹿でっかいピナクルだ。その上、全貌がみえてからは仲々大きくなって来ないところを見ると距離もだいぶはなれていることがわかる。頂上の左肩のドームはいつのまにか左側をトラバース気味に登つてすでに通りすぎている。左下へと流れる斜面はすでにリカ (Likha) 氷河の上部斜面だ。雪がまた軟らかくなった。もぐりは始める。サル

トロの頂上がみえる。頂上からこちら側にのびる南東稜も今は全ぼうをあらわした。どうしてどうして頂上まではまだまだだ。午後 1 時。雪はますます深くなり、ピッチは遅くなる。しまった、ワカンジキをどうして捨てて来たのだ。だが、われわれの歩行は一步進むのに数度呼吸をしてというほどひどい状態ではない。歩いている本人は、これでも休みなく歩いているつもりなのだ。雪はとうとうヒザを没するようになった。その上、南東稜末端へとつづく肩の雪原に入ったとみえ、傾斜はゆるく高度は全くかせげない。もう何時間も会話らしい会話はしていないように思う。ただ一步一步ザイルにつながれて歩いているだけだ。ひと息入れたあとにしたところで、人間さまが歩き出すより前に、ザイルがさきにおみこしを上げてわれわれをひきずってゆくようなものだ。この不思議なロープのとりもつ縁で 3 人の男たちは一緒にピナクルの基部まであと 1 km くらいというところまでやっ来て来た。はじめてふとわれにかえる。そういうことがなかったら、われわれはいつまでも腰を没するふかふかの雪の中をあと何時間でも歩きつづけていたかもしれない。Y さんと言葉を交すが、お互いになんのためらいもなくビバークという言葉を出す。高度は約 7400 m か。ハントの引返し点は過ぎたようだ。それにしても朝から 10 時間近くかかって高度 400m を登っただけか。普通なら 1 時間余りで登れる高度差だ。いらだたしさは感じない。われわれは高度差ただか 400m を登っただけだが、その間、絶対高度の高さを充分満喫しつつ一分ずつを噛みしめて来た。右手にみえる頂上南東稜のつらなりと真正面のジャンダルムのあいだは大きく切れている。頂稜の末端部は赤茶けた岩で、そのガリーには氷がはりつめてみるとみえ青光りしている。これがルートになるだろうか。それとも頂上南東稜線の手前側に広がっている高所雪原をラッセルし、頂上に真正面からとりつくか。いずれにしても今日は無理だ。このピッチでは、またこの雪の深さと頂上までの距離ではわれわれが今日、陽のあるうちに頂上に到着できる見込みは到底ない。執念深くラッセルをしようとして立ち上ったバシールも 10 m ばかり雪と格闘したもののあきらめて引き返して来た。しかし、あと 3 時間もあれば頂上だとかれが言う。私たちはいう。「ノー。モア・ザン・ファイブ・アワーズ。」

ビバークの夜

ビバークの夜のことを順を追ってたどってみても詮は退屈なことだ。しかし、ビバークの夜というのは不思議なことが起る。普通私たちは眠ることを退屈と考えない。しかし、ビバークの夜だけは退屈しながら眠っている。つまるところ、一刻もはや夜が明けてほしいという気持が、幾度めざめてのぞいてみてもいっこうに動こうとしない時計の針をみては失望し、退

屈を感じるということになるのか。比較的気温は高かったとはいえ、ろくすっぽ整地もしない雪の中にツェルトをかむって、エアマットもなく坐りこんでいる身体には寒気が込みこんで来る。上体よりも下肢が寒い。羽毛服を着ているかぎり余りつくはないけれども、靴をとおして来る寒気がたまらない。Yさんとバシールは靴のまま、またオーバーシューズをつけたまま。私は靴を脱いでオーバーシューズを下に敷いて足をその上にのせている。これは賢明な策ではなかった。せまいツェルト・ザックの中に大男のバシールが身体を「く」の字にして横たわる。Yさんと私は坐っていることに耐えられるが、かれには生活様式のちがいがからかこれはかなわならしい。勿論、私たちもときおり身体を横たえてみたり、坐りなおしてみたり、とにかく安定した楽な姿勢を求めて3人3様にしばしばゴソゴソと動き廻っている。眼がさめるたびに3人の相対的位置が変わっているのに気がつく。とうとうビバークをやったか。しかし、登頂前のビバークはどうだろう。さいわい決定がはやかったのでまだ陽のあるうちに夕方までの約3時間、ぐっすり眠り込んだので身体の状態は全員快調のようだ。7400mの高さでは体力の回復というものは余り期待できないだろうけれども、呼吸がこんなに楽であるところをみると決して疲労の一途をたどるということもあるまい。かりにこのビバーク地の近くまでアタック・キャンプをもち上げた場合を考えてみると、それは隊員全体に一律に激しい疲労を要求するだろう。高所人夫を一人も使えない今、あるていど余力を蓄えつつ頂上を討つ方法はやはりこのビバーク方式以外にはなかったのではないか。私はそう考える。勿論時間をかけ、時おり5500mの第2キャンプあたりまで休養に下りつつ計画を進めることができるならば話は別だ。だが今のところみごとな3~4日周期で繰り返されている好天候と悪天候の循環もいつまでつづくものかわからない。幾度もキャンプ間を上下するうちには条件の悪いときに危険な地域を通らねばならぬ機会も増えよう。オーソドックスなポーラー・メソッドを捨てたのもそういう危険を最小限にするためだ。とするとこのビバークはサルトロを討つために取られた基本方針の上にちゃんと乗っかっているとはいえないか。

第5キャンプの夜とちがって頂上を眼の前にしているだけに、ビバークの夜は頂上のことが頭の中にしじゅう浮かんだ。いよいよ明日には、と期待と不安が入り混じる。この登頂隊を送り出してくれた下のキャンプの人達が心配してくれているにちがいない。だがトランシーバーによる交信には成功しなかった。到達距離からすると、交信できる可能性はある。それは明日試みってみることにしよう。出来れば頂上から。一日くらい連絡がないとしてもそこは一応われわれを

信頼してもらいより仕方あるまい。隊員のだれかれの顔が眼の前に浮かぶ。多分第4キャンプで頑張っている平井、チョゴリザで驚異的な馬力を発揮したかれが来ていてもやはりここでビバークしていたらうか。ノシヤクをつわもの岩坪のやりかただったら、やはりここでビバークしたのではないか。それにしても3人だけで、少々寒いけれども頂上のすぐ近くでこうしてのうのと眠っておれるというのはいわゆる奴等だと思ふ。けれども、かりにわれわれが明日頂上に到達できたとすれば、他の連中は頂上だけでは満足できず、サルトロ第II峰への縦走をやるうなんて言い出さないと限らない。いずれにしる第2登頂はおろか第3登頂までメンバーは豊富だ。とにかく一足お先ぎにゆくことを許してもらおう。不思議に頂上には間違いなく登れるという気持が強い。ヘドを吐いた私にしてもそうなのだから、Yさん、バシールも勿論そう思ったにちがいない。バシールにつれづれるままにさいてみる。「頂上に登ったら次はどこに転進したい?」「とんでもない。僕はもうひどいホームシックにかかっている。一目散に帰途につくよ。」欲がないのか本当にホームシックがひどいのか。われわれは日本からはるばる出かけて来た。来るだけに何ヶ月もかけているし、計画の当初から起算すればもう何年もということになる。そしてとうとう念願かなってインダスの源流地にやって来て、できるだけ広く歩き、新しい未知の土地を探りたい気持でどん欲に眼を光らせている。ところがバシールの場合はどうやらそういうことではないらしい。自分の国の北辺地域にやって来たのは山登りという本来の自分の生活とは無縁のゲームを楽しみに来ているということにでもなるのだろうか。われわれは、自分たちの生活の中で、日頃、もっとも好ましいと望みつつづけているかたちの生活を求めてここまでやって来ている。その生活を手の中に収めた今、これをどうしてむぎむぎと簡単に手離せるものか。私はそれ以上バシールと山のことを話すのは止した。「僕の家にはすばらしいリンゴの樹がある。緑に囲まれた僕の家は楽しい生活が恋しいよ。」バシールのはなしには、それでもふとひかれる。眠ってはめざめ、時計を眺めてはうんざり、これを幾度繰り返したのか。時計をもたないバシールがうるさいほど時間を聞く。Yさんにしきりにタバコをくれと頼む。かれが最も多くタバコを吸った。高度に強いということになるか。マッチの火つきが悪いのは高度のせいだけではなくて、ツェルトの中が湿っぽいからでもある。硫黄の強いにおいがせまいツェルトの中からはなかなか消えない。フカフカの雪をすくいとって、ガスに火をつけ、薄いコンデンスミルクを飲む。夜の食事にはカンパンを少しかじり、主としてウエファースを食べた。これは実によくのどを通る。私のみた限り、3人とも積極的な食

欲はないが来るものは拒まないというところか。靴をはいたまの足が冷えるとみえ、Yさんとバシールはしきりと足をとんとん踏んでいる。私は靴下だけになっているので足をこすり合わせて暖をとる。だがこれはいっこうに効果がない。その上、靴下に少し雪がついたりするので、しめっぽくて具合が悪い。しかし、今更冷えきった靴をはくのは却って逆効果になるのではないか。行動直前まではそのままにしていることにした。アタックを目前にして、なにか気のきいた話か、愉快な話でもと思うけれど、つまるところは半睡半醒のビバーク。口をきくのが面倒で、つい黙りこくったまま座っている。バシールが退屈まぎれに二度目のミルクを湧かしているのをうとうとしながら知っていたが、私はまた眠りにおちて出来上ったミルクを飲む意欲を失っていた。「サーブ。ボクシーン(旦那、チップを)。」バシールが人夫たちの真似をしてYさんにタバコをせびっている。面倒くさがらずにそのたびにタバコを差し出してやるYさん。パキスタンの賢青年を含むこの3人のメンバーシップは、もう殆んど日本人同志の場合とかわらぬくらい完璧だ。それにしても余り経験がないに拘らず、さしたる不安顔もせずにビバークにつきあっているバシールという奴はこれは大したものだと思う。第2キャンプでカラコラム・クラブ側の要請により日付合同という大義名分の上からだれかひとりにはパキスタンメンバーを頂上へということになったとき、四手井隊長はもとより加藤さんは強硬に反対したものだ。若手隊員の中でも勿論反対があった。パキスタン人だからということだけで、お荷物になるのがわかっていながら登頂隊に加えるというのはけしからん。そんなことで頂上が討てるものか。だいたい少しは山を歩いているベグ(Beg)教授まで、合同遠征だ、それにふさわしくぜびパキスタン隊員も頂上へと強く懇望するとは、山のことを知らなさすぎる。とにかく国籍のいかに問わず、上に登れる奴だけが上に行くのだから、今からパキスタンメンバーを必ず頂上に連れてゆくという約束はできない。われわれとしては、若し能力があるとわかれば勿論、喜んでパキスタン側メンバーにも頂上を踏んでもらうつもりだというのが結論となっていた。そしてさいわい、バシールが選ばれることになったわけである。日本側全隊員とフランクにつき合っていたバシールが、結局憎めない、いい男だったことと、体力的にすぐれ、また技術的にも飲み込みが割合はやく、使いものになるという希望がみえたので、最終的には第4キャンプで林登攀隊長が、かれを登頂隊員に入れることを決定したのである。それをきいたときのかれの嬉しさをおし殺した神妙な顔は忘れられない。バシールを登頂隊に入れたことは、林登攀隊長の英断であったと私は称賛したい。と同時に、かれを一応登らせてみようとした隊全

体のゆとりというものに改めて思い至る気がする。自画自賛、八百長めいた言い方だとなす人は、つまるところカラコラム 7000m級の山というのは素人でも登れるところなんだと皮肉をいうかもしれない。ところがそうではない。たしかにチョゴリザに於ても、全く山の素人だった今川、潮田両氏が、加藤さんのリードを得てコンダス・ピーク(Kondus peak)の初登をやってはいる。けれどもかりにバシールが10人いたとしても、かれらだけではやはりサルトロは絶対陥ちなかったということはここであらためていう必要もあるまい。それはさておき、とにかくバシールという男は、パキスタン人として、さらに回教徒としては全くめずらしく柔軟性に富んでいたことが強く印象に残っている。われわれのつきあった彼国の連中のなかで、かれのような青年は極くまれのようにおもう。せまい交友範囲の中で、そういう友を得ることができたということはしあわせであった。やがてかれらの力がわれわれの眼からみて何事につけても停滞的だと思われるパキスタンの未来を改革するエネルギーとして作用する日が来ることを他人事ながら祈らずにはおれぬ。間違っても、あの太っちょの、酒も飲まず、口を開けばすぐお説教めいた物言いをする退屈この上ないパキスタンの旦那衆にはなってくれるな。

真夜中をすぎ寒気はさびしくなった。Yさんが、衣類が凍って尻のところにべったり喰つくような感じだという。身体を動かすとたしかにそんな感じだ。夕方頃に少し出た風も今は取まり、あたりは全く静かで、さいわい晴れている。休養は充分ではないがとにかく疲れも少しはとれた。頭が冴えて来るとこんな星明かり雪明かりの中で無理をしてじっと座っているのが馬鹿らしい気がして来た。午前1時すぎ、そろそろ歩き始めようかとYさんがいう。またしても異存はない。ウエファースとカンパンだけで、水は殆んどとらない食事。思い切りよく、ツェルトをはぐり、アイゼンはつけなくて明け方にはまだ少し間のある夜の中へおどり出る。午前2時半。粉雪は腰を没する。バシールが一寸不服そうにいう。「あの快適なツェルトの中からぼくたちはどうして慌てて飛び出してしまったんだろう。」

頂上に立つ

夜明けの薄光が雪原をほのかに照らしはじめる。われわれは頂上南東稜線と殆んど平行に頂上直下の大雪原を西に向けて泳ぐように進んでいた。今朝になってみるともうわれわれはルートの撰択について相談する必要さえなかった。南東稜末端の氷のへばりついたガリーを登り、稜線に出てから三つほどピークを越えて頂上に向かうより、少し雪がもぐったとしても稜線に抱かれたように広がる大雪原を横切り、頂上直下に達してから雪のルンゼを突き上げて、直接頂上に出よ

う。Yさんが相変らず力強いラッセルを精力的につづける。バシールは細長い足をすり合わせるようにしてやはり黙々とラッセルをする。みんな代るがわるラッセルを続けるが、歩数を数えてみると50歩から100歩でひと息入れたくなっている。1歩1歩はもちろんひょくにゆっくり踏み出す。殆んど無言のまま。何だか自分がラッセルをしている時間が短くて、しかも能率が悪く、Yさんがラッセルするときが一番長くて、かつ距離もよく伸びているという気がしてならない。日本の冬山のラッセルに比べてとくにつらいとも思わないのだが、ピッチがなかなかあがらないのを見てみるとやはりだいぶばっているのだなと気がつく。頂上直下にはり出したこの雪原は東西に約3キロ、南北に約1キロはあろうとおもわれた。雪原の北の端はサルトロ正面岩壁上で雪の断がいにあって終る。そぎ落としたような二千メートルの大岩壁の上にこんなに広大なスノーレックがあろうとは。腰まで雪に埋まりながら前方を眺めるとサルトロの純白の頂ぎがまるで果てない平原のはるか彼方にあるようにみえる。その実、頂ぎの直下まではもう1キロとははなれていないのだが、はたしてあそこまで行けるだろうかと一寸気が遠くなりそうなおもいをする。ブルがひとりたどったナンガパルバット頂上への遠い道のことを思い出す。「歩いていけばいつかは着くよ。」Yさんがいう。たとえ何時間かかろうと、それがどんなに退屈な行程であろうとわれわれはひるまない。けれどももう少し変化があってくれたって良さそうなものだ。ビバーク地を出てからすでに5時間ばかり歩いた。だが深雪のラッセルと高度のため距離は2キロほどしか進んでいない。殆んど傾斜のなかった雪面も頂上直下に近づくにつれ、次第に勾配をつよめて来た。さいわい雪は浅くなった。完全に晴れ渡った空の中に東にはK₁₂の山容が青光りしてみえている。そしてそれを取りまく氷河群、いわゆるK₁₂の内院と呼ばれる雪原もはっきり指摘できる。しばしば休憩しつつ、澄み切った大気の中で深く呼吸をする。のどは余り渴かない。タバコも余り吸いたくない。腹は減っているのかどうかもうひとつわからぬ。しかし、この7600mの雪原のただ中をまるで漂うように歩いていることに身体は完全に適応しているようだ。K₁₂の北西方、アプサラサス(Apsarasas)、テラムカンリ(Teram Kangri)の山群もすでにわれわれの眼の高さより低いところにその連なりをみせている。傾斜のきついテラムシェール氷河が太く白いひとつの線になってそれら山群の前を横切って強いアクセントをつけたのち、まるで空に吸いこまれるかとおもうくらいのところまでつづいている。その向こうは中共領チャンタンの辺りだという。ああ、われわれは今アジア大陸の屋根を登っているのだという感激がこみ上げる。雲海はわれわれの高

さより低いところで安定している。ふと、チョゴリザで、藤平・平井の登頂隊がガスの切れ間を見えかくれしながら頂上に一寸刻みで近づいてゆくのを下から眺めていたときのことが脳裏をかすめる。ちっぽけな2つの人影がべらぼうに大きい巨人のような白い壁にあくまで喰っついてはなれないようにみえたあの光景。そこに何か人間の尊厳といったものをみる気持がしたのを覚えている。なかだるみなく連続していた巨大な雪壁をかれらは管々と登りつめていた。時折湧き立ってはかれらをかくすガスの流れの早さはかれらが風の中にいることを示していたし、一寸刻みに高みえと歩むかれらのピッチは、雪が深く、傾斜が強いこと、さらには多分酸素も切れてしまったらしいことを示していた。しかしかれらはたった二人で風と岩と雪と氷の世界を切り開いて登っていたのだ。私はときおり考えたものだ。チョゴリザの本当に未知な部分がかれら二人にしかわかっていないのだ、と。そしてかれらが感じたであろう心の高まりを私はいろいろと想像してみたものである。ところが頂上への最後の内濠を無事渡り終えて、頂上稜線につき上げる氷の斜面のとりつきに達した今、われわれの心は案外平静だ。忍耐を要しはしたが、闘争というにはいささか単調な雪原上の歩みがそうしたのかも知れぬ。稜線までは高度差100mばかり。稜線に出しまえばあとは屋根づたいに高度差30~40mも登れば、そこが頂上だ。

午前九時。大休止をとって、アイゼンを着ける。いよいよかんじんのところにさしかかるのに万一のことがあるとは腹ごしらえとビタミンの補給をするため兵糧丸を噛む。「メデイシン、メデイシン、アンドメデイシン。」日本人はくすりやがむやみに好きなのだなどバシールが笑っている。気温は高くなり、バシールは羽毛服の上に着ていたヤッケをすでに脱いでいた。ハイゼックスの水筒から茶を少し飲む。手をすべらせて水筒の栓がころころともものうい転がり方をして斜面を落ちて行った。さあ、いよいよ頂上はこちらのものだと立ち上がる。肩にするサブザックはいずれも3~4キロでいどで苦にならない。酸素ボンベなどという荷やっかいなものをもって来なかったことはさいわいだ。見上げる斜面はところどころ氷が光っていて、傾斜は30度ばかり。バシールを中にして、私が先行する。雪面にがっちり喰い込むアイゼンが快くよい。頂上稜線部分はこちら側すなわち稜線の北側に巨大な雪庇をはり出している。だがわれわれの登る頂上部分はさいわい雪庇が出ていない。一步一步、コンティニアスのまま近づき、稜線にとび出すところだけワン・アト・ア・タイムで乗り切る。稜線だ。南側の光景が眼下にひろがる。コンダス溪谷が南に屈曲しながら流れている。サルトロを眺めるため昨夏、ひとり訪ずれたこの谷。緑のオアシス、村落らしいものがみえる。コロコ

ンダス(Khorkondus)の村か。リカ(Likah)氷河の偵察を終え村はずれの熱い温泉で疲れをいやしながらシェルピ(Sherpi)氷河の景観を楽しんだときのことを思い出す。われわれは今、コンダス側からみえたサルトロ・カンリのあの赤茶けた、3000mを一気になぎ落ちて大岩壁の上につ立っているのだ。感激よりも、嬉しさの余り、何か夢をみているのではないかというような気がする。稜線上に3人が並んで立った。頂上に向かう。頂上は眼の前にある小さな雪のドームをひとつ越せばよいはずだ。雪が堅くしまっている。ゆっくりアイゼンをきかせつつ最後の登りにかかった。微風、地平線はいずれも雲で飾られてはいるが、まったくおだやかな天候であった。ドームの頂上に着いた。その上は平坦ですぐ眼と鼻の先に本当の頂上らしいのが乗っかっていることがわかった。Yさんが私に声をかける。「頂上はバシールに先に踏ませてやろうな。」正直のところ、私は頂上に立つ順番ということをして重要視するつもりはなかった。けれども同じことなら、国そのものも、山登り若しくは探検もようやくぼつ興期にあるパキスタンで、その国の一人の青年が未踏峰の頂ぎにまず立ったということが少しでも意味をもちうるとすれば……。Yさんの言葉に何のためらいもなく賛成したとき、私の心の中には七面倒な理くつではなくて、さしたる経験があるわけでもないのに、われわれとよく行動を共にしおおせて7742mに至った1人のパキスタン青年に、「花」をもたせてやりたいという気持があった。

いよいよ頂上にさしかかった。ところが、右側、サルトロ正面岩壁側に張り出した雪庇を恐れて稜線のやや左よりに歩いて来た私の眼の前に、はたして雪庇なのか頂上なのか見当のつかない高さ2mばかりの突起があらわれた。突起の向こう側がみえないため、これがはたして頂上かどうか一寸見当がつかない「Yさん、ちょっと確かめてみてからにしますよ。」と突起の左をトラバースし、約5mばかり進んでみる。そこで私は、この屋根が足元からサルトロ・カンリ第II峰とのコルに向かって、一挙に切れ落ちているのを見た。すぐさま戻って、Yさんに伝える。「これが間違いなく頂上です。」Yさんはバシールに手渡すために、ピッケルにパキスタンの国旗、日の丸の旗、そしてわが学士山岳会旗をとりつける。準備はできた。「バシール、この山はきみの国の山だ。きみがまず頂上に立ちたまえ。この旗をもって。」バシールは答えた。「それはちがう。君たちのおかげで、はじめてここまで来たのだ。ドクター・齊藤、あなたこそ先に頂上に立ってその旗を私に渡して下さい。」私は、かれの敏速な返答にいささか驚いた。かれも、今までの初登頂のいろんな物語を少しは知っているのかもしれない。それにしても、かれがまず頂上に立つことを辞退するのは、や

りはじめて頂上を踏むことの意義をかれなりに考えているということだ。しかし、Yさんは旗のついたピッケルを静かに手渡した。かれは素直に受けとり、これを捧げもつようにして、8ミリのシネを構えた私の前を通り頂ぎの突起に近づいてピッケルを立てた。シネのファインダーを透してみるかれの顔は厳粛であった。微風にはためく旗を振り終え、静かに左の方へカメラをパンしてゆくとガッシャブルム山群、ブロード・ピーク、そしてK₂が次々と視界にとび込んで来る。まさに息づまるおもいだ。大きな吐息とともに私はシャッターから手をはなし時計をみる。10時45分。ついにわれわれはサルトロ・カンリの頂ぎに立った。Yさんがゆっくり近づく。特徴のある濃いひげ面が静かに笑っている。しばし無言。そのうちふと思いでして手袋をはめたままの手をさし出す。「握手を忘れていたなあ。」われわれはしっかりと手を握り合った。西の方の雲海の中にひときわ高く、白い梯形の姿をみせているのはチョゴリザだ。1958年あの山を訪ずれた仲間のうち4人までが、またサルトロにやって来ている。チョゴリザとサルトロを結ぶ線は地理的にはこんなにも短いのに、実際は迂余曲折、いつ果てるとも知れない長いみちのりであった。眼の前にチョゴリザの姿を眺めていると彼我をつなぐ見えない糸をたどることに山岳会をあげて専念して来た歳月がまさに今、終りを告げるのだという淋しい思いすら湧いて来る。この糸を私たちはこれからどこにつなごうとするのか。一種虚脱状態の頭の中を、ここから先はもう一歩も登るところがないのだという思いが通り過ぎる。満足と不満がとなり合ってやって来ることを私は実感した。頂上は東西に細長く、約3mばかり。南側は傾斜ゆるく、われわれはそこに立っているが5mほど先で切れおちて、コンダス側の大岩壁となる。北側は雪庇状をなしている。クラストした雪におおわれ、周囲に岩は見あたらない。

バシールは無言である。われわれはカメラをかまえて手当たり次第に周囲の情景を写しとる。眼下に拡がりつづくPK36氷河は、短いが、上流に広大なスノー・フィールドをもつ。幅広く、白一色で巨大な滑走路のようにシアチェン氷河へと流れ下っている。その合流点にはわれわれのアドヴァンス・ベースキャンプがあるはずだが遠すぎて、どのあたりか見当もつかぬ。サルトロの取りつきにある第2キャンプも、そのほかのキャンプもひとつとしてここからはみえない。地形の関係から、頂上にいる3人の姿は下の人たちにはみえていないだろうとおもう。すこし雲は多くなった。しかしいづれも低くたどる。8000mのジャイアントたちはもとより7000m以上の山々もすべて雲の上に頭をつき出している。K₂、ブロード・ピーク(Broad Peak)、ガッシャブルム(Gasherbrum)とつ

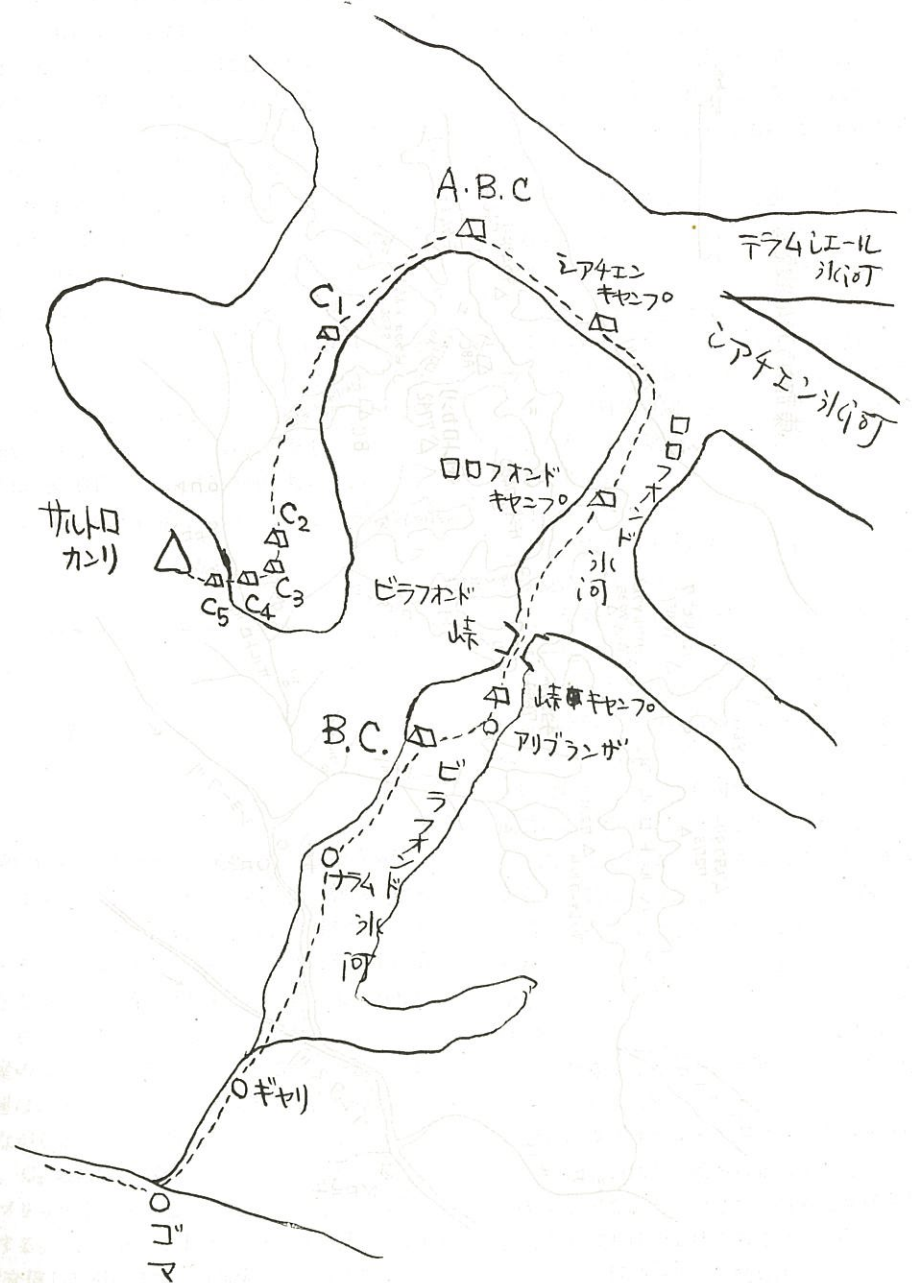
づく山塊はひととき高く抜き出ているし、遠くのマッシュブルムはまるで純白の入道雲だ。チョコリザはドーム裏のスノー・レークをはじめ、その東面が手にとるようにみえている。未踏であるがゆえに興味をひくのは K₁₂ だ。7400 m ながしにしては、実に大きな山容。西に張り出した山稜は岩もありそうだが7000 m まではさして困難もあるまい。それから上、少し壁のようにみえる氷の部分が気がかりで、そこを突破するのがこの山の鍵のようだ。そして、なによりも魅力的なのは、この山がいずれの側も外壁をなす尾根にとりかこまれ、その内濠に相当広大なスノー・フィールド若しくは巨大な氷河をもっているということだ。内院のはるか上部に君臨する王城の風格がある。探検的興味を感じるのは北の方だ。アプサラサス山群、テラムカンリ・グループ、いずれも高さこそ少しおとるとはいえ、山登りの興味もあるし、テラムシェール氷河からリモ氷河、さらにはカラコラム峠とたどってヤルカンド河に出るか、ジャクスガム河ぞいに北に廻り込むことが出来れば、と遠い北の地平線をにらんで考える。

一時間はまたたくうちにすぎ、はやくも正午。トランシーバーのアンテナをひっぱり出すのももどかしく、Yさんが各キャンプあてに送信する。第5キャンプの上尾がこれをキャッチし応答してきた。「10時45分、サルトロ頂上に立ちました。」Yさんの声が喜びにふるえている。かれこそは、この3人の登頂隊員の中では勿論のこと、遠征隊全員の中で、つねにあらゆる事態に動ぜず、ユーモアを忘れず、全幅の信頼を一身に集めて来た人だ。それだけにその責任ははなはだ重かったにちがいない。いま頂上からの登頂報告をするかれの顔は、頂上にはじめて足をのいたそのとき以上に明るく輝いているようだ。登頂の成否と、登頂隊の安否を下で気づかっておられる四手井隊長、第3キャンプまで上って指揮をとった加藤副隊長、アタック・キャンプ建設まで陣頭に立ってわれわれをひきいてくれた林登攀隊長、仲間のだれかれに無事登頂のしらせを頂上から送ることができたわれわれのしあわせ。携帯用ヨーカンのひとつ、3人でわけて食べる。勝利のタバコは残っていた最後の1本だ。Yさんが、ポケットから1枚の写真を取り出し、スリーファイブの平たい箱に収めて頂上の雪に埋めた。最近日本から送られてきた四手井隊長夫人以下隊員の奥さんたちが集ったときの記念写真が入っているという。その心情については私は想像することしかできないけれどもわかるような気がした。バシールも私も頂上には何も残さなかった。

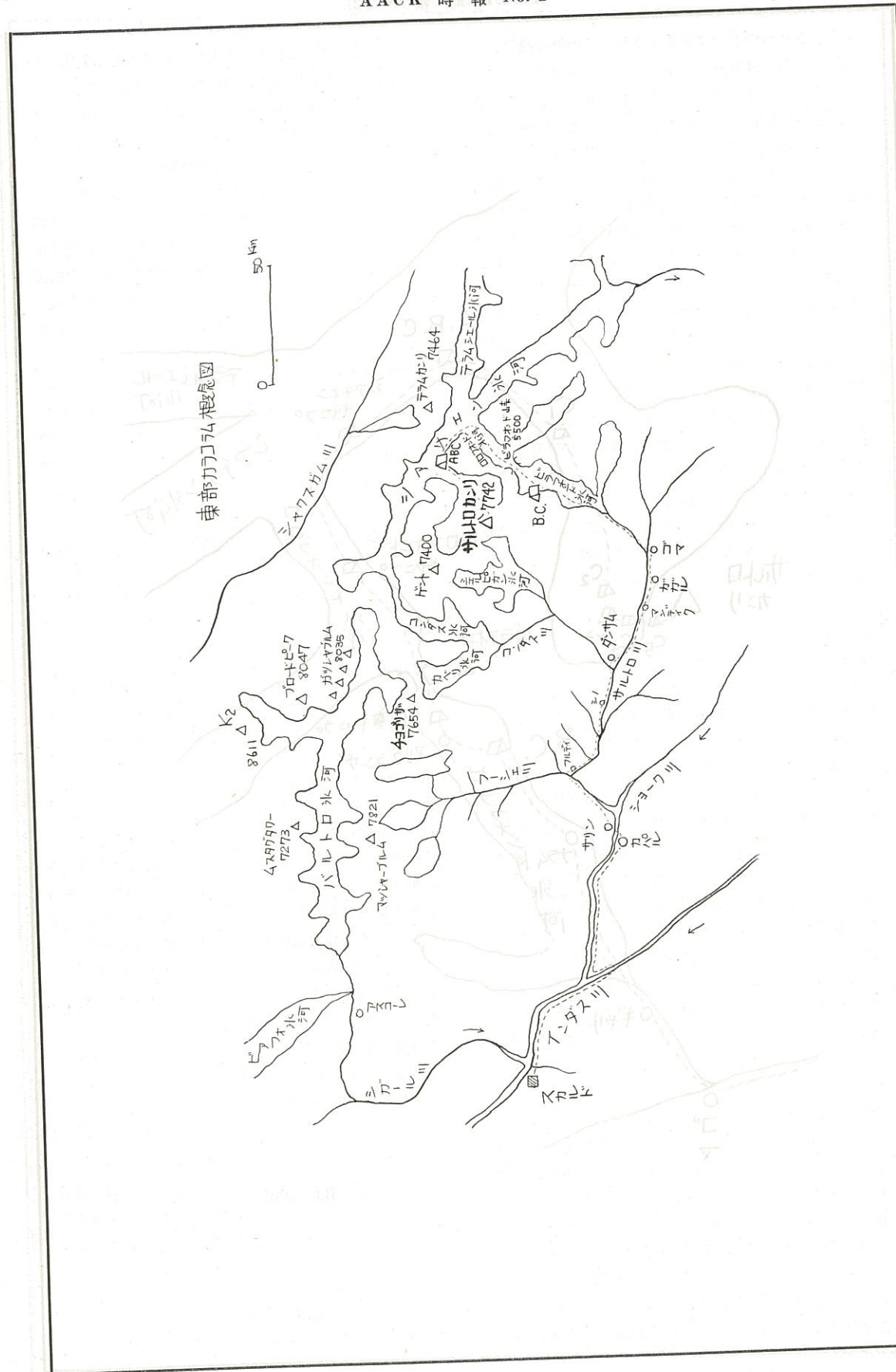
12時すぎ下山にかかる。ビバーク地点までわずか30分に到着。誰かサポート隊が来たらしく、われわれ以外の足跡があるような気がする。第2次登頂隊がす

でに行動を開始し、近くまで来ているのだらうと考えわれわれの使ったツェルトやストーヴ類をそのままに置いて下る。ときどきふり返ると、われわれにとっていい目標でもあったが、なかなか近づけずいぶん悩まされもしたあのジャンダルムが、逆光の中を少しずつ遠のいてゆく。くだるにつれて疲れは激しく、ピッチがおそくなる。リカ溪谷上部の斜面をまきおえ、第5キャンプ上部の大斜面に移ると、すでに雪面は堅くなり、ときおりスカブラが足元からザラザラとくだけ落ちる。雲は多くなったようである。今日一日天候が安定していたのは幸いだ。急傾斜の雪面に3人の影はだんだん長くなる。午後3時、昨日サブザックを落した地点にさしかかる。よろめきながらつづける下降はなかなかはかどらない。第5キャンプ直上の大斜面にかかる。突如、斜面の下に2人の人影がみえた。われわれの方をむいて2人が横に並び、しぎりに両手を挙げて呼んでいるようすだ。まだ高度差は200mもあろうか。斜面のずっと下の方には、すでに夕べの影がひろがりはじめており、まるで奈落に向って下降しているよう。下で待っていてくれるのが誰であるのか一寸みわけがつかない。気はせくが足が進まぬ。傾斜はきつい。テルモスが赤旗のところに転がっている。われわれはこれがサポート隊の好意ある暖かい紅茶の差し入れと気づかぬままみむきもせず下ってしまった。再びコールがきこえる。林さんと岩坪だ。かれらがみえはじめてからすでに1時間は経過している。その間、かれらはわれわれをじっと見守ってくれていたのだ。かれらに一步一步と近づく。両手を挙げて万才している。林さんが近づいてくる。「おかげで登って来ましたよ。」「よくやった。ありがとう!」Yさんと抱きあって、林さんが「よかった、よかった」と涙。Yさんも鼻をすすっている。バシールにはちょっと不慣れな光景のはずだったがこの気持は通じたのであろう。林さんの手を握りしぎりに感謝のことばを述べている。私は岩坪に「ひと足先きに登らせてもらったぞ。」という。かれもここまで来ているからには、上まで突っ走りたいにちがいない。われわれの荷はぜんぶ林さんたち2人がとってくれたので、から身になって第5キャンプへ。岩坪はこの高度で、荷をかついでいるのにギャロップでとんでゆく。

テントでは、茶をつくりながら上尾が待っていてくれた。早速第2次アタックの計画はときどきが、今日加藤さんと相談の上、すでに放棄と決定したとのこたえ。それでは上の方についていたトレースはときどきが誰もそこまでは行ってないという。Yさんと一寸顔を見合わせる。第II峰までの縦走は少し無理としても、われわれのトレースをつかってもうひとパーティくらい頂上に行つてはどうかと思う。しかしこの山の斜面はそんなに長期間へばりついているところではな



B.C. 詳図



いという結論は動かない。そうか、次に頂上にゆく連中とて、すでにわれわれがトレースをつけたところをこのこ追いかけるとはさして面白いことではないだろう。張り切っている谷、上尾さえ納得しているのなら、ここでサルトロをくだることに異論はない。シェルピ・カンリ (Sherpi Kangri) はこちら側から難かしいとしても、テラムカンリのどれかひとつくらいはと期待を別の山につなぐことにしてもらおうか。さきほどのギャロップがこたえて、岩坪は2人用テントの隣りに立てたツェルトの中にもぐり込む。林さんもそこで眠ることになる。仲間に迎え入れられた安堵とともに、われわれもぐったり疲れが出て来た。登頂のはなしもそこそこにYさん、バシールとテントにもぐり込む。テントからもツェルトからもはみ出した上尾はジョイコをならべてその上にゴロ寝だ。明日は一举に第3キャンプにくだらう。平井、谷とは第4キャンプで会えるし、ヒゲに白いものまじった加藤さんとは第3キャンプで会うことになるだろう。四手井隊長に登頂報告できるのはその次の日か。眼をつむるとしばらくは頂稜の真白の雪底が眼の前にちらついていたが、間もなく深い眠りに落ちていった。その夜は風もなかった。

帰 路

谷 泰

7月26日 C₃、6時目がさめて、もうねむる気になれない。となりのテントで岩坪と前小屋が朝飯の準備をしている。「寒いから湯をつくって食器を洗え」とオラム・ラスールにいつている。そんな言葉の中に成功のあとのゆとりを感じたりする。高村は未だ疲れた表情で、ウーウーいながら眠っていた。

前小屋のつくる中華そば。ひさしぶりに一緒にになった前小屋は、大館の産なので、大館観光旅館製だとかいわれながら張りきって朝飯をつくっている。

快晴。C₃の撤収にかかる。クレバスにかかったスノーブリッジがおちてしまったので荷物を吊り降すことにする。上と下とでトランシーバー (Transceiver) で交信しながら降す。11時終了。不用のものを燃やす。乾パンだの食糧の空箱だのが燃える焚火の横で、テラム・カンリ (Teram Kangri) に連なる山々、リモ (Rimo) の高層氷河を眺める。テラム・カンリの可能なルートをあこれと探す。加藤副隊長は降りてから、自分で命名したナルシス・ピーク (その意味は副隊長に直接きかされたし) にスキーでのぼるんだとい

う。若手はピラフォンド・ウォール (Bilafond Wall) 越えのルートを探りにいっか、シアチェン氷河を溯ってみるか、それともテラム・カンリのルート偵察もよいではないか、などと話しあった。カラコラム・クラブのベグ (Beg) 教授も、シアチェンを溯ってコンダス (Kondus) 谷にまわるルートを通りたいといっていたから、案外面白い旅行ができるかもしれない。谷と上尾、それから平井と岩坪は、第二登ができる気持だったのにあきらめなければならなかったで、これだけで帰ってしまうのは、どうもけたくそがわるい感じがしていた。

ルート工作のときにつけた旗を記念にと回収する。布引尾根を降る。高村はしきりにカメラのシャッターを押す。なんだ平凡な写真ばかりとりやがってと加藤副隊長に笑われながらも写す。頂上の石がとれなかったので露岩のあるところで、頂上の石ということにして採集する。花崗岩である。上尾は記念なんていうものには興味ありませんというような顔をして石拾いする大人どもを眺めていた。雪は大ザラメの粗雪。大きな結晶。深くもぐって歩きにくかった。片雲がP36氷河のボーデンに影をおとしている。山々の雪も大分とけて、表面のよごれが褐色に目だつようになった。もう夏に入ったのだ。

C₂ 帰着。四手井隊長、ベグ教授、そしてハイ・ポーター達が出迎えてくれる。握手。連絡将校がアザラシの毛のような濃いひげをのばして現われる。ああこの自己主張のきつい男と、また一緒に行動せねばならないのか。私はこのおしゃべりな軍人にはうんざりしていたけれども、とも角やり手のかれに「われわれの成功、これも君のおかげである。ありがとう。」と礼をいった。とかれは「お前さんには、ガール・フレンドからの手紙は一通もなかった」という返事。また手紙の話か。折角成功して一緒になれたとたんに。かれはわれわれに来る手紙はすべて差出人をみては、フラウから何通来たの、なんだのというくせがあった。「僕にはサルトロというフレンドでいまは十分なんだ。」往路と同じく私はかれとあまり話さないことになった。

唐がらしの大変きいた夕飯。

翌日、カラコラム・クラブのメンバー全員が引揚げるという。かれらは朝から記念撮影だといって、われわれをながながと立たせた。凝った写真屋というものはとかく被写体の気持を考えないものである。それはともかく、折角一緒に合同登山に成功したのに、交歓のパーティを持参の食糧でも出して開くでなし、種付けができたからあとはもう用はありませんとばかり、仕立てあげられた英雄バシール (R. Bashir) をつけてすいすいと帰っていくカラコラム・クラブのやり方にわれわれは啞然とした。カラコラム・クラブは二年あとはにはK₂をねらいたいといっていた。われわれはすく

なくとも山登り技術やマナーにおいてパキスタンのどんな登山団体よりも優れていると思う。トレーニングをうけたいなら、バシールにしても、ペルベツ (Pervez) にしても、いまがチャンスではないか。シアチェン氷河を溯ることはベグ教授の願いの一つだといっていたのに、これは一体どういうことなのだろうか。あたりまえなら、英語しか通じない、気ごころの知りあいにパキスタン・メンバーから早く無関係になりたいと思うのに、さっさと降っていくかれらにこのときは無闇に腹が立った。自分の身のまわりのことも召使いによってしか整理できないような、英国流のマナーになれてしまったパキスタン学生が、どうして近代的な、アルピニズムを体得できるだろう。近代的登山は個人主義のうえに立って始めて成立するはずのものだ。パキスタンで登山は、当分のあいだ成長しはしないだろう。こんな理屈を自分ででっちあげて、わたくしはむしゃくしゃした。カラコラム・クラブと一緒にあれば、ひょっとしたら、許可のおりたルート以外、テラム・カンリの偵察など比較的自由な行動が可能になるかもしれぬ。そんな望みをもっていたからである。その望みがカラコラム・クラブの下山とともにうすれ、「政府の許可がおりない以上許可されたルートから1mたりともはずれてはならん」とがんばっている連絡将校だけが残ったとき、その抑圧が、こんなカラコラム・クラブへの憤りの感情となったのもまあ致し方なかった。連絡将校もこういったわれわれの気持ちを察したらしく、この日、かれとのあいだに、ちょっとした口論がおこった。かれが、高所人夫にサポーターを扇動したのである。権威ある軍人と、備い主の外人との間にはさまれた高所人夫のそのときの悲しそうな顔。まあいい。カラコラム・クラブが去って日本人だけにはじめてなれたのだ。ひさしぶりに成功のあとのゆとりをゆっくり味わおうではないか。各自テントに、キャンピング・ギャズ (Camping Gaz) のバーナーを持ちこみ、茶を沸かしたり、乾燥リンゴを煮たり、自由の時間をたのしんだ。四手井、加藤、林、芥藤は朝日新聞社に送る原稿の執筆に専念。完成は翌未明の午前3時頃であった。

28日、連絡将校は下山のためのクーリーを呼びに降る。朝日新聞、AACK 宛の原稿を託す。

29日、骨休め。食べることにいやに熱心になった。

30日、くもりのち晴。高所人夫がまず C₁ へ先行。今日で C₂ も撤収である。スキーを二台使ってソリをつくる。C₂ の残った荷物を全部つんで軟かくなりはじめた雪面を降る。早朝の堅い雪ならすべりもするが遅出の犬ぞりの犬の肩にひもがくいこんで痛い。二台のそりは、やれこっちは日通だ丸通だといってぬぎつぬかれつ競争する。極地風のボーデンをすぎてしまうと、下の方でパドルが出てきて、難行する。そのパド

ル帯をすぎてクレバスの縦横に走る氷河面が現われてくるようになると前進不能。ソリは解体された。

C₁ はテントの下だけ氷がとけず、一ヶ月の留守のあいだに高床式テントになっていた。翌日は ABC まで。ピーク36氷河もここまでくるともう完全に夏の様相を示している。表面の雪が全くとけてしまっている。とけるだけでなく、昇華したところ、雪はソーダまんじゅうの牛皮をはいだあのように、多孔質になっている。その穴に泥がたまる。ほんの小さな水の流れが溝を掘り、それがキャナルのように成長し、ついに深いクレバスの中にどっとおちこんで、吸いこまれてしまう。その音はまるで発電所のダムの放水音のようである。そのキャナルに沿って、下った。もう両側の山々の斜面も雪が溶けて、表面の瓦礫が、石なだれになってしきりにおちている。ABC の背後にそびえ立つ岩峰は、垂直にきれ、そこにヒマラヤ巒が何段にもついている。背後はぬけるような青空。また石なだれの音。氷河上のモレーンを横切って ABC に帰る。モレーンは堆石の多いところ、少ないところ、波うっているその波の周期がちょうど、氷河の一年間に動く距離ではないかと上尾が説を立てた。夏になると石なだれの落下が盛んになる。ベルト・コンベヤーのように氷河が動けば、石の落下がはげしい夏には山になるというのだ。案外正しいのかもしれない。モレーンの上からコックのタキが、ざんばら髪をふりみだし、にこにこして迎えにきてくれる。握手。

氷河湖が大きくなってボートが浮かべられそうになっている。といってゴム・ボートを出そうというものもない。それほどの元気もないのだ。8月1日から3日、ABC に滞在。荷物の整理。みんな植物採集用にもってきた1年前の古新聞に読みふけている。林は上尾に隊員の顔写真をとったかとせつついている。「へえ」ようやくかれは全隊員の顔写真をとりおわった。報告書にのせるためのものである。

3日、下から連絡将校が集めにいったクーリーがあがってくる。高所人夫は、シアチェン氷河のモレーンの間にけしつぷのように小さい影をも見分けて、クーリーが来たと報告してくれる。33人。既婚者にはまずお手紙。「勝手にしやがれ。おっとおれにも来た」。卵、あんず、野菜。ニワトリ三羽。そして小さく束ねた花をわれわれの胸に、帽子につけてくれる。ギャリはもう花で一杯だという。それをつんできてくれたクーリーの心情が思いがけずうれしかった。ここで一ヶ月ほど前に別れたクーリーたちも、ビラフォンド越えはいやだといって B.C. から帰ってしまったクーリーもいる。ほとんどが顔みしりばかりだ。2人だけ青目、白肌の男がいた。あんずは水々しくてうまい。モハメッド・アリがあんまりくうとよくないというのに、うまいのでくいすぎる。夜中から腹が張る、下痢はする。

翌朝は半数以上の隊員が ABC の撤退日だというのにかぬ顔をしている。足に力が入らない。だるい。ロロフォンド・キャンプまでの途中、モレーンの背後、テラム・シュール氷河を前にして巾広いシアチェン氷河の真中に何度かしゃがみこんだ。プロモントリー (Promontory) は、アイベックス (Ibex、ヒマラヤ地方の野生の山羊の1種) がいて、木も生えているという記述があったが、ほんのり緑づいているだけである。北は新疆、東はインド。テラム・カンリは奥行きのない山だ。ここで今度いくなら、K₁₂ だな。立ちあがるとだるい脚をひきずるようにまた隊列に加わる。

高村はロロフォンド氷河とシアチェン氷河の合流点あたりで、これが最後だと 360° パノラマ写真を三脚を立ててとっていた。赤いセーターを着こんだ林も芸術写真をとるんだと右に左にルートをはずしながら、ゆっくりロロフォンド氷河をのぼる。屋すぎになると暑い。ロロフォンド・キャンプに着くとコックのタキにアイスクリームを作れと命ずる。忠実な名コックはかしこまりましたとばかりひきさがる。アイスクリームを待つ間向いの岩壁にもえはじめた緑の草を採集する。だのに仲々アイスクリームがこない。陽がおちる。陽がかげると急に気温がさがる。ついに夕めし。チャパティとスープ。そしてもう暗くなってから食後のアイスクリーム。西洋人じゃないんだぞと試してみても仕方がない。あればたべ。下痢のことも忘れてたべた。

8月5日、ロロフォンド・キャンプからビラフォンド・ラをこえて BC まで。峠からサルトロ・カンリをみる。大分上部雪原にしわが増えたようである。6日サルトロ・カンリもみおさめ。クーリーはハイ・ポーターに引率されながらどんどん降っていく。えらく早い。われわれは石のごろごろしたモレーン上を、おくれながら下る。四手井隊長は案外足早で元気であった。遠い遠い。チュミク (Chumik) 氷河出合の近く、左岸、灌木の生えているところで、遅めの昼めし。クーリーは暑いのでブッシュの中に入り込んで、ハッター粉を指でねってたべている。われわれは卵焼とノン。蝶々を採る。シジミ系統しかみかけない。くま蜂一匹。瓶の中におさめる。さあまたひと下り。柳蘭がでてくる。エーデル・ワイスもある。にせ物のエーデル・ワイスをつんで喜んでいるものもいる。よもぎ風の芳香性のある菊が咲いている。ふうろうの類。

氷河のツングにきておどろいた。濁流が大きな川になって流れている。ジュニパー、各種の柳、バラ、タマリスクも満開である。往路でたくさんみかけた放牧の羊は今はいない。石小屋はからっぽになっている。ここで花にかこまれて骨休めだ。初夏の感じである。岩壁にかこまれた花園での休養はわれわれだけの享受できる第一級のぜいたくであった。

7日、ギャリに滞在。ガガルの村までニワトリや卵を買いにやらせる。「葉、葉」といってやってくるうさい村人もいない。ここで、下から食糧をあげて二三日滞在すれば最高である。床屋が開業する。加藤副隊長はタンポポの根をばりおこしている。油のためのキンピラにするのだという。平井は拾った籠をもってお供をする。

アブドゥル・ラヒムがニワトリをもって帰ってくる。連絡将校からの手紙でファイバートランクが盗難にあったという。手紙によると大金の入ったトランクの可能性が濃いという。会計の谷と前小屋とは至急ガガルにおりて調べることになる。せつかくの「ギャリの休日」もつまらない事故で台無しになってしまった。仕方がない。大金のことであれば、暑い午後の石ころ道をかけおろねばなるまい。増水した濁流のうえにかかった細い橋を渡ってガガルにつくと、連絡将校は、やや興奮した面持ちだ。このハッサン・ジュウがぼけっとしていたから、盗まれたりしたのだと、高所人夫の一人を足でけったりする。なくなったのは大金の入ったトランクではなく、四手井さんのであった。

ギャリでは、夜キャンプ・ファイア。高村は AACK 宛の登頂記書きで徹夜をしたという。

翌日はガガルまで。増水で目がまわるように早い濁流の上にかかった細い木橋。これでは羊は通れまい。ギャリで放牧していない理由がわかった。盗難事件のためギャリでのんびり滞在しておれなくなったわれわれは、あとはもう、ギャリを一気に下ってしまうことになった。もともと、連絡将校は教養ある者は無駄に金を浪費しないという考えをもっていた。これがかれの家風か、軍人仲間の立て前かそれは知らない。ただ毎日クーリー賃を安あがりにするため、ピッチをあげることは、すさまじいものがあった。たしかに1日日程が短縮できればクーリー60人として600ルピー、42000円の節約になるのだから、大きい。われわれにとってもありがたい。しかし、そのかわりに、われわれとしてゆっくりみとどけておきたいものも十分にみることができなかった。かれには、平凡な田舎をあるいているにすぎないのだけれど、われわれ日本人には、十分好奇心の対象になるものもかかずあるのだ。その旅人の気持が、かれにはあまりわからないのか。もうがむしゃらに歩いた。

9日、マンディクで朝食。現地食費を往きに節約したので案外食費が潤沢である。今回は食糧はヴァラエティもとんでいたし、うまいものも多かったのに、ほとんどの隊員がやせた。持ち帰ってもしようのない金である。財布のひもをゆるめて体重をとりもどそう。毎日一人当卵10個あまり。にわとりは一人当半匹。

バラオ (Parao) に着く。アズの木にかこまれた木蔭にテントする。えらく村人が多勢集っているのでは何

だという祭りだという。寺院から村人がぞろぞろと出てくる。お布施を出してほしいというので出すと、おさがりが来た。土地の地主が粉を出して、祭りの終りに村人に配るのだという。一種の団子である。神像もなにもない寺院でまさか神さんのお供えでもあるまい。それともアラーの神でも人間の食べ物をたべたりするのかもしれない。そこらあたりがどうも解らない。甘味のない団子であった。翌日フルディ (Huldi) へ。村はずれまで道々アンスの実をとってはたべた。高まきの道。はるか下ショーク川の河床に雪溶け水が渦まいている。途中の岩にアイベックスを簡略に図案化した線画が刻んである。フルディ 2 時着。11 日バレゴン (Baregon) でニワトリや卵を買い入れる。マルチガン (Maltigaon) 着 4 時。村人が花を皿にのせて迎えてくれる。矢車草、マーガレット、スイトピー、ダリア、けしなど。

翌日はカバル (Khapalu) まで。晴れあがったマッシュブルムをふりかえりふりかえり、カラコラムにまた来たくなってしまった自分を見出した。

マチュリでおそい朝食をとったとき、チョゴリザ隊の泣虫のベアラーがピカピカの皮靴、すばらしい洋服であらわれた。平井が彼を発見した。チョゴリザのハイ

・ポータ、モーハメッド・アリーは突然彼にだきつかれて目を白黒。そのこっけいな様子に一同腹をかかえる。

サリン着 12 時。長いトラベルは終わった。支払いをしてクーリーを解散させることにした。荷物を運ぶゾークを待ちながら、砂嵐の吹きはじめたショーク川の広い河原の真中で金を数えた。ファイバー・トランクを机がわりにおいて、青いビニロンの金入れ袋から、ホッチキスでとめた札束を出して数える。連絡将校は杖をふってクーリーを並ばせる。56 ルピー、66 ルピー。渡渉のとき流れそうになった中国人風の男。かれは歌がうまかった。メートとして組を統率し、要求するときには正当の給料をあくまで要求した、ハイ・ポーター落第生。ピンディで買ったという色物ハンカチをもっているにやけ男……。番号札を返しては一人一人金をうけとっていく。吹きはじめた砂嵐に、金がとびそうになる。1 組、2 組、3 組。シャガんだクーリーの列が一つ一つ減っていく。支払い終了。荷物にかけてあった紐をほどいて帰りは始める。「さよなら」と挨拶していくもの。「またくるから会おうぜ」。三々五々砂嵐にぼろ服をなびかせながらクーリー達は消えていった。

こうして長いトラベルは終わった。

大阪 A. A. C. K. 会員の集い

主として大阪在住の会員相互の連絡をはかるため、有志が集まり毎月第一火曜日夕方に集会を持つこととなりました。もしこの集会に興味をお持ちの方はぜひ御参加下さい。歓迎いたします。詳細は

谷 口 朗

大阪市東区本町 3 の 3 丸紅飯田株式会社木材部
電話 大阪 271-2231

まで。

装備・食糧その他に関する覚え書

1. 装備について
2. 無線機について
3. 食糧について
4. 写真について

装備について

平 井 一 正

遠征が終わった今、反省してみると、今回のサルトロ隊の装備はある一面では非常に満足すべきものであったが、他の面ではまだまだ考えねばならぬ点を多く含んでいる。前者にはテントをはじめ衣類関係、無線機等、後者にはたとえば炊事具、登攀具等である。

準備状況からいえば、全体的にみて前回までの経験と、準備期間が長かったことは、準備をする上に非常に好都合であった。しかし、今回の遠征がパキスタンとの合同であることは、ある意味からいえば準備をすすめる上で大きな障害となった。ことに出発まぎわまでパ側隊員が決定しなかったことでサイズを必要とする個人装備の準備は大いにやりにくかった。実際パキスタン側メンバーの人数が正式に決定したのは船が出たあとの 4 月の中旬、しかもそのうちの若手の二人については我々がパキスタンについてからはじめて決定したという状況である。この若手二人の足のサイズはまた馬鹿に大きく、見はからって持参した靴が小さすぎてその調整には可なり苦労した。

さて次に各細目につき代表的なものをとりあげて説明する。

1. 高処用個人装備

防寒服・寝袋 従来羽毛を使用していたが今回は羽毛の代りに化繊綿（主にテトロン綿、一部カネカロン綿）を使用した。性能は羽毛に劣るというデータはあるが、実際使用した感じでは羽毛に比してことに保温性が悪いという事はなく、また破れた時にも簡単に修理でき、価格も安いという利点をもつ。布地は日本レーヨンに依頼して 30 デニールのナイロンタフタをクリスタル加工した完全防風の軽い布を作り、また裏地は 12 匁絹羽二重とし、吸湿性をよくし、肌ざわりをよくした。いずれも結果は好評であった。

ヤッケ・オーバズボン “テトズれ”ということ、チョゴリザ以来余り好評でなかったが、その防風性、軽量を考えて再びテトロン地を採用した。使用布はテトロンカラコルム。使用した結果“テトズれ”以外に欠点は考えられない優秀性を示した。

カッターシャツ・ズボン チョゴリザの時、共に悪評フンブンだったが、今回、カッターシャツは各自で準備してもらい、ズボンだけを係が調達した。カッターシャツは各自好みの柄をえらんで作ったので問題はなかった。ズボンは兼松羊毛から提供をうけた厚手のウール地の丈夫なものであったが、布地が厚すぎたきらいはあった。C₃ 以上の高所ではこの重いズボンの代りに羽毛ズボンを着用した方が動作し易かったという結果が一部隊員からでているが、羽毛ズボンとズボンのコンビネーションも今後考える必要がある。

下着・セータ類 アミシャツ、カシミロン肌着、カシミヤラクダシャツ、エクスランのヘチマエリセータ等、下着、セータ類は鐘淵化学工業、レナウン商事、東洋紡等の提供をうけて潤沢であった。

登山靴 キャラバンのときは、キャラバンシューズ（藤倉ゴム（山晴社）、オニツカ KK より提供）、長い氷河上のトラベルは低所靴（普通の登山靴、各自準備）、高所では特別製の高処靴の三段階を考えた。この三種の靴を準備することについては、いろいろと批判も多かったが結果的にみるとキャラバンシューズは別として、パドルの多い長い氷河のトラベルに用いる靴は高処で用いる登山靴とはやはり区別した方がよかった。

高処靴は秀山荘製で、外側の甲皮にはドイツ製防水皮、その内側はマイラーのフィルム、羊毛の皮という三層であって、足にあたる所は羊毛で接触している。また底はサラインソールの敷皮、中底、フェルト、相底を経てビブラムソールといった構造である。行動中オーバーシューズの使用と相まって寒さはかなり防げたものと思われる。

低所靴としては普通我々が内地の山で使っている茶利皮を用いたビブラム登山靴を用いた。

我々が ABC に到着した頃、氷河は午後になるとどろどろのパドルになり我々をなやませた。高処用の靴を使用したのでは羊毛が水を含んでなかなか乾かぬうえいたみが激しい。このために低所用登山靴は大いに役に立った。しかし今後の問題としてこのようなパドル地帯を行進するときの靴は完全防水性のものを考える必要がある。これは湿润ヒマラヤ遠征のときにも問題となるであろう。

キャラバンシューズではチョゴリザのときマメを作った全員藤平氏より手痛いお叱言をいただいた思い出

があるが、今回はその後いろいろとメーカーの方でも研究をして改良した結果足のしまり具合もよくマメも出来なかった。

手袋・靴下 問題がないようで案外問題があるのがこの手袋、靴下である。チョゴリザのときはスウェーデンやノルウェーから輸入した脱脂していない羊毛の毛糸から作ったものを持参した。脱脂している毛糸の多くは一度使用したら縮んで始末に困った。今回は東洋紡、東亜紡より提供をうけた毛糸を大阪シウラスポーツ店の好意で津沢メリヤスで加工した。結果は非常に良好で、スベアの靴下、手袋が使われずにすんだ。

キャラバン中はカネカロンのパイルソックスを利用したが、少々足がむれること以外は丈夫ではき心地も良い。

帽子 内地から高処帽、ジャージ帽、キンキラ帽を持参し、カラチでつば広のカウボーイハットを購入した。山に入るまでの帽子としてはこのカウボーイハットと、山晴社から提供をうけたテトロンにアルミを蒸着したものを巻いた壁糸を織った所謂キンキラ帽を使用した。ことにこのキンキラ帽は隊員に愛好され C₂ まで使用した。

高処帽は内面をカネカロンボア、外側をテトロンで作り、パイロット帽の形式にした。保温性に優れ、非常に優秀であった。

ピッケル・アイゼン ピッケルは各自が準備し、アイゼンは門田の特殊鋼、八本爪を使用した。

2. テント類

低所用テント 使用した布はビニロン 8100 番 60 番 双糸、エクスランポプリンテント地の二種類で、それぞれ倉敷レーヨン、東洋紡より提供いただいた。とくにエクスラン布地はヒマラヤで使うのははじめての事でもあり、現在テスト中の結果がわかればいろいろと興味あるデータが得られよう。

ビニロン、エクスラン共に褪色はひどかったが使用に差支えることはなかった。隊長、副隊長等のための個人テント、六人用、八人用を準備した。ドクターのための大きい診療テントを特に作らなかったが、小さいのではだめで大きいのが絶対必要である。

高処用テント 使用した布はテトロン、長繊維ビニロンの二種類である。ただしテトロンは、テトロンを鐘紡の研究所に依頼してタテ糸とヨコ糸の本数を揃えて織った特別製の 2/2 テトロンツイルと、帝人に依頼して試織した 1/2 テトロンツイルの 2 種類である。チョゴリザの時はテトロンを大幅にとり入れたが、いずれも平織(タフタ)で、これは縫製のときに布の糸の密度が大のため縫糸がとけるといふ欠点があった。今回はすべて綾織(ツイル)とし、縫糸の熔断という欠点をなくし、且強度をふやすようにしたものである。

ビニロンの長繊維のテントは倉敷レーヨンに依頼して特別に試作してもらったものだが、この布で作ったテントはヒマラヤでは勿論のこと内地の山でも使ったことはなく、強度その他多くの興味あるデータが得られると思う。

以上三種類のテント布地をとりまぜて、四人用、三人用、それからアタック用二人用を東京細野テント店で製作した。形はいずれも外側吊下げ式ウインパー、内張は絹を使い、四人用には二本、三人用には一本のバンパーフレームを入れて居住性をよくした。

色は赤、橙色の二色としたが透光性もよく、居住性は優秀であり、強度の不安は全然なく、縫製の点で二三不満な所もあるが、重量の点を除いて高処用テントに関してはほぼ完成の域に達したのではないかと思われた。

ツェルト・シート ツェルトは日本レーヨンのナイロンタフタ(キャンパー)を使用した。軽量且完全防水で本来の目的の外に C₂ で天日による水作りにも用いた。

シートについては、すべてのグランドシートとフライシートの一部をビニロンで作し、一部テントのフライシートにエクスランおよびテトロンを用いた。さらに紫外線の影響をしらべるために暴露用テストピースとして種々の布を短冊形に縫い合せたものを作り、テントのフライシートとして使用した。

3. 登攀用具

ロープ 梱包用、テントはりづな、フィックスロープ、縄ばしごのロープ等すべてビニロンの、所謂クレモナコードを使用した。登攀用のロープはすべてナイロン 10 ミリを使用した。

ビニロンについては倉敷レーヨン、ナイロンについては東洋レーヨンよりフィラメントを提供していただき大阪芦森工業で製品化した。

なわばしご 今度の山で非常に役立ったものの 1 つである。8 ミリのクレモナコードを使用し、30 cm 間隔に、コの字形に曲げた厚さ 2 ミリのアルミ合金板をとりつけた。欠点はロープの作るキンクである。

フィックスパー・ショイコ 神戸製鋼、浪速金属等の御好意により共にユニークなものを作ることができた。フィックスパーは軟雪に固定ロープ又はなわばしごを固定するときに必須のものであった。厚さ 1.4 ミリの硬質アルミ板を M 字形に曲げ、長さ 1 m の坑状にした。カラビナを通す穴を細工してあるので取扱いは便利であった。

つぎにショイコについてであるが、チョゴリザのときはパイプでフレームを作ったが、幾分弱いという批判があり、今回はコの字形アングルでフレームを作

た。材は 1.4 ミリの硬質アルミ合金で重量 1.2 kg。非常に軽便である。

捲上機 ビラフォン峠から ピーク 36 氷河源頭へのショートカットのルートが見つかった時に備えて約 4 キロの捲上機を東京好日山荘の協力で考案した。結果は捲上げ用に使わず、C₃ からの撤収の際、捲おろしに使用したが、今後の問題としてさらに軽量簡便なものを試作研究する必要がある。

4. 炊事具・その他

ケロシンストーブ ノズル調整器つきプリムスケロシンストーブを香港で購入して持参した。高所キャンプでは専らプロパンを用いたので高所での性能はともかくとして 6000 米までの使用では快調であった。

プロパンストーブ チョゴリザの時好評だったプリムスプロパンストーブを今回も高処キャンプで主に使用した。5 キロ入りボンベ 4 個、10 キロ入りボンベ 13 個を持参し、これから 1 キロ入り小ボンベに入れかえて高所キャンプで使用した。その他 B.C. 等でこの大ボンベよりガスを引っぱってプロパンコンロを使用して快適な調理ができた。

プリムスプロパンストーブの欠点はボンベの重量と中味すなわち残量がわからないことである。この欠点を一挙に解決するものとして硬質ナイロン製のボンベがある。浜松の高木鉄工 KK が製作しており、市販されているものは内容積 100cc 程度の小さなものしかなく、これを利用したバーナーを試作して持参した。ボンベは素材としてのナイロンには問題がなかったが口金部分からガスがもれるのもあり、信頼性の点から BC のみで使用した。さらに 1 キロ程度のナイロンボンベの試作を依頼したが、試作期間が短く充分信頼のおけるものが作れなかったため今回は見送ったが、これは口金の改良とともに今後の研究課題となろう。

燃料用ではないが 100cc のボンベを使ったランタンは軽量でその明るさは、すばらしかった。

ブタンストーブ ノジャックに行った岩坪が感激して報告したポーランド隊のブタンストーブと同じで、キャンピングガスの商品名で市販されているものである。非常に軽く操作が簡単でアタック隊がビバーク地点で暖がとれたのもこのストーブのおかげである。欠点はプロパンに比して幾分火力がおちること、構造上安定性を欠くこと等であるが、今後もその軽量、簡便さから大いに利用されるものと思われる。ただこれだけに頼るのは火力の点から問題があり、プロパンと併用の形がいいと思う。

無線機 サルトロが成功した 1 つの原因として無線機がとりあげられる程、今回の山では 100% 利用できた。ことに頂上から登頂成功の無電が成功したことは古今例をみないところである。

高所キャンプではすべてナショナルの T-1 型トランシーバー(27.112MC)を使用した。他に PRC-6(51.5MC)、富士通トランシーバーも持参したが、これらはキャラバンあるいは峠からの輸送のときに使用した。無線が成功した原因の 1 つには地形的な関係もあるが、軽量(600gr)で操作が簡単なことも原因の 1 つであろう。

発電機 心電計の電源として、また積算照度計の電源として簡単な発電機を作り持参した。これはモータバイクエンジンで直流 12V を発生させ、バイブレータで直流を交流 100V に変換するものである。急造のせいで余りすっきりしたものではなく、重量も 40 キロという重いものになってしまったが、現地で 2 回心電図をとることに成功した。ただ 5000 m の ABC では酸素ボンベから O₂ を補給してやらないと発火が困難であった。

5. ポーターおよびクーリー用装備について

ポーター用装備 チョゴリザのときと同じ程度の個人装備(アメリカ中古品)を準備したが、彼等はチョゴリザ以後各国遠征隊に参加し、かなりぜいたくになっており、たとえばチョゴリザの時の中古の羽毛服には内心大いに不満だったらしい。マッシュアップルムのアメリカ隊はサーブもポーターも同じだったとくりかえしいていたが、彼等の質が向上したのと同様、彼等にもいいものを与えてやらねばならない。ただ彼等は質よりも見ばえのするものの方をよろこぶ傾向にある。

ポーター用キャラバンテントは青色のビニロンで作ったが、透光性がわるかった。コックテントは別に赤色ビニロンで作った。

クーリー用装備 ビラフォン峠越えに必要なして最低限のクーリーに与える装備については何回となく討論したが、結局結論はでなかった。クーリー達が何を要求するかがわからなかったのである。

準備したものは B.C. から峠へ往復する 70 人の人夫に対して雪めがね、ジャングルブーツ(ビブラム底のズック靴)、ソックス、手袋を与え、峠をこえてシアチェン氷河におりる人夫に対しては以上の他に毛布、毛の靴下、ヤッケさらにパッチ(約 15 人)を与えた。

さらに彼等に夏用テント 3 張(このうち 2 張は大グランジをひもでしばった簡易型のもの)、ケロシンストーブ 2 台(灯心式)を準備した。結果的にみてクーリーに対する装備はおおむね良かったように考える。

6. 終りに

最後に美的観点から今度の装備を検討すると、隊員のスタイルはやはり良いとはいえないようである。これは同じものを着ても側隊員はスカッとして見えるのを考えてみるとどうやら日本人個有のものらしい。

スタイルはどうも胴長の日本隊員はよくない。

カラーコンディションはテント関係はおおむね良好だったが、個人装備ではもう少し研究の余地がある。たとえば寝袋、防寒服等、寒色系が多く、赤のよう

な暖色系が少なかった等である。

最後に御援助賜った各関係会社、また準備に献身的な努力をして下さった会員安田武氏に厚くお礼申しあげます。

サルトロカンリ遠征装備表

A. 個人装備 (日10人, パ5人分)

1) 隊員用

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
防 寒 服 上, 下	15	1,500	日レ(ナイロンタフタ)*, 帝人(テترون綿)*, 絹業協会(絹羽二重)*	大 阪 好 日 山 荘	羽毛服に代るもの, 裏地は絹
ウインドヤッケ	15	450	帝人(テترون・カラコルム)*	一 沢 製 作 所	
ズボン	15	300	"	"	
オーバーシューズ	2×15	500	倉レ(ビニロン8100番)*	"	
寝 袋	15	2,000	日レ(ナイロンタフタ)*, 帝人(テترون綿)*, 絹業協会(絹羽二重)*	大 阪 好 日 山 荘	
テントシューズ	15	800	日レ(ナイロンウインコル)*, 底はナイロンシール, うらはカネカロンポアー**	"	
アイゼン	15	900	ニッケルクローム, 8本爪	門 田	
ピッケル	15	950	ニッケルクローム	"	個人負担
登山靴(高所用)	15	2,500	ドイツ製防水皮, マイラーフィルム, 羊毛の皮	秀 山 荘	
" (低所用)	15	2,500	チャリ皮	一 部 秀 山 荘	個人負担
キャラバンシューズ	15	1,500		オ ニ ツ カ* フ ジ ャ ラ*	
手袋 5本指(絹)	2×15	100	日本製糸協会(絹トリコット)*	大 阪 好 日 山 荘	
5本指(毛)	3×15	120	東洋紡および東亜紡(それぞれ並太, 中細毛糸)*	シウラススポーツ店をへて津沢メリヤス	
3本指(毛)	2×15	120	"	"	
皮オーバー	15	200	羊皮	秀 山 荘	
靴下薄手	4×15	120	東亜紡(中細毛糸)*	シウラススポーツ店をへて津沢メリヤス	
厚手	4×15	140	東洋紡(並太毛糸)*	"	
パイルソックス	2×15	100		旭化成(カシミロン靴下)*	
セータ(ヘチマエリ)	15	500	東洋紡(エクスラン毛糸)*	東 洋 紡*	
セータ(前開き)	10	630		シウラススポーツ店* パネロンは津沢メリヤスより寄贈	ナイロンファスナー各種色柄
アミシャツ 上, 下	15	100	カネカロン*, パネロン*		
帽子(毛糸)	15	100	東洋紡, 東亜紡より毛糸*	武庫川女子大 シウラススポーツ店	
(ジャージ)	15	50			
(高 処 用)	15	100	日レ(ナイロンウインコル)* 三菱レーヨン(ポアー)*	大 阪 好 日 山 荘	
ゴーグル	15	100		"	
雪めがね(水中めがね型)	15	70		"	
登山用ズボン	15	1,200	兼松羊毛*, 池田商店*		
ラクダシャツ(カシミヤシャツ)	15	600		レナウン商事*	
肌着(カシミロン)	15	400		旭化成工業*	
(レナウン)	15	400		レナウン商事*	
絹マフラー	15	30	絹業協会*		

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
アイゼンバンド	15	100		大 阪 好 日 山 荘	
ピッケルバンド	15	100		京 都 一 沢 製 作 所	
サブザック	15	800	倉レ(ビニロン8100番)*	"	赤色
物入れ袋	2×15	100	日レ(ナイロンタフタ)*	"	
懐中電燈(棒状)	15	200		松 下 電 器 産 業*	
" (ヘッドライト)	15	250		"	
電 球 3.8V	40	10		"	
2.5V	20	10		"	
水筒(ハイゼックス)	15	150	三井化学*		
テルモス(1l入り)	16	400	イーグルマホービン*		
キャンバスバッグ	15	200	倉レ(ビニロン8100番)*	京 都 一 沢 製 作 所	
調査かばん	15	150	"	"	
スバツ	15	100		大 阪 好 日 山 荘	
エヤマット大	15	1,200		山晴社を通して藤倉 ゴム**	
作業衣上, 下	15	800	日本エクスラン工業*	浪 速 実 業	個人負担
カッターシャツ	15	600			
ヒヤケドメクリーム	15	150		資 生 堂*	
リップクリーム	15	100		"	
チリガミ等雑品					

(以上の他, 牧内氏に対し若干の準備をした。)

2) 高処用ポータ (10人)

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
羽 毛 服 上	10	1,000			アンナブルナ, チョゴリザのもの
ウインドヤッケ	10	450	日レ(ナイロンウインコル)*	一 沢 製 作 所	赤色
ズボン	10	300	日レ(ナイロンウインコル)*	"	灰色
オーバーシューズ	10	500	倉レ(ビニロン8100番)*	"	
手袋 5本指	20	120		秀 山 荘	米軍放出品
3本指	20	120		"	"
オーバー	10	150		"	"
靴下薄手	20	120		"	"
厚手	20	140		"	"
パイル	10	100	カネカロン(パイルソックス)*		
寝 袋	10	2,000		秀 山 荘	カネカ綿
ピッケル	10	1,000		大 阪 好 日 山 荘*	
アイゼン	10	900		大 阪 好 日 山 荘	
登山靴	10	2,500		秀 山 荘	
ズボン	10	800		"	
カッターシャツ	10	500		"	米軍放出品
厚手下着	10	500		レナウン商事*	"
肌着(カシミロン)	10	300		旭化成工業*	
帽子(防寒)	10	200		秀 山 荘	米軍放出品
" (ジャージ)	10	50		シウラススポーツ店	
雪めがね(水中めがね式)	10	70		大 阪 好 日 山 荘	
水筒(ハイゼックス)	10	150	三井化学*		
エヤマット	10	800		山晴社を経て藤倉 ゴム**	
セータ(Vエリ)	10	200		レナウン*	サーブ用として準備したもの

3) クーリー用

雪めがね(サングラス式)	250	50		京大北門前 岩崎めがね店
--------------	-----	----	--	-----------------

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
キャラバンシューズ	70	1,500	倉レ(ビニロン8100番)*	山晴社を経て、藤倉ゴム** 北野神社内の古着店	ジャングルブーツとも言う(輸出入)
毛 布	30	800			
ソ ッ ク ス	30	100			
手 袋	30	50			
ヤ ッ ケ 上	30	500			
バ ッ ケ	100	50			

B. 共同装備

1) 露 営 用 具

高 処 テ ン ト 2 人 用	2	5,000	帝人(テトロンフィラメント)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	東京 好日山荘 (細野 テント店)	タテ:テトロン 150d 103本/in ヨコ:テトロン 150d 105本/in 組織2/2ツイル, 赤色
3 人 用 (テトロンツイル)	4	6,000	帝人(テトロンツイル)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	全上	帝人テトロンツ イルは タテ:テトロン 100d 82本/cm ヨコ:テトロン 150d 38本/cm 2/1ツイル,オレ ンジ色バンパー 入り
3 人 用 (ビニロン長繊維)	1	6,000	倉レ(ビニロン長繊維)*	京都一沢製作所	タテ:ビニロン 長セナイ 70d 118本/in ヨコ:ビニロン 長セナイ 70d 102本/in 組織2/2ツイル, オレンジ色
3 人 用 (テトロン) カラコルム	3	5,500	帝人(テトロンカラコルム)*	中野 テント店	橙色, 1961年ビ ルマ用に試作し たもの
4 人 用 (テトロンツイル)	3	6,500	帝人(テトロンツイル)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	東京 好日山荘 (細野 テント店)	バンパー 2組入 り
4 人 用 (ビニロン長繊維)	1	6,500	倉レ(ビニロン長繊維)*	京都一沢製作所	橙色, バンパー 入り
キャラバン用テント 1人用(ビニロン)	3	4,500	倉レ(ビニロン8100番)*	全上	"
1人用(エクスラン)	3	4,000	東洋紡(エクスランポプリン テント地)*	"	"
6人用(ビニロン)	1	7,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	"
"(エクスラン)	1	6,000	東洋紡(エクスランポプリン 地)*	"	"
8人用(ビニロン)	1	8,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	"、のちにクー リー用テントと なる
ポータ用 8人用 (ビニロン)	1	8,000	倉レ(ビニロン8110番)*	"	青色
コックテント6人用	1	7,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	赤色
ツェルト	4	800	(日レナイロンタフタ)*	"	青色(キャンパ ーと云ふ) 青色, クーリー 用テントに改造
グランドシート 2.7×2.7m	10	1,300	倉レ(ビニロン8110番)*	"	赤色
" 1.8×1.8m	35	1,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	1961年ビルマの 時のもの
フライシート 3人用	3	1,400	帝人(テトロンカラコルム)*	中野 テント	テトロン, エク スラン等試験用 布を短冊型につ なぐ
試験用	2	1,500	東洋紡研究所*	京都一沢製作所	

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
キャンバスバッグ大	20	300	倉レビニロン8100番*	京都一沢製作所	
" 小	30	200	"	"	
ベ グ	150	200		東京 好日山荘	
シ ャ ベ ル	4	1,500			
ノコギリ 雪用	1	800			
普通	3	800			

2) 登 攀 用 具

ピトン (アイス大)	25	200			チョコリザ残品
(アイス小)	25	150			"
(マウエル)	10	100			"
アイスバイル	2	700			"
ハンマー	3	450			"
カラビナ(普通)	50	120			"
(リング付)	50	120			"
ストック	10	700			
ザイルナイロン30m	5	2,100	東洋レーヨンナイロン原糸*	芳賀スキー*	
40m	4	2,700	"	芦森工業	11ミリ
フィックスロープ (クレモナ)6ミリ	200m×3		倉レビニロン原糸*	"	"
9ミリ	200m×2		"	"	"
3ミリ	200m ×10		"	"	梱包に役立つ
ナワバシゴ 10m	5	3,000	倉レクレモナコード(8ミリ)* 踏板は神戸製鋼*	大阪 好日山荘	2本はチョコリ ザの残品
ア ブ ミ	4	300			チョコリザ残品
キスリング	5	1,200	倉レ(ビニロン8100番)*	京都一沢製作所	
シ ョ イ コ	20	2,000	神戸製鋼(1.4ミリ硬質アルミ)*	浪速金属*,大阪好日 山荘	
赤 旗	1000	20		一沢製作所	
赤 テ ー プ	5	50			
フィックス用棒	5	900	神戸製鋼1.4ミリ硬質アルミ*	浪速金属*	5本は不足
捲上機	1	10,000		東京 好日山荘	
滑 車	4	1,000		"	
ワ カ ン	10	1,000		大阪 好日山荘	
細 竹	1000	10		東山二条上ル 竹屋	
ス キ ー	4	5,500		芳賀スキー*	
シ ー ル	4	300		大阪 好日山荘	

3) 炊 事 具, 燃 料

ブルムス ケロシンストーブ	10	1,450		ホンコンで購入	ノズル調整器つ き
ブルムスプロパンボン ベ (1kg入り)	5	1,500		岩谷産業*	
" バーナー	5	800		"	
プロパンボンベ (5kg入り)	4	10,000		"	}プロパンの量は 充分であった
" (10kg入り)	13	25,000		"	
プロパン流量調整器	2	500		"	
" 充填器	3	540		"	
プロパンコンロ	2	5,000		"	
圧力ナベ	8	1,000		大阪ガス*	4ヶはチョコリ ザ残品

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および その 購入先 又は 提供先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又は 先 (*寄贈)	備 考
コ ッ フ ェ ル	5	1,000		秀 山 荘	
ナ ベ 大 (32 cm)	2	1,000		昭 和 ア ル ミ*	
中 (26 cm)	2	800		"	
ヤ カ ン 大 (5 l)	2	550		"	
中 (2 l)	2	300		"	
ク ッ キ ン グ ホ イ ー ル	25 cm 10ヶ	100		"	
バ ケ ッ (ポリエチ)	2	800	三 井 化 学*		
ジ ョ ウ ゴ (ポリエチ)	20	10	"		
ボ ト ル (1 l 入り) (2 l 入り)	30	100	"		
布 バ ケ ッ	4	800		大 阪 好 日 山 荘	
ケ ロ シ ン ポ ン プ	5	30			
ブ タ ン ベ ー ナ ー (キャンピングガス)	3			シ ウ ラ ス ポ ー ツ 店	
ブ タ ン ポ ン ベ	50			"	
メ タ	100C/S	300		秀 山 荘	
ケ ロ シ ン (4 l 入り缶)	96缶	4,000		丸 善 石 油*	
マ ッ チ (寸六型)	2,000	20		京 都 兵 庫 燐 工*	
ロ ー ソ ク (50号)	100	200		東 洋 ロ ー ソ ク**	
(30号)	200	300		"	
ブ ロ ン ナ イ ロ ン ポ ン ベ (100c.c.)	250	100		高 木 鉄 工*	
ブ ロ ン ナ イ ロ ン ポ ン ベ 用 ラ ン タ ン	5	1,000		"	好評
ボ ン ベ 充 填 器	8	400		"	
特 製 ベ ー ナ ー	10	1,000		"	

4) 雑 品

バネバカリ (50kg)	2	1,200			
" (20kg)	1	900			
石 け ん 各 種				資 生 堂*	
錠 前 と 鍵	300	50			福井亀之助氏の御好意で1ヶ20円
無 線 機 PRC-6	3	1,600			チョゴリザ残品
" ナショナル T-1	8	600		松 下 電 器 産 業*	T-1型
富士通	3	600		富 士 通 信 機*	F-100p型
乾 電 池 単一	300	200		松 下 電 器 産 業*	耐寒用
単二	40	150		"	"
単三	100	100		"	"
携 帯 用 テ ー プ レ コ ー ダ	1	1,500		"	PQ-114 型
ラ ジ オ 8 石 2 バ ン ド	3	1,000		"	T-67 型
6 石 (ポケッタブル)	5	500		"	T-53 型
双 眼 鏡	2	1,000		千 代 田 光 学	
大 工 道 具	1 式	4,000			
番 号 札	300	10			
文 房 具	1 式	2,000			
布 袋	100	100			有用, アタを入
食 器 カゴ	1	300			れる
ス ポ ー ツ シ ュ ー ズ	10	800		オ ニ ツ カ*	有用
目 覚 時 計	3	500		大 丸	

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 および その 購入先 又は 提供先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又は 先 (*寄贈)	備 考
酸 素 ポ ン ベ	10	3,200			チ ョ ゴ リ ザ 残 品
隊 旗, 国 旗	10	30			医 療 用
発 電 機	1	40,000		日 本 電 機	日 本, パ キ ス タ ン, AACK, バ イ ク エ ン ジ ン 直 結

無線機関係について

平 井 一 正

1. 無 線 機

ヒマラヤ登山に無線機を使用することにより、各キャンプ間の連絡は完全になり、ひいては登頂の成否をも左右し、時に人命を救うこともできる。それだけに無線機の高信頼性、小型軽量、取扱いの簡単さ等が要求されるのである。

近年の主要なヒマラヤ登山隊は殆んど無線機を携行している。その1例を第1表に示した。このうち1956

年のマナスル隊は過去3年の経験から、マナスル氷河に固定通信網を設定し、これと移動局を組み合わせた通信網によって連絡を完全なものとした。地形からわかりだして完全な通信網を設定したのはこの隊がはじめてであるが、これは特殊なケースであり、はじめての山には一般に通用しない方式である。また1954年のデシオに率られるイタリア隊はその豊富な遠征隊費用を無線機の方にも注いだ。すなわち、全世界と交信できる強力な固定局をアスコレに置き、K₂のふもと、それから中間ベースキャンプになる第4キャンプの固定局と連絡をとった。そして隊員相互およびキャンプ間の連絡には出力0.25ワットの移動局 (PRC-6) を使った。これもほぼ完全な通信網を山に設定した例で

各 国 登 山 隊 使 用 主 無 線 機¹⁾

年度	山 名	登山隊国籍	使用機名	周波数	使用最高 高度(m)	重量 (電池共)	登頂 成否	無 線 機 使 用 状 態
1953	エベレスト (8888m)	英	バ イ 社 PTC-122	72	7,320	3kg	成功	おおむね良好, サウスコルから通信不良
"	ナンガパルバット (8125m)	ドイツ・オーストリア合同	テレフォン社 TELEPORT-II	150	6,000*	不明	成功	おおむね良好だが全体で2台しかなかった
"	マナスル (8125m)	日	NEC 社 JSCR-536-F	6	6,500*	2.73		雑音多く不良
"	K ₂ (8611m)	米	レイセオン社 PRC-6	48	7,000*	3		余り使用せず
1954	K ₂ (8611m)	伊	"	48	7,740	3	成功	強力な固定局の使用とともに通信優秀
1955	カンチエンジュンガ (8585m)	英	バ イ 社 PTC-122	71	7,500*	3	"	おおむね良好
"	マカルー (8470m)	仏	レイセオン社 PRC-6	55	7,400	3	"	"
1956	マナスル (8125m)	日	東芝 ZS-1342A を電気通信大学で改造	43.85	7,200	3.5	"	完全なる通信網で優秀, 登頂隊用無線機は不良
"	エベレスト, ローツエ (8501m)	スイス	陸軍 SE-101 型	不明	7,870	不明	"	おおむね良好だがサウスコルからの通信不良
1958	ヒドン・ピーク (8068m)	米	レイセオン社 PRC-6	55	不明	3	"	途中故障しよく使えなかった
"	チョゴリザ (7654m)	日	"	"	6,400	3	"	おおむね良好, 20日間で故障
1960	ヒマルチュリ (7864m)	日	"	"	7,200	3	"	おおむね良好
1962	サルトロ・カンリ (7742m)	日・バ合同	松下電器 T-1型	27.112	7,742	0.6	"	優秀, 登頂隊無線機で登頂報告

(註) 1) 登山隊によっては上に記した無線機1種類だけでなく、他に多くの種類をもっていたものもあるが、ここでは主に移動局をとり、そのよく使用されたものをあげた。

2) *印はキャンプ配置より推定したものである。

あるが、強力な財源がなければ不可能であろう。

一般の場合には市販あるいは特注で製作してもらう無線機を持っていくのが普通である。

山岳地帯では短波帯は混信をうけ易く、またアンテナ利得の小さい事等によりあまり用いられず、もっぱら超短波帯が用いられる。第1表でみてわかるように、大体30ないし70メガサイクルが一番使い易いようである。100メガサイクル以上になると見通しの所以外は電波の回折損が多くて通信がむつかしくなる。ナンガルバットに挑んだドイツ・オーストリア隊が、150メガサイクルを使っているのはこの山の特殊性、すなわちベースキャンプから各キャンプがすべて見通せるという点を考慮したものであり、一般の山では使えないと思われる。また1953年、マナスル隊は日本からヒマラヤにはじめての隊で、通信機に関する知識が不足で6メガサイクルを使ったが、これは強力なインド放送に妨害されて殆んど使えなかったという。

いかに優秀な無線機でも、ヒマラヤでは重ければ使えないものにならない。"軽い"というのが必要条件である。各国がよく使っているPRC-6型は電池共約3kgであるが、これはサブミニチュア管使用で出力0.25ワット、重量の大半を電池で占めている。3kgというのは、信頼度のある、電池管使用の無線機としては最低限であろうと思われる。しかしトランジスタの発達によって重量の点は解決された。心配された温度特性も、無線機本体を適当な保温材でおおうとかしてその取扱いに注意さえすれば、ある程度心配がないことがわかり、さらに周波数特性のよいトランジスタが開発されて、ここにトランジスタ無線機がヒマラヤに登場してくるのである。

1962年の京大サルトロ・カンリ隊が、ヒマラヤで本格的にトランジスタ無線機を使用し、通信に成功したのはじめての隊であろうと思われる。従来ものものに比して約1/5の重量は殆んど重さを感じさせない。無線機はまるでカンバンをもつような気楽さで持てるようになる。世界ではじめて、ヒマラヤの頂上から無線機で登頂を報らせたという快挙は、どうしてもこの"気楽さ"がなければならなかった。従来無線機概念からでは到底考えられないところである。

今回持参したのは次の3種類であった。

ナショナルトランシーバー T-1型
(27.112MC) 8台(4対)
富士通信機トランシーバー F-100p型
(27.040MC) 3台
PRC-6 (55MC) 3台
(トランシーバーとは Transmitter と Receiver をくみ合わせたもの)

富士通のトランシーバーはナショナルに比して性能は劣ったが、キャラバン中に使用した。PRC-6は

ABC から C₂ までナショナル T-1 型と併せ使用したが、出力が大きい割には T-1 型と同程度の感度しかなく、C₂ より上ではすべて T-1 型を使用した。

ナショナル T-1 型の最大到達距離

ABC(5000)—C₁(5,200)

直線距離 約 6k m

感度やや不明瞭

(頂上(7742)—C₂(5500) 間は直線距離にすると約 5 km あるが感度明瞭であった。)

2. ラジオ, テープレコーダ

ラジオはパキスタン要人に対する贈物用と、実際山でニュースをキャッチするための2種類もっていった。前者はナショナル T-53 型 6 石のトランジスタラジオ、後者はナショナル T-67 型 8 石 2 バンドのオールウェーブラジオである。

T-67 型の感度はよく、日本の短波放送もキャッチできたし、またラジオパキスタンが報ずるサルトロ隊向けの天気予報は感度明瞭でよく聞くことができた。

つぎにテープレコーダは松下電器製 PQ-114 型を使用し、現住民の民謡、言語の採取等に大いに役立ったが、サンドストームのために往路半ばにしてモータ部分に故障を生じたことはその取扱いが不充分であったことによるだけに一層悔やまれる。

以上簡単なが、無線機、ラジオ、テープレコーダについて記した。提供をうけた松下電器産業 K. K., 富士通信機 K. K. にお礼申しあげる。

食糧について

齊 藤 惇 生

AACK の遠征が度を重ねる毎に食糧も改善されて来た。ことが食物となると文句や苦情も極めて直接的である。いつも各食糧担当者の血と涙の歴史が綴られる。

エクスペディションはその国の産業の発達におうところが非常に大きい。ここ数年の日本の食糧産業の発達は著しい。特に時流に乗った、いわゆるインスタント食品の数多い出現は驚くほどである。

今度の食糧は、これまでの経験に基づき、今までに失敗した点を改め、そして食糧産業の発達を積極的にとり入れ、更に二、三の栄養学的な新しい試みを行なってみた。

食糧計画の基本は、これまでの遠征と若干異っていた。ピラフォンド・ラ越えの長大な輸送があり、それ

に応じた柔軟な食糧計画を必要とした。そのために

- ① 低地食
 - i) スカルド〜ゴマ間
 - ii) ゴマ〜B.C間(峠越えを含む)
- ② 高地食
 - i) ベース・キャンプ食
 - ii) 高地食(攻撃食を含む)
 - iii) 予備食

の5つに分けた。

パキスタン側は彼等が独自の用意をするということになっていたので、殆んど考えなかった。ハイポーターに対してはキャラバン中のために、砂糖、ミルク(粉)、紅茶、高地のためにはその他、アルファ米、乾パン、ジャム、バター、餡、肉類(羊のベーコン)を準備した。クーリーにはゴマより上で支給する砂糖、ミルク、茶、を準備した。これ等の他にポーター、クーリーに与えるようにパキスタン政府により規定されている、ダル(豆)、ギー(油脂)、インド米、岩塩、唐辛子、タバコ、マッチはラワルピンディで購入して空輸した。これはスカルドの F. S. D. (軍食糧供給所)で購入出来るかはっきりしなかったことと、スカルドの物価はピンディの数倍することが分っていたからである。アタ(小麦粉)は、サリンとゴマで買入れた。なお F. S. D. では良質のアタを 100 kg、乾燥玉葱若干買った。

結局日本より持参した食糧の総計は酒、タバコを含めて約 1.5 トン、ゴマ出発の時の食糧重量(遠征中最大)は約 3.3 トン、A. B. C. に集積した量は約 1.1 トンとなった

1) スカルド〜ゴマ間の食糧

この間は現地食を主体にした。三食ともチャパティのことが多い。チョゴリザと違って幸い良質のアタが村々で手に入った。焼いたチャパティも油で揚げたプラタも美味しかった。ただゴマで買った(実際はガガルから)のはフスマが多く質はうんと落ちた。おかしは卵、鶏、羊の料理が多い。肉は固いが、まあまあ食える。山羊乳、粗製ヨーグルトのラシーなど、よくピースの空缶と交換して飲んだ。

往きは果物はなく干杏だけ、野菜も少ない。加藤さんの指導で、菜の花を摘んで一夜漬にしたり、大根の間引菜、野生の葱を漬物にして食べた。これは好評で保存もきき、A. B. C. まで持って行って食べた。その他タンポポの根、行者葱、葱坊主など野生のもの、いろいろな食べ方を教えて貰った。こういったことは若い吾々には、殆んど欠けていることだ。今後大いに学び実行す可きことだろう。スカルドで、加藤さんの釣った魚は干して持って行った。

現地食の是非は随分論じられてきた。今度の現地食では、多分反対意見は出ないと思う。割合良質のものが手に入り、手に入りにくいと考えられるものは準備をし(良質のアタ、ギーなど)、それに、コックのタキが熱心で上手だったからである。

ただ、どうしても往きは経費節約の点から、卵や肉類を充分に買わない傾向がある。高度も低く、身体の調子も良い時に出来るだけ栄養を摂っておいたがよい。山に入ってから体力に大に関係するからである。キャラバン中に消耗することぐらい馬鹿なことではない。金額もしれている。キャラバン中はうんと御馳走を!! これは私の得た平凡な結論の一つだ。

とるに足らぬことだが、現地食にも欠点がある。日頃慣れてないものを食べるために、腸内細菌が適応せず、放屁が多くなる。これが実に臭い。パキスタン人が殆んどやらないのは不思議なぐらいだった。

2) ゴマ〜B. C. 間

ゴマからピラフォンド下の B. C. まで部落がないためにクーリーの食糧は与えねばならないと考えていた。ところがこの3日間の行程はクーリーの自分持ちということになり、食糧、経費の面で大助かりだった。クーリー用に用意した、ミルク、茶、砂糖はサブとポーターに廻した。実際これらの飲料の消費は物凄い。サブ、ポーターも B. C. までは現地食でまかされた。

ついでにクーリーの食事を述べてみたい。アタを薄焼のチャパティ、厚焼のノン、又ギーを混ぜて炊いたり、水と塩で煮て固いのりのようにしたりして食べる。また麦こがしを水で練ってツアンパ風にして食べているものもいた。ギーを持っている者は上等の方だ。部落にいれば山羊乳や、ラシーというヨーグルトを飲む。羊や鶏、卵を食べるのは時々らしい。時にはチベット風のバター茶を飲むものもいた。ピラフォンド・ラ越えでは、規定どおりのアタ、ダル、ギー、ミルク、砂糖、茶、タバコを配給した。ダルはギーを混ぜて煮る。時にはアタで、バラエというスイトンを作る。米はギーと塩と唐辛子を混ぜて炊く。日本米でも結構美味そうに食べる。朝飯は普通ミルク・ティー一杯のようだ。干杏はたいてい持っている。果肉を食べ、殻を割って種を食べる。これは貴重なビタミン源になっていると思う。実際診察していて、はっきりとした VB₁, VB₂, VC, 不足の患者には出合わなかった。アタにフスマが多いのもかえって良いことだ。しかし全体的に驚くほど粗食でそして強く、耐寒性も充分だ。栄養学的に詳しく調べたら面白い結果が出そうな気がする。

3) B. C. 食, 高地食, 予備食

隊員用として、B. C. 食、高地食を各 300 人日準備した。15 人日分が完全レーションになって1ケのカートン・ボックスに入っている。1カートンは約 15.5kg である。完全レーションの他に B. C. 食には4カートン、高地食には4つのワイヤーバンド・ボックス(各 30 kg)のサプリメント・ボックスを用意した。この中には、嗜好品、調味料、その他割一的なレーション

に変化とうるおいを与える食品が入っている。B. C. 食を多くしたのは、峠越えの作戦の変化、偵察隊の行動、サルトロ終了後の他所への行動に伴って、直ぐ応じられるようにしたためである。これは内容により二系列に分けてある。

予備食は5カートン・ボックスで、米、ミルク、茶、調味料などが主で、最低生きのびられる線で、アレンジしてある。

B. C. よりピラフォンド・ラ、A. B. C. の間は、トラヴェル食を10カートン用意した。B. C. 食はA. B. C. より上で使用した。

これ等の行動食では次のような点に特徴があった。

i) 出来るだけ無理せず、スムーズに栄養を摂取出来る。

ii) インスタント食品の良い面を活用して、早い調理、美味しい食事が作れる。

iii) 今までのヒマラヤの食糧の既成概念を破って、油類を積極的に使用した。

iv) 蛋白質の食品が多い。

v) 日本の食品も多く用意した。

高所における水分摂取の必要はいうまでもない。紅茶、ミルク、ジュース、ココア、コーヒの需要は驚くほどである。これ等は、量も種類も相当用意したが、まだ不足した。水分摂取と一緒に栄養もとれたら、一番よい。勿論砂糖は1人1日1/4ポンドも準備したが、これも十二分といいにくい。だがカロリー源として砂糖だけを使うと甘味のために限界がある。既にマナスル隊で使われているが、今度はブドウ糖も併用した。最近、良質のくせのないものが出来ている。甘味が少ないので大量に使える。吸収も早く、エネルギー源として最適である。ミルクは完全栄養品だから、どしどし使う可きだ。1人1日30gでは不足した。

インスタント食品としては、アルファー米、寿司米、お茶漬ライス、松茸ライス、ラーメン、マッシュ・ポテト、スープの素(コンソメ、ポタージュ、中華スープ)、凍結乾燥の肉、卵、ホーレン草、葱を使った。アルファー米は味付してないのが飽きがこないでよい。傑作は凍結乾燥食品である。氷結させて真空装置の中で水分を氷のまま昇華させたものである。お湯につけると1~5分で完全に元にかえる。栄養も損われていない。真のインスタント食品といえるものである。肉には生肉、煮た肉、味つけしたそぼろ肉、があった。肉井、卵井、ベーコン・エッグ、卵焼、ミルク・エッグ等楽しめた。ホーレン草のおしたしも美味しい。葱はその香りが実に新鮮な感じだった。7000mでも生肉の料理、生野菜が食えるのである。マッシュポテトもそのまま食べたり、スープに入れたりして、重宝した。

油脂類は今までカロリー源としての有利性は認めら

れていた。しかしその害の方が強調されることが多かった。ヒマラヤでは特にその燃焼に酸素を沢山要するので、不利ということになっている。だが最近の脂質の生化学的研究が発展するにつれて、不可欠脂酸(必須脂酸、E. F. A.)の持ついろいろな特殊的意義が解明された。生体諸組織の酸素欠乏に対する抵抗性を保持する。心臓の筋肉はE. F. A.を多量に消費する。心筋活動のエネルギー源として大きな意義がある。毛細血管の透過性を正常に保つ、寒冷ストレスに対し抵抗性をます、動脈硬化を防ぐ等である。E. F. A.を摂るには、それを多量に含んだ油を出来るだけ生で食べたがよい。今度はサフラワーという植物の種からとったサラダ油を使用した。野菜にかけたり、チャパティにつけたり、スープに入れたり、キャラバンから高所キャンプまで常時使用した。味も良く、スムーズに摂取出来る。

蛋白質としては、ミルク、凍結乾燥の肉、卵の他にサラミ、コンビーフ、羊のベーコン(豚はパキスタンでは工合が悪い)を用意した。チョゴリザの時のように腐敗せず、好評だった。

高所食の1カートンの1例と最高キャンプのC₂に持っていった内容は次のようである。

高所キャンプ食 (種類)	(15人日) (単位量)	数
乾燥米(α米)	180g	15
松茸 ランチ	100g	5
鯛 茶 漬 飯	70g	8
五 目 寿 司	540g	1
ラ ー メ ン	140g	9
乾 パ ン	120g	12
バ タ ー	225g	1
ジ ャ ム	150g	1
コ ン ビ ー フ	80g	1
サラミソーセージ	200g	1
乾燥果物(リンゴ)	200g	2
〃 野菜(熱乾)	40g	4
砂 糖	450g	4
ブ ド ウ 糖	500g	1
粉 ミ ル ク	450g	1
食 塩	150g	1
味 ノ 素	40g	1
佃 煮 類	100g	1
餡	100g	1
コ コ ア	75g	1
ジュースの素	110g	1
ヨ ー カ ン	90g	1
ピ ー ナ ッ	60g	1
スープの素(コンソメ)	50g	1
(中 華)	5g	9

(ポタージュ)	60g	1
(中華風)	25g	1
粉 味 噌	20g	1
オイル、ツナ缶	200g	1
マヨネーズ	100g	1
しいたけ	25g	1
兵 糧 丸	240g	1
マ ッ チ	若干	

最高キャンプに用意した食品(8人日)

(種類)	(単位量)	数
乾 パ ン	120g	6
砂 糖	450g	2
マッシュ・ポテト	120g	1
ア ラ レ	100g	1
ウエファース	30g	5
干 リ ン ゴ	80g	1
トマト・スープ	60g	2
中華風スープ	25g	1
コ ン ソ メ	5g	14
味 塩	100g	1
味ノ素プラス	50g	1
乾 燥 米	160g	5
アルファー化餅	150g	1
凍結乾燥肉	200g	1
〃 葱	20g	1
〃 ホーレン草	40g	1
カタクリ粉	80g	1
餡	80g	4
羊 カ ン	90g	1
ティー・バック	3g	30
油漬 アサリ缶	120g	2
マヨネーズ	100g	1
粉 ミ ル ク	450g	1
兵 糧 丸	240g	2
コ ン ビ ー フ	80g	1
サラダ・オイル	250g	1
ブ ド ウ 糖	200g	1
葉 唐 辛 子	30g	1
乾 燥 卵	350g	1

隊員の食欲は極めて良好であった。ピラフォンド・ラ越えによる高度順化がよかったせいもあるだろう。ピラフォンド・ラ越えのころは米の規定量の180gは多いような感じがしたが、だんだん、不足するようになっていった。

あったほうがよかったという食品に、チョコレート、干ブドウがあげられる。老年組からは朝はオートミルのような柔らかいものが欲しいという声が出た。鶏や羊を生きたまま連れて行くという案は、ピラフォンド・ラ越えて不可能だった。しかし、割合便の往

復があり、殺したものが時々A. B. C. やC₂に届いて食卓がうるおった。

胃腸病の発生は少く、軽度の胃障害、腸内異常発酵が見られたぐらいだった。ただ、A. B. C. に来た杏とリンゴを食べた時、殆ど全員が数回の下痢に悩まされた。熟しすぎたり、日数のたった杏は、病原菌が附着繁殖しているようだ。

ジョイントという点から、パキスタン・メンバーの事も述べてみたい。パキスタン人は一般に食物に関し極めて保守的である。豚肉は勿論食べないし、酒は飲まぬ。新しい食物に余り興味を示さないし、食べようとか、慣れようとかしかない。ベグ教授、バシール大尉はその代表だ。チャパティ、プラタ、鶏のカレー煮、ミルク紅茶、羊肉の米料理を喜ぶ。ミルク紅茶も粉ミルク入りは嫌う。純粋のバルチスタン料理のバラエも好まない。パキスタン側の持って来た食品をA. B. C. で見た。アタ、紅茶、ブラウン・シュガー、エパ・ミルク、ダル、フライしたダル、麦を炊って砂糖でまぶしたもの、干ぶどう、殻つきのままのアーモンド、紫色した生玉葱、植物性のギー、岩塩、ニンニク、唐辛子、その他香辛料が約7種類、オートミル、コーン・フレイク、甘味ビスケット、インド種米、これだけだった。パキスタンの上流の食生活は、朝は英国風で、昼、夜はパキスタン風のようなのだ。

ラヂャ・バシール(R. Bashir)だけは他のパキスタンメンバーと非常に違っていた。ウイスキーも飲む。高所では燃料を食うからチャパティは不適當だという。我々の食事を積極的に食べる。のり、梅干、塩こぶまで食べた。魚類は慣れていない。スープは洋風の方が好きだ。しかし、彼はかなり努力していたに違いない。オートミルを出してやった時に、抱きかかえて喜んできた。そんなだったら、もっと用意しておいてやったらよかったと思った。連絡がうまくいかなかったのだから仕方がない。

最後にコックのことを述べたい。今度のコックは実に拾いものだった。スカルド近くの間で、タキという名である。ビアフォ(Biafo)の探検隊に入って越冬した経験がある。スカルドで庖丁を2本も、羊の骨を切ってボロボロにしてしまった。これは、えらい奴をやとった、チョゴリザの二の舞かとあきらめていた。

ところがこれがなかなかの腕達者で、また仕事に熱心だったのである。アシスタントのハツサンも働き者だった。キャラバン中は朝のお茶、昼はパーティに先行して、火を作り、お茶を湧かし、卵をゆでて待っている。料理は、唐辛子のいれ過ぎさえ注意すれば、美味しいものを作る。新しい食品も、使いこなす頭を持っている。それに彼はコックの仕事に誇りを持っていた。自分の仕事にはポーターも寄せつけない。荷物もサブザックだけしかつかない。火の側に荷物をおく

クーリーをぶんなぐったりまでした。彼の食糧管理はまた完璧で、サーブ用のものを、ポーターにやったりは絶体しない。彼の腕前が本当に分ったのは、帰りのキャラバンだった。アイスクリームを作ったり、お菓子をやいたり、ロースト、チキンを仕上げたりで、これならもっと前からいろいろやらせておいたらよかったですとみな口惜しがった。ただアイスクリームは寒い夜に二晩もつづけて作ったので、評判は悪かった。最後の分配品は彼が一番多かった。炊事道具は殆んど独占したからだ。しかし、彼の作った御馳走を思い出してみな黙認していた。

スカルド——ゴマ間 サーブ用

(ワイヤーバンドボックス 2箱) (計60kg)
ポリ=ポリエチレン ハイ=ハイゼックス

品 目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾 燥 米	16	ハイゼックス	180	180
バ タ ー	6	缶	225	300
チ ー ズ	10	アルミ・箱	170	205
ジ ャ ム	3	缶	375	450
マーマレード	3	缶	375	450
オイル・ツナ	6	缶	200	280
マヨネーズ	2	ポリ 瓶	200	220
スープの素 (キューブ)	16	ハ イ	43	4.3
〃 (中華)	30	ハ イ	10	10
〃(ポタージュ)	6	紙 パック	60	65
角 砂 糖	19	ハ イ	450	470
粉 ミ ル ク	6	缶	450	600
紅 茶	3	缶	450	630
コ ー ヒ (インスタント)	2	ガラス 瓶	57	220
コ コ ア	16	紙 パック	75	85
緑 茶	1	缶	400	580
抹 茶	1	缶	40	100
レ モ ン ・ パウダー	1	ポリ 瓶	200	340
粉 末 ジュース	10	セロ・パック	100	110
コ ブ 茶	1	缶	50	120
ヨウカン(塩味)	2	アルミ・パック	650	700
〃 (甘)	1	アルミ・パック	300	340
ア ラ レ	1	ポリ袋(缶)	2,000	2,000
味 の 素	1	ガラス 瓶	100	250
〃	4	ポリ 袋	40	45
胡 シ ョ ウ	2	缶	30	80
山 シ ョ ウ 粉	2	缶	30	80
唐 辛 子 (一味)	1	缶	30	80
〃 (七味)	1	缶	30	80
辛 子 粉	1	缶	30	80
カ レ ー 粉	3	缶	30・60	80
ガ ー リ ッ ク 粉	1	ポリ 瓶	125	150

塩	5	ハイ・パック	150	150
味 塩	11	ポリ・パック	100	105
シ ョ ウ 油	1	ポリ 瓶	350	400
酢	1	ポリ 瓶	250	270
リ ノ ール 油	8	ポリ 瓶	1,100	1,200
八 丁 味 噌	1	ハイ・パック	200	200
梅 肉	1	曲 物	155	175
焼 海 苔	1	缶	100	210
紅 生 姜	1	ポリ 瓶	120	140
ス ル メ	3	ハイ・パック	200	205
佃 煮	4	ハイ・パック	100	105
ド ロ ッ プ	46	セロ 袋	135	145
乾 燥 野 菜	36	ハイ・パック	25	30
フ ク ラ シ 粉	1	缶	450	550
片 栗 粉	1	ハイ・パック	100	110
ベ ニ ー ポ ッ テ	2	セ ロ	120	130
ソ フ ナ ー	2	缶	300	400
ト ロ コ プ	2	ハイ・パック	100	105
理 研 スパイスセット	1	瓶 ・ 箱	180	780
干 鰯	1	ハイ・パック	150	160
カ レ イ	1	ハイ・パック	110	120
ワ カ メ	2	セロ・パック	20	25
う に	1	曲 物	150	175

その他、緊急時のために各自以下の内容のものを携帯。(各品1ヶ宛)

サ ラ ミ	15		100	
ソ ー セ ー ジ				100
兵 糧 丸	15		240	
コ ン デ ン ス ク	15		130	
ミ ル				150
羊 かん	15		150	

ゴマ——A. B. C. 間

(S. Box×1ヶ+150人日(15人日×10 Boxes))

S. Box は supplementary Box
○印は S. B. に入れたもの。

品 目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾 燥 米	120	ハ イ ・ 袋	180	180
鯛 飯	80	ポリ 〃	70	80
松 タ ケ 飯	50	紙 〃	100	110
ラ ー メ ン	90	ハ イ ・ パ ッ ク	140	150
乾 パ ン	150	〃	120	125
バ タ ー	15	缶	225	300
チ ー ズ	10	アルミ紙箱	170	205
ジ ャ ム	5	缶	375	450
マ マ レ ード	5	缶	375	450
オ イ ル ・ ツ ナ	10	缶	200	280
マ ヨ ネ ーズ (小)	10	ポリ 瓶	100	120
ス ー プ の 素 (キューブ)	20	ハ イ ・ パ ッ ク	50	50

〃 (中華)	90	ハイ・パック	5	5
〃(ポタージュ)	10	紙 パック	60	70
砂 糖	30	ハイ・パック	450	450
粉 ミ ル ク	10	缶	450	600
ジュースの素	10	セロ・パック	110	110
ア ラ レ	20	ポリ 袋	100	100
塩	10	ハイ・パック	150	150
リ ノ ール 油	5	ポリ 瓶	200	220
佃 煮	10	ハイ・パック	100	100
ド ロ ッ プ	50	セロ 袋	135	140
乾 燥 野 菜	30	ハイ・パック	40	40
〇カタクリ粉	2	〃	200	210
〇ベニーポッテ	4	セロ 袋	120	130
〇ソフナー	1	缶	300	400
〇トロコロブ	2	ハイ・パック	30	30
〇ガーリック類	2	ポリ 瓶	30	50
〇わかめ	2	セロ・パック	10	10
〇うに	1	曲 物	150	175
〇コンビーフ	20	ポリ 袋	80	85
〇むきえび	2	ハイ・パック	200	200
〇塩ざけ	1	〃	500	500
〇紅茶	4	缶	450	640
〇インスタント コーヒ	3	ガラス 瓶	57	230
〇インスタント ココ	18	紙	75	90
〇緑茶	2	ポリ 瓶	30	50
〇抹茶	1	缶	30	50
〇レモン パウダー	2	ポリ 瓶	30	50
〇コブ茶	1	缶	50	100
〇羊かん(塩)	1	アル ミ	650	700
〇羊かん (スルガヤ)	1	〃	300	340
〇強味の素(瓶)	2	ブ ラ 瓶		
〃 (袋)	10	ポリ リ	40	40
〇コショウ	2	ポリ 瓶	30	50
〇山ショウ粉	2	〃	30	50
〇七味	2	〃	30	50
〇カレー粉	2	〃	30	50
〇ガーリックP	2	〃	30	50
味 塩	10	ポリ リ	100	105
〇シ ョ ウ 油	2	ポリ 瓶	350	400
〇酢	2	〃	350	400
〇八丁味噌	1	ポリ リ	200	200
〇梅肉	1	曲 物	155	175
〇ヤキノリ	1	缶	100	210
〇ソンの粉	3	ポリ 瓶	30	50
〇かれい	1	ハ イ	110	120
〇ひだら	1	〃	150	160
〇マルボシ	1	〃	130	130
サ ラ ミ	10	ポリ リ	200	200
〇チ ュ ウ イ ン ム	30		20	20

〇葉唐カンヅメ	3	缶	170	220
〇す る め	1	ハ イ	200	205
〇乾燥リンゴ	5	〃	200	200
あざりくんせい	10	缶	105	170
ふくしんづけ	1	〃	450	560

B. C. 食

15人日×20ボックス(カートン)=300人日
サブリメンタリー 4カートン・ボックス

品 目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾 燥 米	240		180	180
松 タ ケ 飯	100		100	100
タ イ 飯	180		70	70
五 目 ず し	20		540	540
ラ ー メ ン	180		140	140
カ ン パ ン	168		120	120
ス バ ゲ テ ィ	60		250	250
粉 も ち	30		140	140
バ タ ー	40		225	300
チ ー ズ	20		170	200
ジ ャ ム	20		150	170
マ マ レ ード	20		150	170
コ ン ビ ー フ	20		80	85
乾 燥 野 菜	80		40	40
乾 燥 果 物	40		200	200
砂 糖	80		450	450
塩	20		150	150
味 塩	20		100	110
強 力 味 の 素	4		25	50
味 の 素 (青袋)	20		40	40
ド ロ ッ プ	100		100	100
ジュースの素	20		110	110
コ ン ソ メ	40		50	50
コ ン ソ メ (中華)	108		5	5
ポ タ ー ジ ュ	40		60	70
梅 肉	3		120	200
コ ナ 味 噌	8		20	20
ト リ オ	4		20	20
鯨 肉	20		200	250
ビ ー フ ン	10		120	120
オ ー ト ミ ール	3		450	600
う ど ん	3		150	150
そ ば	12		150	150
サ ラ ダ 油	6	ポリ 瓶	1000	1100
オ イ ル ツ ナ	16	缶	200	280
ア サ リ ク ン セ イ	8	〃	105	170
マ ヨ ネ ーズ	20	ポリ 瓶	100	120
サ ラ ミ	2	ポリ リ	200	200
ニ シ ン ウ マ ニ	8	ハ イ	100	100
カ ニ	4	缶	220	310

サケ	缶	4	缶	220	300
ハチミツ	4	ボ	リ	300	350
ブドウ糖	10	ハ	イ	500	500
ミザンショ	1	ボ	リ	120	150
楽梅	4	ハ	イ	120	150
紅ショウガ	4	ハ	イ	120	150
ムキエビ	4	ハ	イ	200	200
干だら	4	ハ	イ	80	80
マルボシ	4	ハ	イ	130	130
シイタケ	8	ハ	イ	25	25
ワカメ	2	セ	ロ	10	10
紅茶	5	缶		450	610
緑茶	1	ボ	リ	40	65
ココア	12	缶		75	90
コーヒー	4	ガラス	瓶	57	230
コブ茶	1	缶		50	100
レモネード	4	ボ	リ	30	50
コショウ	4	ハ	イ	30	50
カレー粉	4	ハ	イ	30	50
七味	4	ハ	イ	30	50
ガーリック	2	ハ	イ	30	50
パウダー	2	ハ	イ	30	50
羊カン	2	アル	ミ	300	340
クルミ	5	ハ	イ	200	200
サケクンセイ	4	ハ	イ	150	150
福神漬	1	缶		450	560
ヤキノリ	2	ハ	イ	100	270
ショウ油	8	ボ	リ	180	350
酢	4	ハ	イ	140	150
カタクリ粉	2	ハ	イ	200	200
ペニーポッテ	8	セ	ロ	120	130
茶漬の素	4	ハ	イ	50	50
ふりかけわかめ	2	缶		80	150
佃煮(はまぐり)	1	ハ	イ	1,000	1,050
カレー	8	ハ	イ	130	130
フグ	4	ハ	イ	100	100
ホットケーキの素	2	ボ	リ	450	450
八丁ミソ	2	ハ	イ	200	200
ゴマ	4	ハ	イ	80	80
サンショ	1	ボ	リ	120	140
セロリー	4	ハ	イ	30	50
V.C原末	1	ハ	イ	200	220
カンピョウ	4	ハ	イ	20	20
アラレ	1	缶		2,000	2,800
ゼラアイス	4	ボ	リ	100	100
ネオシロゲン	5	缶		5	20
ポリテイス	2	紙		90	90
ワサビ粉	1	缶		30	50
粉ミルク	20	ハ	イ	400	600
粉ミルク	8	ハ	イ	450	600
うめぼし	1	ボ	リ	470	510
らっきょう	1	ハ	イ	560	600

・麩	3	ボ	リ	30	30
・花かつお	2	セ	ロ	50	50
・こぶ葉子	2	ボ	リ	200	230
・黒豆	1	ハ	イ	500	500
・うに	4	曲	物	150	175
・オイルツナ	6	缶		200	280
・はちみつ	1	ボ	リ	300	300
・からし	1	缶		30	70
・こしょう	2	ボ	リ	30	50
・唐がらし	2	ハ	イ	30	50
・カレー粉	1	ハ	イ	30	50
・ホーレン草粉	1	ハ	イ	30	50
・いんげん豆	1	ハ	イ	300	300
・にんべん	1	ハ	イ	1,000	1,100
マッチ	20	缶			
・チュウインガム	60	紙		20	20
・ココア	1	缶		450	610
・ヴァンホーテン					

高地キャンプ食

サブプリメンタリーを4ワイヤバンドボックス
15人日×20Boxes=300人日
(カートン)

○はサブプリメンタリー用
HはC₄以上用
Aはアタック用

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
αライス	225	ハ イ 袋	180	180
Hαライス	75	ハ イ 袋	160	160
マツタケ飯	100	ボ リ 袋	100	100
鯛飯	160	紙 袋	70	70
五目寿司	20	ハ イ 袋	540	540
ラーメン	180	ハイ・パック	140	140
乾パン	240	ハ イ 袋	120	120
バター	40	缶	225	300
ジャム	20	ボ リ 瓶	150	170
ママレード	20	ボ リ 瓶	80	85
コンビーフ	20	ボ リ 瓶	80	85
ソーラージ	20	ハ イ 袋	200	200
乾燥果物	40	ハ イ 袋	200	200
乾燥野菜	80	ハ イ 袋	40	40
砂糖	80	ハ イ 袋	450	450
ブドウ糖	20	ボ リ 瓶	500	500
粉ミルク	20	缶	450	600
塩	20	ボ リ 瓶	150	150
味の素(青袋)	20	ハ イ 袋	40	40
佃煮類	20	ハ イ 袋	100	100
ココア袋	20	紙	75	90
ドロップ	100	セ ロ	100	100
(栄太楼)				

ジュースの素	20	セ	ロ	110	100
ヨーカン(小)	20	アル	ミ	90	105
ビーナツ	20	ボ	リ	60	60
スープの素 (コンソメ)	40	ハ	イ	50	50
"(中華)	180	ハ	イ	5	5
"(ポタージュ)	120	紙		60	70
H"リプトン	25	ハ	イ	50	60
"丸は中華	620	ハ	イ	25	50
粉味噌	20	ハ	イ	20	20
オイルツナ	20	缶		200	280
サラダ油	4	ボ	リ	1,100	1,150
チーズ	15	紙		170	200
マヨネーズ	20	ボ	リ	100	120
ニシンの甘煮	5	ハ	イ	100	100
カニ缶	5	缶		220	310
サケ缶	5	缶		220	300
蜂蜜	5	ボ	リ	300	350
アジシオ	20	ハ	イ	100	110
強力味の素	5	ボ	リ	25	50
ムキエビ	5	ハ	イ	200	200
干鰯	5	ハ	イ	80	80
丸干	5	ハ	イ	130	130
焼きフグ	4	ハ	イ	100	100
シイタケ	20	ハ	イ	25	25
ワカメ	2	ハ	イ	10	10
紅茶(缶)	5	缶		450	640
H"ティーバッグ	200	ボ	リ	3	3
緑茶	5	ボ	リ	40	65
コーヒー	5	ガラス	瓶	57	230
こぶ茶	1	缶		50	100
レモンP	6	ボ	リ	30	50
コショウ	5	ハ	イ	30	50
カレー粉	5	ハ	イ	30	50
七味唐辛子	5	ハ	イ	30	50
ガーリックP	5	ハ	イ	30	50
サケくん製	5	ハ	イ	150	150
福神漬	4	缶		450	560
焼海苔	2	缶		100	270
シヨーユ	5	ボ	リ	140	160
酢	5	ハ	イ	140	160
片栗粉	2	ハ	イ	200	210
ペニーポッテ	10	セ	ロ	120	150
お茶漬の素	5	ハ	イ	50	50
兵糧丸	20	ハ	イ	240	200
Aウエハース	5	ハ	イ	30	30
梅肉	4	曲	物	120	200
ふりかけワカメ	3	缶		80	150
紅生姜	4	ボ	リ	120	150
らっきょう	1	ハ	イ	120	150
とろろこんぶ	5	ボ	リ	30	30
トリオ	5	ハ	イ	10	10
クルミ	1	ハ	イ	250	250

・梅干	1	ボ	リ	120	150
・味山椒	1	ハ	イ	120	150
マッチ	20	ハ	イ	200	380
・ケチャップ	2	ガラス	瓶	105	170
Aアサリくん製	2	缶		200	250
・レモンパウダー	1	ボ	リ	100	100
・アラレ	30	ボ	リ	2,200	3,300
・生牛肉	2	缶		2,900	4,000
・凍結乾燥	1	缶		4,900	6,000
・蒸牛肉	1	缶		4,200	5,300
・卵	1	缶		1,000	2,000
・そばろ肉	1	缶		1,000	2,000
・ほうれん草	1	缶		1,100	1,100
・ねぎ	1	缶		200	250
・大豆(炒)	16	缶		235	285
・ミート・ソース	5	缶		100	100
・ユデアズキ	5	缶		500	600
・ちりめんじゃこ	5	ボ	リ	200	230
・だし(素)	1	缶		50	50
ニンベン	6	缶		50	50
・こぶ葉子	4	缶		50	50
・湯葉	3	缶		50	50
・花かつお					

予備食
(4カートン)

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾パン	12		180	180
ミルク	12		450	600
バター	8		225	300
砂糖	12		500	500
スシ米(五目)	12		540	540
松たけ飯	40		100	100
鯛飯	32		70	70
スープ	16		50	50
"(ポタージュ)	8		60	70
紅茶	4		450	610
味塩	4		100	110
マッチ	8		100	120
マヨネーズ	4		150	170
ジャム	4		200	200
ソーラミヂ	4		40	40
乾燥野菜	8		250	250
塩	4		5	20
ネオシロゲン	4		250	250
スパゲティ	4			

ポーター食

24人日×4カートン=336人日

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾パン	336	ハ イ	120	130
ジャム	28	缶	375	450
マレード	14			
砂糖	84	ハ イ	450	470
粉ミルク	14	缶	450	600
コンビーフ	42	ボ リ	80	85
ドロップ	84	セ ロ	135	140
紅茶	7	缶	450	610
乾米	336	ハ イ	180	180
バター	42	缶	225	300
塩	14		150	150

ガガル—B.C. 間

砂糖	16	ハ イ	450	600
紅茶	21	缶	450	630
ミルク	2	リ	450	600
乾パン	32	ハ イ	120	120
ジャム	12	缶	375	450
塩	4	ハ イ	150	150
スキムミルク	4	紙	120	140

クーリー用 (ゴマ~B.C. 間)

2Boxes 270人日×3日=810人日

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
砂糖	30	ボ リ	500	500
紅茶	11	缶	450	630
スキムミルク	20	紙 箱	200	240

(実際は食糧は支給せず、一箱は盗難(?)一箱は) 隊員用として消費した。

クーリー用 (B.C.—A.B.C. 間)

4Boxes 30人×30日=900人日

砂糖	76	ボ リ	500	500
紅茶	14	缶	450	640
スキムミルク	30	紙 箱	200	240

写真について

上尾庄一郎

今回遠征の写真係として、あるいは後刻参考になるうかと思われる点を、覚え書としてここに付記する。

(A) 写真に関する基本方針

- (1) オフィシャルレポーターには林・平井・高村・上尾がこれに当り、写真に関しては他隊員に優先する事。
- (2) 8mm映画は登攀に入るまでは林、上尾が撮影し、以後は全隊員で撮る事。
- (3) オフィシャルレポーターは全期間を通じて同一種フィルムで撮り、他隊員もなるべくこれにならう事。
- (4) カラーフィルムはネガカラーを主力とするが、オフィシャルレポーター一人分だけカラー・リバーサルを用意する事。
- (5) カメラは原則として各自所有しているカメラをオーパホールして持って行く、ただし会社より貸与されたカメラに関してはオフィシャルレポーターを優先的に使用させる事。
- (6) スカルドにて各隊員に各自全期間を通じ必要と思われるフィルムを分配し、各人の責任において保管せしめ、分配後残るフィルムは、サルトロ・カンリ登頂後他の山へ転進出来る場合にそなえる事。
- (7) 頂上でのカラー撮影はコダクロームでおこなう事。
- (8) 現地での現像はおこなわない事。
- (9) パキスタン側隊員のためには特にカメラ、フィルムとも用意しないこと。
- (10) フィルム、特にカラーフィルムはチョゴリザの時に比べて節約する事。
- (11) 黑白フィルムは Fuji Neopan SS (ASA 100) に統一する事。ただし Neopan SSS (ASA 200) も少量持って行く事。
- (12) フィルターは全カメラに Y₂, UV を隊で用意する事。

(B) 遠征を終っての反省

- a) フィルムの登録、検閲に関して
 - (1) 以後の遠征隊ではフィルムの種類を出来るだけ限定する事。
 - (2) 入国時、登録するフィルム数にサバを読むなら全種類のフィルムについて行なう事。
 - (3) 検閲のため提出するフィルムは撮影者別にせず種類別にする事。

- (4) 出来るだけ現地(相手国内)で現像処理する事。
 - (5) 検閲方法は入国時にくわしく具体的に聞いておく事。
 - b) 撮影結果に関して
 - (1) ネガカラーは紙プリントをする時には黑白、カラー両用出来て便利であるが、スライドを作成した時、発色がカラーリバーサルに比べて相当落ちる事。(コダカラーでも同様)
 - (2) 国産(富士)のカラーリバーサルはコダクロームに比べ決定的な欠点はない事。
 - (3) カメラは出発前にあらかじめ撮影し良好な結果をたしかめてから持って行く事。今回はニコレックス8がピンボケ、露出ムラのため貴重なシーンを失敗した。これは当然の事だが出発前は忙しさにまぎれて等閑にする事が多い。特に注意すること。
 - (4) 高所では撮影者(特に映画の)に労力がかかりすぎるから、出来るだけ多くの隊員で多くの場面の撮影をする必要がある事。
 - (5) 合同遠征隊の場合、相手側から要求がなくてもカメラ、フィルムは相手方の分も用意しておく事。
 - (6) ポラロイドカメラを持って行くと偵察、新聞社への現地報告などのため有効だと思われる事。
- 以上で今回の遠征の写真に関する覚え書を終るが、最後に今回使用したカメラ機材、材量等の一覧表を付しておく。

隊員別写真機材一覧表

隊員名	カメラ	レンズ	その他機材	使用フィルム		備考		
				カラー	数量		黒	白
四手井	キャノン7 オリンパスペン	35mm 50 135	双眼鏡 (キャラバン中)	FCN35	16	FNSS35	8	
加藤	マミヤフレックス35	35 50	双眼鏡			FNSS35	5	
林	ローライフレックス スーパーセミコンタ ゲバズーム8	75 75	双眼鏡 ストロボ 脚	FCN120	19	FNSS120	35	
				KCN120 FC8	8 39			
斎藤	キャノンP オリンパスペンS (頂上用)	50		FCN35	11	FNSS35	6	
平井	キャノンRP オリンパスペンS ミノルタA ₂	50 135 45		FCN35	26	FNSS35	16	ミノルタA ₂ 故障
				KCN35 FCR35	4 1			
谷	ミノルタA ₂	45 75		FCN35	17	FNSS35	21	
				ACN35 FC8	1 1			
高村	キャノンP オリンパスペンS (一部) ニコレックス8	50 135		FCR35	29	FNSS35	11	ニコレックス 8不調
				KCR35 FC8	5 8			
岩坪	オリンパスワイド	35				FNSS35	3	オリンパスワ イド故障
前小屋	オリンパスワイド オリンパスペン (一部)	35				FNSS35	6	
上尾	キャノン7 ビスカワイド16 キャノンズーム8II	35 50 100	三脚	ACN35	36	FNSS35	2	ビスカワイド キャノンズー ム各2台
				FCN35 FC8	1 43	FNSS35 FNSS16 FNSSS8	2 21 1	

FCN35 : Fuji Colour Negative Film 35mm (12EX) FNSS35 : Fuji Neopan SS35mm (36EX)

KCN35 : Kodacolor Film 35mm (20EX) FNSS16 : Fuji Neopan SS16mm (15EX)

ACN35 : Agfa colour Negative Film 35 (12EX) 以下これに従う

遠征隊用フィルム数量一覧表

	フィルム種類	総数(本)	使用数	備考		フィルム種類	総数(本)	使用数	備考
黒 白 フ ィ ル ム	FNSS35	230	101	このうちパキ スタン側26本	カ ラ ー フ ィ ル ム	FCN35	100	72	このうちパキ スタン側1本
	FNSS35	10	2			FCN120	20	19	
	FNSS120	60	48	このうちパキ スタン側13本		F35	30	30	このうちパキ スタン側1本
	FNSS16	50	21			KCN35	10	4	
	FNSS8	3	1			KCN120	10	8	
						KCR120	10	8	
					FC8	100	91		

サルトロ・カンリ遠征雑感

——カミシモをぬいだ話——

1. サルトロ 雑感
2. サルトロコボレ話
3. サルトロの反省
4. サルトロ新兵の言

サルトロ 雑感

—パキスタンの人々—

四手井 綱彦

今度の遠征隊は日パ合同隊であった。ジョイントの相手はカラコラム・クラブ (Karakoram Club) である。パキスタンの登山人口は大きい山があることに逆比例して少ない。登山はマイナースポーツである。最近軍隊が登山やスキーの訓練を始めているそうである。今まで他の国の遠征隊がジョイントをやっている相手は主として軍人である。最近市民の登山団体としてラホール (Lahore) にクライマーズクラブ (Climbers Club) というのがあるが、カラコラム・クラブの連中にいわすと、あれはハイカーのクラブだという。パキスタンでは登山というよりハイキングに類するものが盛んになりつつあるようである。一日に何哩を歩いたとか、何哩の行程を何日で通ったというレコードがスワトー辺りの峠越えの道で行なわれている。

とにかく、カラコラム・クラブはこの国最古の最大のクラブであることに間違いはない。アユブ・カーン大統領が最高のパトロンであり、フンザのミール等もパトロンとして名前をつらねている。副会長が二人おり、一人は K₂ ヘルエゾンとして行ったアタ・ウラ (Ata-Ula) であり、もう一人が今度パキスタン側のリーダーとして参加したベグ (Beg) 教授である。会長は昨年夏行ったときのミーティングでも会えなかったが、西パキスタンの教育長をしている人で、若い時はクリケットの選手だったという。登山家ではないがスポーツの世話をよくやくし、ベグさんにたのまれて会長をやっているといっていた。帰路ラホールでお茶に招かれたが、立派な屋敷で、庭内に果樹が沢山あり水牛の親子がかわれていた。

ベグ教授はペンジャブ (Punjab) 大学のイスラミヤカレッジ (Islamia college) の副学長というような地位にいる物理学の老先生である。イスラミヤカレッジは数あるカレッジの中でも古い有力なカレッジで、彼の教え子はいたるところにおり、なかなかの有名な人である。飛行場のロビー等で、ベグを知っているとい

う人々に度々出会った。帰路訪問した原子力センターでも、所長はじめ所員は殆んど彼のお弟子さんか、孫弟子であった。ラワルピンディで挨拶にいった文部次官も彼の教え子で、登山学校に財政的援助をするといっているが、一寸も具体的に進まないの、よく話しておいてほしいと依頼されたりした。ハンターから山登りに入ったと自分で話してくれたが、小がらであるが仲々達者な老人である。AACK とも古くから接触があり、今西錦司君がはじめてカラコラムに入った時以来で、スワートの藤田隊、松下隊も彼と同行しており、チョゴリザ隊からも装備をゆずりうけている。

ベグと二人でカラコラム・クラブを動かしているもう一人がある。ゼネラルセクレタリーのハイヤット (Hayat) 氏である。彼は貿易商會を営んでいる。日本の商社の代理店をやっていたこともあるらしい。ヨーロッパへも行っており、パキスタン人としては進歩派にぞくする。パキスタンではどの家庭に招待されても奥さんがパーティには顔を出すことはないし、お顔等出さない。ハイヤット夫人は皆といっしょに食事し、食事の前にはカクテルが出た。彼はラホールでは二番目のワルだから注意しなさい、しかし君達はお金をもってないから心配することはないと、ラホール駐在の M 商事の S 氏がしんらつな批評を話してくれた。なかなか活動家である。一昨年高村君と二人でベグ、ハイヤットを相手に合同登山の打合わせをしていたことである。クーリーが事故死したときの補償金は分担できない、しかし安くなるように交渉すると、思いもよらぬことをハイヤットに言われて二人ともア然とした。AACK もこの程度の人物を養成しないと合同登山やるのはむずかしいなと思ったことである。このハイヤット氏を相手に渡り合ってわが隊の会計をあずかる人文科学者は、立換金をとり上げるのに成功したのであるから、そう心配したものではないかもしれない。ハイヤット氏はラホールの旧家であると自称し官辺筋にも知人が多いといっていたが、パキスタン隊がおくられて山へ入ってきた時には、ラワルピンディ (Rawalpindi) から空軍の飛行機を出してもらってスカルド (Skardu) までとんでいる。帰りも彼等は荷物をスカルドに置き放してかえってしまったが、これも空軍の飛行機がとりにきた。丁度その時、私達も飛行

場でピンディ行の便を待っていた。連絡将校が便乗を交渉してくれたが、荷物を少々運んでくれたばかりで、われわれはのせてくれなかった。

カラコラム・クラブは会員100~150ばかりのラホールを中心に有力者を集めた登山団体ではあるが、アクティブな若い登山者が少ないようである。今度の隊には前記のベグ教授ハイヤットの外2人の若手、バシール (Bashir) 君とベルベーツ (Pervez) 君が参加した。この若手2人は前からのクラブ員ではなく、新聞で公募して選んだということである。登頂が終って第2キャンプに集合したとき、バシールは入会申込書をかいていた。パ側の隊員がなかなか決らぬようで、いつまでたっても靴のサイズ等装備の準備に必要な資料がパ側から入手できないので、装備係をやきもきさせたが、こういう事情があったようである。

今度の隊は合同隊といっても、はじめから日本隊と行動をとにしたのは、バシールだけだった。彼はそれまで勤めていたパキスタン航空をやめて、ピンディから私達と同行した。日本側の隊員と同じテントにね、食事と同じものをとり、よく協力してくれた。サリン (Saling) でポーターのやとい入れをはじめ、言葉の点で彼に負うところが多い。ポーターやクーリーのマネジメントについては連絡将校である同名バシール (Bashir) 大尉が誠によくやってくれたことは隊員一同感謝していることである。一方バシール君の援助も大いにあずかって力があつた。彼はクラブのメンバーとしてでなく、パキスタン人として参加しているのだと、自分でもいついた。身体が大きいので装備等身に合わず、短いズボン等をつけて、特に苦情もなくやっていた。彼が登山者としては技術的には未熟であったのに登頂隊員にえらばれたのも、彼のこうした行動による隊員の友情によるところが多い。

パキスタン側の他の三名は、本隊が ABC に集結しさらに前進キャンプをたてる7月中旬になって上って来た。当時小生とバシール大尉とが ABC に残っていた。クーリー達が誰か来たという。小生も遠目はよくきつつもりでいたが、彼等にはかなわない。やがて近づいて来るのを見ると、思いの外の大部隊で、クーリー20人ばかりを従えてベルベーツが来る。クーリーを再び BC にかえて、数日おくれでベグとハイヤットが上って来る。せいぜい10人位のクーリーでやってくると思っていた。食料、共同装備等は全部こちらで上げてあるのに何をもって来たのか。欠乏していた紅茶、われわれの方でも用意していなかったビスケット、コーンフレークだのパキスタン特有のアーモンド等の木の実をもって来たのは気がきいていたが、こういう食料品も重いブリキのトランクに入っている。チョゴリザ隊からゆずり受けたテント、バーナー、ついに開いては見なかったが古い重いテント、カラコ

ラム・クラブの財産である装備類一切をもって来たという感じである。

ベグは自然食主義であると称して、白米とかラーメン等はとらない。必ずチャパティを焼かす。彼はこの自然食主義で健康を害した青年をあづかって健康をとりもどしたと自まんする。お前も物理学者で自分も物理をやっている。しかも2人ともクラブの副会長だといって気嫌がよい。アンザイレンして氷河を歩くときはお前がリーダーだから先頭になれという。ガンコちいさんであるがにくめない男である。弟さんがラホールで写真屋をやっているせいか、写真はたまにしか撮らないが一枚撮るにも大変である。

彼等が ABC にやって来た翌日のことであつたと思つたが、一つの要求をもち出した。それは合同登山であるからパキスタン側の隊員を必ず1名登頂させてほしい。もしできるならそれは望ましいが、原則的には、どちら側といわず最も好調の隊員をえらびたいと思う。それにパ側の隊員はとも登山技術が未熟のように見うけるから残念ながらそういう約束はできないと答える。ベグは何年のどこの登山隊はどうだったと先例をあげてがんばる。しかしパキスタン側隊員が弱いということはみとめる。ハイヤットは仲々執拗にがんばる。隊員がだめなら、せめてポーターをつれて登ってほしいという。ポーターの中にそんな意欲のあるのは見当らないし、そんなことは考えていないと答える。彼は仲々あきらめない。止めるのをきかず第2キャンプに上って行って、加藤君にまたこの要求をもち出し、ポーター達も激励したが、ポーターからは誰も行くという者は出なかつたらしい。彼は何んとかしてカラコラム・クラブの名を挙げようとする。

これにはあとできると理由がある。カラコラム・クラブでは K₂ の登頂をねらっている。ここで一人でも登頂者を出しておきたいらしい。ベグの計画によると、1963年の夏には希望者を公募して、ナンガの近くでトレーニングをやる。この中から6~7人のメンバーを選定して、ベグがこれを引きつれて、アルプスへ技術習得にいく、1964年には K₂ をやりたい。63年のトレーニングにだれか今度の隊員から8月に1ヶ月の予定だから誰か指導に来てくれないか。装備はハイヤットが日本に買入れにいくから援助してほしいという。

K₂ をやる前に、パキスタン隊でもう少し低い山をカラコラムでやった方がよい。その方がアルプスへ行くよりよい経験になるのではないかと試みる。ガンコちいさんは仲々聞かない。どうも、インドのエベレスト計画に対抗してやるつもりらしい。この国の人々は事ごとくに印度と対抗意識をもっている。前にもかいたように政府筋からも援助があるらしい。今度のサルトロ計画にも、ビスケット等の食料を大量に寄贈され

ているが、今度は極く一部しかもって来ていないそうだとキャプテンの話。K₂ 計画に大変な執心である。

話はかわるが、パキスタン人は人使いが仲々うまい。これは日頃召使いをつかって生活しているせいらしい。どうして同国人をあんなに差別できるかと思つばかりである。テントの中を一寸整理するにもその都度ポーターを呼びつけている。朝の出発の時間をきめておいても、ゆうゆうとクーリーを呼んで荷物をつくる。時間が来てもおしゃべりをしていて仲々腰を上げようとしなれないのは全く閉口した。登頂がすむと、ベグはパ側の隊員を引きつれて、さっさと帰って行ったので彼等と行をとにした日時は比較的短かつたが、風俗習慣のちがう人々との合同登山は、いろいろ問題があると思つた。

小生も ABC で2週間余りをパキスタン人の中に1人ですごした。ほかのことは別としても、味覚のちがいは、一週間でパキスタン料理に非鳴を上げた。ハイヤットが世界一美味の米をごちそうするというので期待していると砂糖の入った甘い甘い御飯、カレー汁にはトウガラシが多量に入っている。

つぎに、連絡将校のキャプテン・バシールがいる。小ガラであるが精力的に活動した。私達が最後の便でカラチに着いたとき空港ではじめて会つた。はやくからカラチに来て隊の手伝いをよくやってくれた。彼の話によると、ガッシャーブルム III (Gasherbrum III) へ行くときいてカラチに出て来たという。これで見ると政府はガッシャーブルム III を許可するつもりでいたものらしい。

トラベルの間、いつも先頭にキャンプ地について、キャンプ地の選定、食料の調達等に走りまわる。ポーターやクーリーも上手に掌握して全くそつがなく立ちまわる。今度歩いた谷が比較的豊かで、人々の気風もおだやかであつたせいもあつたが、全行程を通じて殆んどトラブルがなかつたのは、彼の力量に負うところが多い。また一面未開の後進地域で、お役人とか軍人のおかれている位置をまざまざと見る思いがする。

彼にもいくつかの失敗はある。BC でクーリー達に賃金を支払うとき、公定よりずっと安く支払おうとした。クーリー達は „PA に訴えるぞ” といってモレーン (Moraine) 伝いに賃金を受けとらずに帰りかける。この時、彼は少々あわてていた。これは彼が隊の経済を考えて好意的にやったことであるが、彼の行過ぎにはなやまされたことも多い。

登頂が終つてから、他の小さいピークを試みたいという希望をもっていたし、彼を通じて国防省への許可を求めてもいた。これは許可されなかつたのであるが彼はわれわれが強行すると思つたらしい。第2キャンプでヒステリーを起こし、ポーター達に、お前達は荷物をはこぶだけだ、隊員の食事準備等はしなくてもよ

い等といひ出す。サーダーにわれわれの行動を監視するようにいい含めたらしく、クーリーを呼んでくると先にキャンプを下っていった。ABC で1週間ばかり彼と2人きりで暮した時、せめてインディラ・コル (Indira Col) のあたりまで行きたいと提案すると自分も行くという。それまでに氷雪の技術を教えてほしいと仲々乗気で、半日ばかりで2人で小さい支氷河を登って見た。しかしいざ帰るとなると、往路を1吋といえども離れては困るといひ出す。シアチェンの向う岸までも行かせない。シアチェン上流の山やイタリアン・コル (Italian Col) につづくテラム・シェール氷河 (Teram Shehr GL.) を目の前に見ながら、将来のことを思つて引きあげざるを得なかつた。

彼の労を謝するため、カラチをたつ直前に残っていたトランジスターラジオを贈ろうとした。彼はどうしても受取らなかつた。これを私達がワイロをつかおうとしたと、報告しているふしがある。全く思いがけぬことだつた。これは異民族であるためではないかもしれない。階級というものがものをいう軍隊にいる彼の保身術であるだろう。サルトロがなかなか許可されなかつた原因も、ほんとうは思わぬところに原因があつたかもしれない。

山の話より人の話になつてしまつたが、エキスペディションでは、人間関係に相当な比重があるせいである。

以上の人々の外、マリー (Murree) でお目にかかつたアユブ・カーン (Ayub Khan) 大統領、カシミール省のケー・エッチ・カーン (K.H. Khan) 氏、ジャリフ (Sharif) 文部次官、外務省のエ・エッチ・カーン (A.H. Khan) 氏等、いろいろお世話になつた人々を思い出す。帰路ラホールで訪ねた西パキスタンの文部大臣が、上品な老婦人であつたことはこの国ではめずらしい。

サルトロこぼれ話

齊藤 惇 生

◎1日600円の船賃

われわれは遠征の度に、たいい船の御厄介になっている。今度も日産汽船の日産丸で、平井、谷、上尾、齊藤の4人が約1ヶ月、カラチまで行った。印パ航路はあまり儲からないので、船は古い型が配属されている。日産丸は戦後の第一次造船の船で7,000噸、最高速度14ノットである。船賃は割引して貰つてひとり15,000円也。

何度も出発時刻が延びたあげく、神戸を出発したの

は4月5日の朝6時だった。見送りは平井夫人ひとりだけだった。黒いベレーに白いレインコートの姿が誰もいない埠頭にいつまでも立ちつくしていた。汽笛がまだ肌寒い春の朝もやのなかに、ボーボーと響きわたった。ペベ・ル・モコが波止場に、ギャビイが船の上だったが、ペベは別れの辛さでわが身を刺した。そんな出発だった。

最初の朝食は簡素だった。サロンでボーイにうやうやしく給仕されると、まことにくすぐったかった。「ぼくらで勝手に食います。」と言っても彼はニヤニヤしただけだった。朝が余り簡素だったので心配した。1日500円ではこんな調子の飯がつづくだろう。栄養失調になるぞ、港、港で食料を買いこもう、と相談した。ところが昼、晩ととてつもなく御馳走になった。やっと食べきれぬぐらいだ。夜はお茶とケーキが出る。狐につままれた気になった。それから豪勢な毎日がつづく。平井がメニューを発見してサロン士官より一品われわれが多いぞと注進してきた。冷蔵物だからだんだん味は落ちていったのはしかたがないが、こんなにたくさんと思うぐらいだった。谷はそれでも全部をきれいに食べ、飯も何杯もおかわりした。育ちのいい上尾はお菜だけ食べて飯は1杯やっとなら。平井と私は辛うじて2杯だった。

カラチについてから御馳走を食べられた秘密がわかった。ジョニー・ウォーカをよく飲ましてくれた機関長が次のように語った。

「司厨長は実際よくやってくれました。あなた方はなんせ1日500円の割でしょう。当り前だったら何の御馳走も出来ないのです。」

司厨長は、この航海でもう定年で船を降りなければならぬと淋しそうに言っていた。戦時中は数回船が沈んで海に浮かんだそう。上陸前に私たちの散髪もしてくれた。白髪まじりの頭をいつもきちんと分けたほんとうに親切な海の男だった。そしてカラチで船の人をパキスタン料理に招待した時、邪魔になりましたから、とどうしても来なかったほど控え目の人だった。

◎船の中で身体を鍛えておけ

印パ航路は太平洋などに比べると余り揺れないそう。事実船酔いらしいものを感じたのは、沖縄の沖を通る時ぐらいだった。こんな時は横になって眠っているにかぎる。

門司を出てからトレーニングを始めた。甲板の上で午後三時から体操、縄飛び、腕立伏せ、指のにぎりひらき、ザンパーノと名付けたクレーンの金具の持ち上げ、それに上甲板から後甲板へと駆足。駆足は谷、縄飛びは平井が一番だが、ザンパーノは弱い。ローリングする時に縄飛びするのはなかなかむずかしい。終る

と明治屋のジュースを飲み、海水の風呂に入り汗を流す。

機関部の人が甲板なんかより、エンヂンルームの階段の上り、下りをやったらよいと言ってくれたが、ここは40℃以上もある暑さ。のぞいただけで止めた。

こうして、カラチにつく頃は心身ともに全く健康になっていた。

◎戦争はいやだね

香港に着くと笹谷が早速ランチで迎えに来てくれた。彼は36年卒のA.A.C.K. 会員。大阪商人のド根性を発揮せんと、ここで独力で商売をやっている。ここを通過するA.A.C.K. 会員はもれなく彼の歓待を受ける。

彼は私たちに広東から上海と、本場の中華料理を御馳走して栄養をつけてくれた。

香港は一日しか停泊しない。もっとこの雑然として金と貧困、悪徳と虚栄が渦巻いている奇怪なこの街を案内してもらいたかったが、食物で終わってしまった。ランチが出る時、彼は大きな声で「A.A.C.K. 万歳」と叫んだ。われわれは「ペベ頑張れ！」と返した。ランチがグラグラと揺れて棧橋を離れた。よき友とうまい食物だった。

翌日出港が少し延びたので、また、上陸して、九竜や、香港に最近建った大丸デパートを見に行つた。弗が乏しくなりかけたのと、探求心から電車は一階の二等に乗った。肥ったオッサン車掌が「サア、ドウゾノツテクダサイ。」と話かけてきた。「入口は混むから奥へ、料金はいくらです」と親切にしてくれる。切符を切る暇に彼はかなりしっかりした日本語でしゃべる。

「香港では大東亜戦争(!!)で30万人死んだね。本当に戦争はいやだね。」

彼はそのことばを怒ったようでもなく、恨むようでもなく、にこにことして、もうあんなことは止めましようといった調子で話す。私たちはなんだか穴にでもはいりたいような気がした。私は、蒋介石の「暴に報いるに暴を以てせず」ということばを思い出した。中国人の心の大きさの一端にふれたような気がした。ほんとうに戦争はもう止めよう。

◎某月某日

とある所で、とある映画を見る機会があった。フランス映画だった。いちばん純心なAは、なんたる醜悪事、ショックだ、と頭をかかえこんだ。Bは、何かを覚えようと一生懸命見ていた。Cは、今まで見たやつよりいちばん見ごたえがあるぞと思った。いちばん若くていちばん反応のありそうなDが、案に相違してフンといった顔をしていた。

BはAの様子を絵入りで日記に書いた。CはAに対

して醜悪事でないかと教えた。Dは何事もなかったように「円月殺法」を読んでいた。

◎明日の夕方

戦後の日本では、バナナは高級果物になってしまった。これを一度腹いっぱい食べてみたいと日本人はみな思っている。

もともとバナナなんかは、南方では極めて大衆的なものだ。シンガポールに着いたら、ある。ある、長いものや、短いモンキーバナナが大きな房のままどっしりとぶらさがっている。4人の意見は一致した。夜、裏街探訪に行った時、一軒の果物店に立ち寄った。中国人の店だ。100本以上もついた大きな房が900円ぐらい。まだ青い。「いつ頃食べられようになるか。」と聞くと「トモモロウ・イブニング」と言う。それならというわけで早速買いこむ。船に帰ってから、皆トモモロウ・イブニングをこどものように待ちかねた。しかし、待望の時刻が来てても少しも、バナナは変化しない。一本むいてみたが、ゴリゴリ。明るる夜も。その明るる夜も、なでても、もんでも固かった。騙されたと気がついた時は、もう船はインド洋上を走っていた。

一週間もたつて、 やっと2~3本色が変わり、食べられるようになった。そして次から次にどんどん熟した。食べても食べても熟れた。だんだん見るのもいやになってきた。ゴアに着いた頃には、黒く腐ったのが5~6本哀れな格好で残っていた。

◎インドア・ノーグッド

ポルトガル領だったゴアは、今インド領だ。インドが武力解放をしたからだ。鉄鉱石積出しの港であるゴアのモルムガオ港に着いたのは4月27日だった。私たちは、このゴアがどう変わったか、幾分興味を持っていた。植民地が解放されて母国に復帰した時、その人々はどう受け止めているだろうか？

モルムガオの丘には、古いポルトガルの城があった。丘は鉄分を含んでいるためか、赤茶けた色をしている。港の中に白い小さい軍艦が大破して浮かんでいた。ポルトガルのである。邪魔にならぬからおいてあるのか、解放の記念にかならない。

ここの住民はドラヴィダ系なのだろう、色が黒く、背も鼻も低い。船のワッチマンに来ている若いのに、インドはどうだと聞いてみた。意外に彼の答えはこうだった。

「インドア・ノーグッド」

と言い、私のポケットから取った物を自分のポケットに入れる真似をして、顔をしかめた。

また、私たちはオールド・ゴアのサンフランシスコ・ザヴィエルのお寺を尋ねた。行く道々にいたる所

に、ジャイ・ヒンディ(インド万歳)と書いてある。そして道の要所、要所には必ず十字架が立っていた。新旧の支配者の象徴である。ザヴィエル寺院は褐色の石造りで、大きく、そびえている。案内に出た役僧は、日本人というのにこり突つた。彼の息は酒の匂いがしていた。ザヴィエルの埋葬してある所は、彼の像からすべての調度にいたるまで、金泊で塗られている。インド人の老司祭が、ひとり祭壇にぬかずいていた。この寺には今はたったふたりしかいないと役僧は言った。そして、インドア・ノーグッド、ポルトガル・グッドと腹立たしそうに言った。

帰りにゴアの町でアイスクリームを食べた時、その店にふたりの黒い尼僧が、うつろな表情で坐っていたのが、何かいたいたい感じだった。

結局、私達が聞き集めたところによると、解放時のインド軍のやり方に、ノーグッドの原因の一つがあるようだ。インド軍は戦争につきものの掠奪を見境なくやたらしい。また、ポルトガル人を三日三晩飲ませず食わせず閉じこめたりした。他の一つは、今まで自由港的で物資が割合にあったのに、インド領になってからは制限されて、いろいろのものが極端に不足してきている。どうもそのような点にあるらしい。

しかし、私たちの当った連中が、昔ポルトガル人の恩恵を直接受けていたような人たちなので、全部の意見であるとはいいいにくい。堀立小屋に住んで英語もしゃべれない、表情に乏しい住民たちはどう考えているのだろうか。

◎DOSUKEBE!

やはり、モルムガオの話。ここの港湾労働者は、同じような顔つきをしても頭の刈り方、ふんどし、腰巻などにいろいろ違いがある。同じカースト同志なのだろうから、部落か、部族の違いを示しているのかもしれない。昼の休憩にはゴロゴロ寝ころんでいるだけで飯は食べない。女の労働者もいる。女を見たら声をかけたくなるのは人情だ。船員のひとりが、オーイZIKIZIKI! と冷やかした。あれのことをこの辺ではこういうらしい。とたんに黒い顔で鼻にアクセサリーをつけたひとりがにこりとせず、DOSUKEBE! といい返した。これで、この勝負は彼女の勝ちになった。しかし、ドクトル・マンボウの北氏が書いていたが、もうちょっとまじな日本語が世界に広まるように願いたいものだ。

◎サムライ泰安

「二度のつとめの左袂」と心境を句に託して出馬された泰安副隊長は、世が世なら一城の主とのことである。これは、私がこの人にさすがそのおもかげがあると感じた話である。

ラワルピンディ、スカルド間の飛行機の中で、私たちは右往左往していた。勿論、ハラモシュ、ラカボシを前方に見て、ナンガ・バルバットをすれすれにかすめて飛ぶのだから興奮しない方がおかしい。しかし、加藤さんは浮かぬ顔付きである。昨夜の住商の築山氏の招宴での飲み過ぎがたたっているのである。はき気と心窩部に痛みがあるらしい。一応、ノルモザンとプロバンサインを服用して貰ったが、効果がない。スカルドに着くと、激しくなり身体を折り曲げての苦しみよう。そして、嘔吐。そこで、ブスコパンの注射を試みたところ、やっと止まった。この間、加藤さんは自分から腹が痛い、なんとかしてくれと言われたい。こちらが尋ねると答えられる。激痛の時もウーンと一声うなって腹を押さえられるだけである。こんなりっぱな態度の患者は、私が医者になって三人目だ。まことにこれこそ武士の我慢のしようだと思った。あとでPK36 氷河で、もう一度、腹痛を起こされたが、病気は胆ノウの痛みである。昔、シャクといていたやつだ。願わくば、加藤さんがあの世に行かれる時もさすがは大往生と言われるような最期であってほしい。

◎日本の薬はすばらしい

スカルドは実に快適である。風は涼しく、水もきれいだ。山も近い。ただ、午後、決まって吹くサンドストームだけがいやである。

隊員の中で、平井と私がいちばん最後までここに滞在した。それぞれ装備と食料の係をしていたので、荷物をジープで送り出す役をしたのである。

もう、ここから村人の診療が始まった。スカルドに軍の病院があり、軍医が二人いる。どうしてあの病院に行かぬかと聞くと、薬がぜんぜん効かぬと言う。よく調べてみると、治療は無料だが薬品が不足しているのか、治療はその場の一回かぎりとのことである。それならなかなか治らぬはずだ。

ある日、レストハウスのコックのロージーが、ドクター、レディの診察をたのむと言って来た。レディとあらば行かずばなるまいと、たくさんのお迎えに連れられて出かけた。入口の道がポブラ並木になっている、大きい二階建のしっかりした家だ。スカルドの旧家なのだろう。

どんなレディかと待っていると、やせて大分くたびれた40過ぎのご婦人だ。なるほどレディには違いない。3年前、腰がギックリとなり、それから歩けないという。裸にして見てもよいかと言うと、まわりがどうぞと言う。しかし、そのご婦人にとっては一大決心を要することだ。異教徒の男の前に顔だけでなく、裸身をさらすのだから。赤ん坊のように身体をちぢめ、手足を固く緊張させている。診察しにくいことおびた

だしい。病気は根性坐骨神経痛だ。一人かと思ったら今度は18歳の娘さん。顔が青く、発育が悪い。オッパイが小さく、いたいたい感じだ。これは十二指腸虫による高度の貧血だ。もう一人、20歳の娘、重症トラコーマで手がつけられぬ。

干ぶどう、杏の種、卵、粗朴なケーキにお茶を御馳走になる。神経痛のレディにミオセタンというのを1週間分投与した。3日位して、ロヂーが「ドクター、ヴェリグッド」と言ってくる。なんだと聞くと、もうあのレディは歩き出したと言う。これにはこちらが驚いてしまった。前から、こんなところでは薬がよく効く話は聞いていたが、本当にそのようだ。

◎パキスタン人と賭をするなかれ

インド商人がえぐいことは定評がある。さすがの華僑も太刀打ち出来ないとのことである。中国人は面子を重んじ約束を守るのに対し、インド商人はそういうことがないと聞いた。前小屋のバンジャブ大学での経験によると、賭でも同様に汚いそうだ。負けてもなんとかかんとかかって余り払わないらしい。その賭をやって、私達にずいぶんわずらわしい思いをさせたのは平井だった。

スカルドの最後の数日は、隊長と牧内さん(大使館)、平井と私、それにリエゾンのバシール大尉と過した。牧内さん持参のジョニー・ウォーカーで夕食時、いい御気嫌になるのが常だった。頑固なイスラム教徒のバシール大尉にとってそれはかなり不愉快な刺激なことだった。ある晩、大尉は平井と論争を始めた。婦人は酒呑みの夫を愛するか否か、ということだ。そして結局、平井夫人にそれを手紙で聞き、その返事に対し、お互いの1ヶ月分の収入を賭けようということになった。平井の収入は520ルピー(奥さんと合せて)、大尉もそれ位(パキスタンは役人と軍人の月給はいい)。勿論、平井は愛すると賭け、大尉は否に賭けている。その返事の手紙に対し、大尉は英文で、そして直接自分宛に来るという条件をつけた。平井は自信満々で大尉の文を同封して奥さんに手紙を出した。判定は四手井・加藤・牧内の三人としたが、牧内さんはカラチに帰るので、加藤さんに決定を委任するということになった。

A.B.C. に大尉が来た時、問題の手紙が平井宛に到着した。平井夫人はこう書いていた。酒呑みの夫といえど愛する、酒臭くてもキスも辞せず。ただ面倒なので日本語であなたに出すが、その旨を大尉に伝えてくれ。しかし、大尉は内容はともかくとして、英文で自分宛に直接来なかったから自分の勝だと主張して判定を求めた。加藤さんは話を聞いてから、平井の負だと宣告した。それで大尉は鬼の首でもとったように大喜び。平井の顔を見ては520ルピー払えと言ひ、他の隊員にも彼に払うよういってくれと言う。平井は、自

分の方が本当は勝だからといって、判定がどうあろうと払わないと頑張る。

このため、隊員の間でも大尉の勝、平井の勝、いや勝負無しとずいぶん議論がつづいた。スカルドに帰ってからも、大尉はこのことをすぐ話題に持出す。英語の議論となると平井がいくら頑張っても途中でつまる。大尉は日本人に対して唯一の優越感をもたらず語学的優位を思う存分楽しんでいるよしゃべる。

そしてこういうことになった。カラチで牧内さんの判定を求める。但しそれで平井が負けたら1000ルピー払え、大尉が負けたら100ルピー払う。ぎょうぎょうしく文書を作って両者のサイン。私まで立会いとしてサインをした。

1000ルピーと100ルピーの差の根拠が面白い。平井は一度負けたのに大尉が特に再審査を認めてやったのだから、もし平井が負けたら520ルピーの2倍。大尉は一度勝ったのだから今度負けたとしても100ルピーでよいというのだ。平井に負けたら本当に払うのかと聞くと誰が払うものかと、こっちもこっちである。

結局カラチでは牧内さんの作戦が効を奏し、うやむやのうちにさようならになってしまった。打明け話になるが、平井夫人よりのあとからの手紙によると、前の手紙とちがって、本当は酒呑みは大嫌いなのだそうだ。私は平井夫人の本心のためにも金を払えと言って平井を困らせた組だった。

◎女は子供でも側によって来ない

バルチスタンぐらゐの山奥になると、イスラムのきびしい掟もかなりルーズになる。顔もかくしていない。頭の毛は幾つかに分けて、細かく編んでいる。頭には赤いモヘヤ風の布地で作った浅い帽子を被っている。チベットに近い風俗なのだろうが、薄汚ないので余り頂けぬ。

女がわれわれの直ぐ側に寄って来るのは、薬貰いか、重症人の診察以外は絶対ない。サリンのキャンプ地で男はすぐ横に来て、ボヤーとして坐って見ているが、女は100mほど離れた家々の屋根やら二階から見物している。双眼鏡を持ち出してのぞくと、すぐバタバタと蔭にかくれる。動作は男よりずっといきいきしている。みなほっそりしていて、栄養過多のデブデブの女なんかいないので、そう見えるのかもしれない。そのうち、いたずらして、両手を握って目に当てて双眼鏡の真似をしても逃げることを見つけた。みな面白がって何度もやっては笑いこけた。

帰りにバラゴンの村で子供達が例によって、見物に来ていた。その中に一人、大そうかわい子の子がいた。きれいな帽子を被り、身体にはバルチスタン風に布を巻きつけている。余りにかわいらしいので、あれは女の子でないかということになった。そこで1人ビール

1本で賭が始まった。みなぼちぼち女気が恋しくなっていたのだろう。女というのが多く、男というのが少なかった。サーダーに聞くと言下に男だといって、その子の帽子をとった。やはり男だった。子供達も事情を知って笑った。遠征四回のベテラン岩坪が、この辺では子供でも女は側に寄って来ませんよ、と説明した。勿論、彼は男と賭けていた。

◎4人のおちごさん

サリンでクーリーを選考した時、約4~5倍の志望者があつた。減多にない現金収入にありつこうとみな必死だ。リエゾンとハイポーターが、声を枯らし棒を振り廻して選り出した。私達は彼等のおかげで、この光景を写真に撮ろうと、走り廻っているだけでよかった。この時、隊長達の小間使いを連れて行こうということになった。見物の中に、カペルーのハイ・スクール生徒がいた。その連中にあたると、是非行きたいというのが数人いた。選択の結果、色の白いやせた背の高い兄と、やはり色白の背の低い弟の双児の兄弟、その友人のゴマ出身の色の黒い丸顔のヘダールというのがまず採用された。ヘダールの顔付が阿修羅に似ているのでアシュラと仇名がついた。また一人チョタ・ワラ(小さい奴)が加藤さんのところに来て、I shall go with you といった。加藤さんは、熱心さと英語が出来そうなのに惚れこんで、これも採用に決った。このチョタはシェラリーという名前だが加藤さん、双児の兄貴は四手井さんのおつき、弟は林さんの三脚とカメラ持ち、アシュラは上尾の写真道具と救急薬箱持ちになった。

隊員の中には、装備、食糧、賃金の問題がうるさいからと反対の声もあった。しかし、まあまあ、これ位の余裕あってもよからうということになった。彼等はついて行く間学校はサボル訳だ。行くこと決つても別段、対岸のカペルーまで荷物を取りに行きもしない。着のみ着のまま、裸足で一緒に歩き出した。

出発して間もなくすると、彼等はタバコをねだりだした。12から16位の年の連中だ。日本国の刑法や生理学、はてはコーラン、アラーやマホメットを持出して説教しても効果がない。バシールは、俺もその頃から吸っていたよと笑う。その次に足が痛いから靴、しかたないので村で買ってやった。次は靴下、装備の平井はシブイ顔だ。靴も半額は賃金引きとなった。実際何も持っていないのだから、何でも欲しいものばかりだ。ドロップの配給も始まった。タバコも時々ありつきだした。

親方によって扱ひも大分違う。四手井さんはいてもいなくてもいいよ、という顔。加藤さんは食糧係に餉の特配を要求して甘いオヤヂぶり。林さんもやさしい。タバコを一日3本やると約束する。上尾は何を要

求されても、ナヒン・ハイ(あらへんで!)と搾取型。彼等の学校での勉強は一応、一通りあるが、英語、ウルドゥ、ペルシア、アラビアと語学が圧倒的に多い。ウルドゥはペラペラだが、たのみにしていた英語はみな余り知らない。結局双児の兄弟はゴマまで、ヘダールとシェラリーは B.C. まで来た。シェラリーは数日 B.C. にいたが、寒くもなり、一人になって心細くなったのだろう。元気が無くなったのでクーリー達と一緒にかえした。

帰りは丁度彼等の夏休みになっていた。ヘダールはギャリに待っており、シェラリーもガガルに来てわれわれを待っていた。今度はみな成功に気をよくしていたのか、情が移っていたのか、文句も出ず、彼等は雇われた。ヘダールは帰りは何もねだらず、快活にケックとよく笑い、よく歌い、時に踊った。歌はメンドクというバルティ語で花の意味の言葉が出てくるのが多い。手をなよやかに動かし、優美にステップを踏んで踊る。

パキスタンは標準語としてウルドゥ語の教育に力を入れているようだ。彼等を見ていると、文字のないバルティ語など教育が普及するにつれて、だんだん失われて行くのでないかという気がした。

◎成長したハイポーター

チョゴリザの時は、ハイポーターが何も出来なくて随分苦勞したと聞いている。テントの張り方、アイゼンの結び方まで指導せねばならなかったらしい。それに比べて今度はあらゆる点で、彼等の活躍に助けられた。

ハイポーターでもよく気のつく働き者、ポヤーとしている者、忠実な者、こすい者、いろいろいる。日本人の義理人情が顔を出しているとみな笑ったのだが、チョゴリザ組の四人は全員採用された。

われわれは平素、人を使用人として扱いつけていないので、使い方は全く下手糞だ。慣れてくるとどうしても友達扱いになる。しかし、パキスタン・メンバーは絶体一線を劃して、扱いもうまい。ポーター・テントに出かけるなど絶対にしない。ポーターも、パキスタン隊員の荷物の世話をしたり、アイゼンの紐をほどいてやったりはするが、われわれにはめったにしない。こっちもされると、くすぐったい思いをするので要求しない。マホメッド・アリは平井を、オラムは高村をバイー(兄弟)と称していた。これはチョゴリザ以来の関係からだ。パキスタン・サーブと兄弟なんかいたら怒鳴りつけられることだろう。われわれも一線を劃した方がよいと思うのだが、つい向かい合うとニヤニヤしてしまう。英国人など、こんな時には、全く当り前に、勿体ぶった顔をして扱い、使うことだろう。どちらがよいかという問題だが、日本人は多分この

態度を変えることは困難だろう。無理にえらそうにしても、第二次大戦の二の舞になるのがおちだ。このままで行った方が、時には工合が悪くても長い目で見たらいいのではないかと思う。

ポーターのなかで、シャイヨークの奥のチョルバット出身のイスマイル、アブドラヒム、タゴール、は極めて忠実で、蔭日向がない。スカルドの近くのサトバラ出身のオラム、マホメッド・アリ、マホメッド・フセインは一寸ずるいところがある。サトバラ村ではバルティでなくナギール地方の言葉である、シナウ語を使っている。移住して来たものらしい。なかでもフセインは身体も大きく、容貌魁偉で、いかにも強そうなので、初めみな期待が大きかった。しかしそのうちボロが出て、文句が多く、臆病なことが分り、余り相手にされなくなった。そうになると、タバコのボックス(チップ)も少なくなるのである。

チョルバット組の物の考え方、反応の仕方が、かなり仏教徒的だとわれわれ、仏教徒の間で話題になった。チベットに近く、ラマの影響が強いのでないかということになったが、どうだろうか。チョルバットはラダクの近くである。イスマイルは若い時、チャンタン高原を越え、ネパールのカトマンズまで行ったと話をしていた。加藤さんなんかその話を聞いた夜、一晩寝れぬぐらい興奮されたものだった。

イスマイルの加藤さんに対する献身ぶりは立派なものだった。彼はチョゴリザで、加藤さんからトランクの鍵を預けられた。それが彼の粗朴な心を感動させた。アラーが引合せた偉大なサーブであると信じたのだ。彼はスカルドで加藤さんや平井に会った時、抱きついて涙を流していた。最後の別れの時にもあれこれ欲しいと何もいわなかった。加藤さんに対しても、加藤さんの持っている家族の写真を一枚くれと言っただけそうだった。また、アブドラヒムの林さんに対しての忠誠ぶりも忘れられない。

ハイポーターという職業は、ここではシュルパのようにはっきり分化していない。ハイポーターの経歴を持つ連中が、サリンでふられて、クーリーとしてついて来て、ゴマで雇われたのがある。ゴマでもふられたもので、シアチェンまでクーリーで来たものもいた。

ハイポーターは、バルチスタンではあこがれの職業である。それは勇敢さという点もあるかもしれぬが、山から帰って来た時、ちゃんとしたお仕着せで、沢山貰ったものをついでいるというところにあるようだ。まあ一種の凱旋將軍でも見る憧憬の目付で子供達は見ている。おちごのシェラリーに、お前は大きくなったら何になると聞いたら、サーダーになると答えた。そばで聞いていたイスマイルは、何をいうかといった顔をしていた。しかしこの若い連中が大きくなるころには、カラコラムのハイポーターはまた一段と立派にな

ることは間違いないようだ。今度一緒につれて行ったおちご達が実際ハイポーターにでもなったら、インテリハイポーターが出現することだろう。

◎利口ものサーダー

サーダーのグラム・フッスールは 28 歳、頭が少し禿げかかっていて、一見したところ 35 歳には見える。背丈は 165 cm ぐらいで小柄である。出身はバルチスタンでなくラダク地区で、いふなれば他所者だ。7 年間北辺国境守備隊(ノーザン・スカウト)にいて軍曹だったそうだった。スカルドでカシミール・レストランなる食堂兼宿屋を営んでいる。彼の食堂にはナショナルのトランジスターラジオもおいてある。時々行商にも行くらしい。バルティ語は勿論、ウルドゥ語も本格的、そして今英語を勉強していて、一寸はしゃべる。遠征中も、英・ウルドゥの対訳会話の本を持って来て勉強していた。チョゴリザのベースキャンプへアメリカ隊のケロシンをかついで来たのは彼だったらしい。一昨年ゲントにも参加している。

彼は、ハイポーターの中で、ずば抜けてかじこかった。チョゴリザの時は、クーリー、ポーターへの食糧の配給など、みなサーブがやって、キャラバン中苦勞した。ところが今度は、殆んどサーダーにまかせても大丈夫だった。勿論、監督に立ち合うのだが、見ていると規定量より少な目に計って、アッチャー(これによし)と片付けている。キャラバンの往復でも、大尉を助けてよくクーリーを統制していた。軽い荷物をかついだ奴も、彼は要領よく摘発した。

こんなに頭が働くので、他のハイポーターがかげでブツブツ言っているが、さっぱり頭が上らない。肉代の金とか、タバコなど、サーダーにまとめて渡すとピンハネすると他のハイポーターがいうので、タバコは各自、肉代は後でまとめて各自渡しにした。最後の物資分けでも、電池やスコップを独占しようとして物議をかもした。

私は彼と一緒に、輸送の中心になったロロフォンド氷河のキャンプに 9 日間滞在した。クーリーの差配に彼が必要だった。ある夕方、彼が私のところへ遊びに来た。ジョニー・ウォーカーを試しに出すと、好きだといって飲む。飲みっぷりも立派だ。コンビーフもアサリの油漬も、おかきも、鯨の大和煮も、ヴォート・アッチャ(大変結構)とむしゃむしゃ食べる。そして帰りに余ったらウィスキーを 1 本くれないうかという。食べる事に関しては全く頑迷な連中だと思っていたので、一寸彼には驚いた。他のハイポーターは、われわれがわざわざ準備した羊のベーコンでも、コーランの掟に従って首を切って殺したのでないからいやだといって食べなかったものだ。このあとからは、彼だけに時々コンビーフを特配することにした。

6 月 27 日と 28 日は雪だった。27 日の朝は小雪だっ

たので、バシールとサーダーにボックスをはずむからとクーリーを督励して貰ったが動かない。一週間動きづめだったので、丁度休みたいところだったのだ。28 日の朝も雪、9 時頃より晴れた。雪が膝ぐらまであるので、明日のためにサーダーとフセイン、ハッサンに道つけにやった。道がないとクーリーは動きたがらないのだ。彼等は 10 時半頃出発、少し下流の左岸のモレーンの上で 1 時間位、右、左にもたまたまするのが見えている。やっと姿を消して 30 分もするともう帰って来た。どうしたと聞くと、あのモレーンの向うは、ラスタ・アッチャ、バラフ・トラトラハイ(道はいい、雪はほんの少し)と大声でクーリーに聞えるようにいう。そして、明日はクーリー全員テントをたたませてシアチェン・キャンプに送りこみ、明後日からはシアチェンより往復させろという。なるほど、クーリーは道はよいと今の偵察の結果を聞いている。テントを持ってシアチェンへ向ってここを出発してしまえば、途中で少々雪が深くなって引返そうとはいうまい。バシールもグラムはワイズマンだと感心した。この作戦は 29 日に早速実行して成功した。

しかし、智恵者のサーダーも、古い中耳炎があり、特に右の耳が悪かった。そのためロロフォンドで 3 日間、C₂ で 2 日間、眩暈と嘔吐の発作に襲われ、のびてしまった。幸い治療でよくなったが、山ではそんなに強いという印象は受けなかった。技術の方は割にしっかりしていた。

サルトロが終ってから、私達が C₂ で他の山へ行く行かぬで悶着を起した時、彼は大尉の命を受けてわれわれを見張ったりした。これは彼の立場を考えれば仕方ないことだったと思う。彼は最後に五割増の賃金を貰って、その労を充分ねぎらわれたようだった。

◎ハッサン・シワのこと

サーダーが一番かじこいとすれば、ハッサンは善人だが全く間抜けていた。彼もチョゴリザ組。脇坂が帰路病気になった時、ハッサンが彼をおぶって降った話は有名だ。顔にシワが多いのでこの仇名がついた。彼はウルドゥ語も余り知らない。キャラバンで、大尉はクーリーを数隊に分けて、ハイポーターに統率させた。軍隊の点呼よろしく、大尉はポーター達に、お前のパーティは何人だと聞いた。シワの番になると、シワはチャルソー(400 人)と答えた。みなが笑うと。彼はあわてていいなおした。ティンソー(300 人)。さすがの大尉もこれには苦笑するだけだった。

彼はなにかというと、ザッカス・サーブを背負った話をした。B.C. からピラフォンド峠まで 40K ある発電機をかつがせた。これはザッカス・サーブより重たいとフウフウいっていた。

彼は C₂ まで来た。そして隊員には今度余り見られなかったミズブクレ病にかかってしまった。顔もまん

まる足も浮腫がある。危いので、薬を与えて帰すことにした。ところが、ピラフォンド峠を越えたら治ってしまったらしい。

私達がギャリに着いた時、ガガルーに先行した大尉から、トランク1ヶが盗まれたと報告があった。一時、金が入っているトランクでないかと大騒ぎになった。結局四手井先生のがやられていて、金は無事だった。夜、荷物の横にシワとおちごのシェラリーが番をして寝ていたのに盗まれたのだ。大尉は最後になって、自分の仕事にケチがついたと気もどうてんしてしまった。シワのアホー、お前がしっかり番をしてなかったからだ、シワをバンバンしばいたそう。まことに今度のシワはパッとしない存在だった。

◎手紙の枚数は愛情を現わしているか

今度の遠征では、ポスト・ランナーは2回だけ走らす予定だった。それで日本へはスカルド以後3回しか出せないと思っていた。ところがカバルーにも郵便局が出来ていて、そこで一回増えたり、クーリーが途中で帰るのに託したり、パキスタン隊のハイヤットが先に帰るのに頼んだりして、相当の回数手紙を書く機会があった。勿論、日本からの手紙もその度に運ばれてくる。

今度は内地の留守家族の連絡が緊密だった。それで誰とどこに来たのに私とどこに来ないと大騒ぎになったりまたお互いの亭主の手紙を見せあたりされたため、誰とこは何枚、私とこは何時も少ないと叱咤鞭撻が来たり、余りワイ談したりしてはいけなとか、いましめの手紙が来たりした。

最初はこまやかな愛情を示して嬉々と手紙を書いていた連中も、そのうち、義務的、強制的な感じがし出した。行動日でも沈黙日でも、出来るだけ、しなくて済むことは、しない方がへばらぬのだ。しかし、誰か一人出すと、他がさぼったことがすぐ知れ渡るのである。ぶうぶういって書いていたが、中味は、決してそんなには書かなかった筈だ。

平井はメモ魔で、手紙魔だ。本人は気にも止めない放言が、彼の手帳にちゃんとつけられて、そして手紙の種になるのだ。彼が愛妻に出した手紙は、船の上からのを含めて25通になったそう。各々の手紙の枚数もまたずば抜けて多い。

岩坪の新妻よりこんなにいって来た。ボコさんとこは8枚、ワイさんとこは3枚、あなたは1枚、手紙の枚数が愛情を示しているとは思いますが、もう少し書いて下さい。岩坪は少々邪魔臭がり、愛情の表現はペンでよりも、口と手の方が上手なのでこうなったのだろう。彼はこのように余り書かぬくせに、奥さんの手紙を最も待ちこがれていた。そして、来ると、平井と二人で内容をちびちび披露して、独身の高村、谷

上尾を悩ました。帰りに、カバルーの郵便局に通だけ手紙が来ていると情報が入った。岩坪は固く自分のと信じていたようだった。結局平井夫人のだった。岩坪のがっかりした様子、プラスチックの片耳までしおれていた。(彼は交通事故で片耳をなくしている)

このように若いものに手紙が来るのに、泰安オヂサマにはさっぱり来ない。オヂサマはせせせと葉書を出されるのだが、奥様からの返事が来ないのだ。オヂサマは、最初はフンそんなものといった顔だったが、だんだんいらいらして来られた。手紙の来る度にトバッチリが平井と岩坪に来て「オイコラ、茶を沸かせ」になった。

スカルドに着いても加藤夫人の手紙はない。とうとう怒心頭に発したオヂサマは「もう離縁だ」といきまかれた。ところがカラチに着いてみると手紙がどっさり大使館に来ている。宛名が全部大使館付になっている。オヂサマは離縁宣言を取消し、自分が詳しく宛名を知らせなかったことを忘れて、ポケナス野郎と嬉しそうに夫人からの手紙を読んでおられた。

◎セックス・ノイローゼ

診療をしていると、いろいろな患者や、他の人に出来ないことを経験する。たとえば、女を裸にしたり、家の中に入りこんだり、人にいぬぬ悩みを相談されたりである。

ドンソム村の有力者の家に、バシール大尉と一緒に往診に行ったことがある。大尉も診療には興味を持っていて、通訳したり、時間とみると患者を追払ったりまた簡単な薬を私から貰って、道々施したりしていた。その家に行くと見ると、二階に案内された。そして女房に子供が出来ないから診てくれという。困ったなあと思ったが、他の女は追い出して、大尉と二人で女に向いあった。大尉は通訳せねばならぬといって、堂々と一緒に入って来たのだ。

型通り胸から腹を診た。腹は格好だけでも丁寧にせねばならぬ。月経は正常だし、どこも悪くなさそう。亭主は第一夫人との間に子供があるから大丈夫という。大尉に、この夫人はきつと子宮が悪いのだろうという、それでは子宮も診たらどうだ、とあっさりという。一体、このオッサン子宮の診察はどうするのか知っているのかいな。道具がないから無理だといって、若干のビタミン剤を与えて逃げ出した。下手に医学的良心を満足させて、騒ぎでも持ち上ったらことだ。

村々で必ずといってよいぐらい強精剤を貰いに来るのが二、三人はいた。たいいていものは、異常に真剣な顔付きだ。最初は何をいっているか分からなかったが、ウルドウ語が上手になるにつれて、そんな訴えが直ぐ分かるようになった。手のこぶしをにぎり、肘を股

の所にやり、前腕を上下に動かしてこれかと聞くと、そうだという。

バルチスタンでは、男20歳前後、女12歳前後で結婚するようだ。バラオの名家(宗教関係の家)の息子が葉貫いにドンソムからペリットまでついて来た。スカルドのハイスクールの生徒だ。彼は18歳、英語が大分出来る。道々いろいろ話した。彼は12歳の妻を持っている。未だタッチしたことないと顔を赤くしていた。未だ完全な女になっていないのだろう。帰りにその可愛い奥さんを見せろと言ったが、いやだと頭をふる。一夫多妻の許されたイスラムも経済的理由から一夫一妻に変わりつつある。それでも二妻ぐらいはかなりいる。コーランによれば妻はみな平等に愛してやらねばならぬから、精力の増強は重大な関心事だ。このような精力増強派と、折角嫁さんを貰ったのに遂行出来ないとか、生れて一遍も勃起しないとかのインボテ派がいた。

セックス・ノイローゼは最近の日本の特徴かと思つたら、バルチスタンでも同じだ。いや世界中そうかも知れぬ。

また、姦通が、時には死で報いられる土地柄でも、性的には相当奔放らしい。メール・ランナーのルスタンから前小屋が聞き出したところによると、彼はランナーの仕事の途中でもチョコチョコつまみ食いしたそう。夜、女に会えば、殆んど話合いが成立する。ただし、他人に見つかると危いと言っていた。当り前の話だ。彼の脛に生傷があった。見つかって逃げる時に出来たものだとこの色男は自慢げだった。

アシスタント・コックのハッサンは増強派だった。彼はがさつだが、力も強くよく働く男だった。帰りのキャラバンで、彼の村も近くなったところ、ドクター、ダワイ・デド(薬下さい)と言って来た。ハハンと思い手を例の如く上下させてこれかと言うと、そうです、という。彼は嫁さんは一人、子供は二人だ。お前みたいにタクラ(強い)なのが飲んだら身体に悪いぞと言ったが聞かない。機会がある毎にいう。ルスタンの例も聞いていたので、彼がもっと強くなりた理由にも充分同情した。カバルーで別れる時、アリナミン30錠程、寝る前に飲めよ、と言ってお土産に渡してやった。

もっと切実な訴えも聞いた。帰りにバラオという村に泊った。村の至る所に、澄み切った冷たい水が流れていて、杏やリンゴの多いきれいな村だった。ここは、小間使いに連れて行った双児の兄弟の村である。兄弟も早速出て来て、通訳や使走りに働いた。夜、次から次に押しかける病人をなんとか片付けてほっとしていると二人がやって来た。インジェクションをしてくれという。何のインジェクションかと聞くと、丈夫になる注射をという。この双児は年上の女房がいると言っていた。よく聞きただすと、自分達のペニスが小

さいので大きくしたいと言うのだ。これは新しい訴えだ。女房がそう言ったのかと聞くと、イエス、と答える。こんな子供に、残酷な女房どもだ。お前達は未だ若い、今は小さくともすぐ大きくなる。たとえ小さくとも、技術さえうまくやれば、女性に充分満足を与え得るのだ。こう説明したいのだが、こんなデリケートな問題は、とうていウルドウでいい現わせない。英、ウルドウ、チャンボンで一息懸命説明してやったがなんとしても理解しない。面倒だからペニスに1本注射をぶちこもうかと思つたが止めて、大きくなる秘薬で我慢させた。それでも彼等は出発の朝まで、インジェクションといていた。

◎他人の女房によるしくと云ってはいけな

バラオの村を発つ時、双児の兄弟は村はづれまで見送りに来ていた。二人もわれわれについて行きかけたのだが、余り仕事もないのでヘダールとシェラリーだけで充分というので備わなかった。

別れる時、私は先を一人で歩いていて、弟のマホマッコに別れの挨拶をした。「サラマレクム、トウマリ・ビビコ サラマレクム ボロナ。」(さようなら、お前の奥さんにもよろしく)私は彼を悩ます奥さんとうまくやりなよという心遣いも含めていった。彼は一瞬妙な顔をしたが、サラマレクムと手を振った。

少し離れて上尾が、ヘダールを連れて歩いていた。上尾もこの若い亭主をいたわった。日本人としては極く普通のことだ。「トウマリ・ビビコ サラマレクム ボロナ。」これを聞いたヘダールが手を打って笑い出した。「ウエオサーブ マホマッコ キ ビビコ サラマレクム ボラ。」(上尾サーブがマホマッコの嫁さんによろしくといったぞ)そして他のハイポーター達にふれまわった。こちらは何のことか分らぬので、マホッド・アリキ ビビコ サラーム、とかいうとみな声を立てて笑う。サーダーに聞くと、苦笑いしてこれは悪い言葉だからいってはいかぬという。理由は詳しく説明しない。どうもこの言葉は、女房を寝取った挨拶ではないかということになった。それから冗談に使って、ハイポーターやクーリーと笑いあった。パキスタン全般にこうなの分らぬが、奥様によろしくとは余り使わぬ方がよいようだ。

◎酒に恨みはかずかずござる

準備の時、食糧に関するいろいろのアンケートを取った。その中に、「あなたは酒類をどれだけ欲するか」という項目があった。その答によると、最高は一週にウィスキー1本、最低は全行程で1本だった。当然最高の人間は非難された。いろいろ検討して、結局、サントリー1打、ドライジン1打を準備した。サントリーもジンも各一本を残して他は全部ポリエチ

レンの瓶にうつしかえた。泰安副隊長は南極の残りのポリエチレン入ウィスキーを飲んだ時、味が変わっていたと反対された。ガラス瓶の重量がおしかつたので黙って強行した。食卓に出す時、ガラス瓶にうつしかえたら分るまいという腹だった。この外に船組が小遣いを節約して、ジョニー・ウォーカーを1打、ペナンより買って来た。それに、カラチの大使館より、林ドクターの診察代にもらった缶ビール2打が加わった。出発前に岩坪が忠告した。"飲み助は何かかんと理由をつけて飲みたがる。無制限に出していたら、たちまち無くなる。テーブルには瓶に7分目位入れて出したがよい。"と。

成程、実際理由がいろいろつくものである。それに思わぬ事が起こった。こちらは泰安、高村、四手井の順にビッドスリーをマークしていたのだが、谷、それに上尾が、実によく飲む。岩坪と私がひやひやしているのを尻目に、出しただけは無くなる。それでも、ジョニー・ウォーカーを飲んでいる間は、こちらも、準備外のものを使っている気であったので、余り心配しなかった。

ところがゴマで荷物をあけて、ジンと、ウィスキーを試して驚いた。ジンの2/3、ウィスキーの1/2が臭くて飲めないのである。ポリエチレンの瓶に何らかの欠点があったのだ。さすがの谷、高村も飲めぬという。泣く泣くすててしまった。これから後は食糧係は、お祝いの度に顔は微笑みに変わった。

ピラフォンド・ラ輸送の時、先行の加藤隊に対し、私が最初失敗して、食糧、タバコ、酒に不自由をかけた時期があった。それで連絡に来た上尾に、特に、タバコとジョニー・ウォーカー1本(実はサントリー)、ジン1本をロロフォンドからシアチェンに持って行って貰った。ところがどうした事か、上尾がシアチェンに着いた時、ジョニー・ウォーカーはほとんど空になっていた。私は、2本送ったから大丈夫と信じていた。あとでA.B.C.でこの話を聞き、また、ジンも一晩で飲んでしまった話を聞いて啞然としてしまった。泰安は10日も酒無しだったのは、生れて始めてだぞと恐い顔である。

A.B.C.に全員揃ってお祝いの乾杯という事になった。私はサントリーを半分より少し多い目に入れて出して来た。皆に配られた。副隊長の音頭で乾杯。ところが、みな、これはなんだとロ々に言い出した。私ものんでみると甘い。しまった。梅酒だった。私が自家製の少し暑さ負けした時に飲もうとポリエチレンに入れたのを持って来ていた。それを間違ってガラス瓶に入れてしまったのだ。副隊長は10日も酒なしの上に乾杯に梅酒とは何事ぞ、冷酷無情な食糧係とぼやかれる。恐縮の至りである。しかし、こんな時、心から恐縮してはいけぬ。恐縮の仕通しでは食糧係はつと

まらない。

登頂が成功してA.B.C.に引揚げて来た時ビールで乾杯という事になった。このビールも反対の声の蔭にかくされて、何時の間にかにA.B.C.に来ていた。缶切りで、ボンと一つ穴を開けると勢いよく吹き出して、空になった。これではならじと次のは下に鍋を置いて開けた途端に逆にして、鍋に吹きこました。これも泡だらけで飲めたものでない。遂に智者の飲んべえが名案を考えついた。缶切二つで穴を同時に二つあけるとほとんど吹き出さない。次々全部あけられた。正面のシアチェン氷河、テラムシエール氷河、テラム・カンリをながめて乾杯。5000mの高度では、気圧の低さに反比例して酔いはよく廻るようだ、なんともいえぬうまいビールだった。

イスラム教徒は勿論禁酒だ。フンザのイスマイリ派は果実酒を飲むらしい。これを、フンザ・パニ(フンザ水)という。ハンニヤ湯とでもいうところか。バルチスタンにも、スカルドにはあるような話を聞いたが手に入れるのはむづかしい。三人寄ればイスラム教徒の諺のように実に他人の事を気にするのだ。帰路、杏がワンサとなっていて私達を楽しませた。フンザ・パニを作ってやろうということになった。ポリエチレン瓶に、副隊長と、谷、齊藤が杏の実を入れた。谷が最初だった。一日もするとどんどん発酵する。蓋を開けると吹き出す。蓋をしめておいた谷のポリエチレン瓶が接着面から割れてしまった。副隊長はガラス瓶に入れて栓が飛ばぬように針金で巻けばよいといい、手ずからジョニー・ウォーカーの空びんに移して、ぐるぐる巻きに瓶をしばった。カパルーである夜突然爆発音があつた。何か分らなかった。翌朝、谷が杏を入れたジョニー・ウォーカーの瓶がグシャグシャになっているのを見つけた。苦心が炭酸ガスの泡になってしまったのだ。これを見てから、副隊長と私は1日3回蓋をあけてガスを抜くことにした。それもそろそろとである。スカルド、ピンデイ、カラチとガス抜きはつづいた。帰りの飛行機の中では、副隊長はジョニー・ウォーカーの瓶につめかえて、紙の栓をして、手にぶら下げ私は相変わらず、シューシューとポリエチレン瓶のガス抜きをやっていた。

羽田の税関で酒類でやられたらほかすつもりだったが無事通過した。このようにして作り、持って来た、世界の珍酒は2人の家で静かに熟成しつつある。左右田農学博士より聞いたところによると、果実酒を作る時は瓶の口をわらで栓をしておいたらよいとのことである。将来フンザ・パニを作る人は、そうしたらよいだろう。味は勿論格別である。

サルトロの反省

—三連戦の兵卒として—

岩 坪 五 郎

いつも事なかれ主義で、おこられん程度に、ちょっとほめられる程度に仕事して、三連戦した。こういう者にとって、隊の批判を書くのは、実に損な役割である。しかしまあ書きましよう。それがせめてもの罪滅ぼしになるかもしれない。おこられてもともと。ほめられてまたいくことになればもっけのさいわい。

サルトロ隊のAACKにおける位置。熱風吹きすさぶ西パキスタンの大沙漠で、チェナブ(Chenab)急行の窓をあげはなし、からだ中の水けをとられて、半ミイラ化したのはチョゴリザの話。こんどは全隊員10名中始めて熱帯へきたのはわずか3名。しかし彼らとて乾燥熱帯では毛布にくるまっているのが、いちばん涼しいことなど常識中の常識と、身につけている。

1955年、日本最初のカラコロム隊は、探検の第一歩としてすすんでかわつたものを食べたり、経験したりした。58年チョゴリザ隊は、全精力を山登りにつぎこむため危険性のあるかもしれぬことはすべて禁じた。露店のカバーツを食べたり、賃貸しのラクダに乗ったりすること。

しかし今回、英語は相かわらずへたとしても、ほんとうの外国へ来たとの感じは、全員に見あたらぬ。せいぜい準外国である。してもよいこと、わるいこと、みな分っているのだ。始めての人もいるが、AACKそのものがすでにパキスタン—カラコロムには、なれてしまった。

富士山に何度登ってもそれぞれおもしろい。しかし最初のときとすこし違うことはたしかだ。チョゴリザの次に、もしK₂に、あるいはナンガ・パルバット(Nanga Parbat)、クンヤン・キッシュ(Kunyan Kish)でもよい。そうしたら、気分はだいぶ違つたろう。傾斜は急、峠越え、シアチェン氷河、いろいろ相異はある。しかし高さはほぼ同じで、雪は深く、山容はキレイ、メンバー構成もほとんど変わらない。サルトロ登頂はチョゴリザ、ノジャックに続くダメ押しのとどめの一刺しというべきだろう。もちろん外部から、または歴史的にみれば素晴らしい戦果だろう。しかし一兵卒としては、北支にいたが中支へ移動したようなものだ。

[ジョイントについて]

目的のためには手段をえらばず。ジョイントのつまらなかつたことだけが、頭にあるがこのたびのことはお国を憂う一兵卒として賛成である。ただ今後、少しでもより快適にするために反省し、策を練るのは必要

だ。今回はむこうは完全にしろとだった。それでもあれだけなまいきで、あつかましくて、強引だった。こんど、さらにどこかとジョイントして経験をつけてきたら実力は余り進歩しないだろうが、どうなるかと、おもうと空恐ろしい。彼らは口を揃えて、日本隊はすばらしい、優秀だ、しんせつだ、とほめちぎる。それはぬけさくで、お人よしで、あまちょろくて、御しやすい、ととるのはひがみだらうか。彼らはイギリス人を余りよくいわない。しかし、彼らがイギリス人の前にでたときの態度、イギリス人が今までその植民政策で示した実績を考へるとき、やはりこのようにひがまざるをえないのではなからうか。

それでは、どうすればよいか。ジョイントなどしないにこしたことはない。しかし、今後ジョイントでなければ行けないばあいがますますふえてくるだろう。まず、英語に強くなることである。もちろん、いくら練習しても、半分英語で生活している彼らよりうまくなることはむりである。しかし、自分の主張は通さねばならない。エクスペディションにおける、沈黙は生きていることを放棄するにひとしい。ことばが通じないのはわれわれだけでなく、彼らにとってもお互いに不愉快である。意思の疎通がなくて、片方がかたがた行動をしてもそれをせめることはむづかしい。誠意をもって接すれば相手もよく感応するだろうが、そんなことで相手を屈服させるのは手間がかかつてしかたがない。そのうえ、そうなるまでにこちらがひっかぶる損害は甚大なものである。

つぎに、われわれがとるべき態度について。どうもわれわれはウエツすぎる。むちゃにしんせつにしたり、フンガイして、そっぽをむいたり。いいかえれば大人げない。それから気が弱い。人の顔を見、自分を犠牲にして他人にしんせつにすることが多すぎる。日本人は感情がこまやかだからかもしれないが、全体をよんだり、計算をしたりが不得手なようだ。キゼンとし、サツウたるところをみせて相手を感心させねばならない。チギンジュンし、いつまでも、相手をまたすようでは、人を指揮指導することはできない。

日本人同志は団結すべきである。われわれが彼らを扱いやすかつた最大の点は、彼らどうしの分裂がはげしかつたからである。したがって、ジョイントの隊はこちら側のチームワームをしんげんに考へる必要がある。相手側をやつつけることばかり書いたが、ウエツで、ソフトで、しんせつな日本人にとってはこれくらい心がけてまだたらぬくらいだからいいだろう。

[メンバー]

メンバー構成は、残念ながら、進歩も変化もないチョゴリザと全く同じである。一人一人、誰の役を誰がすると、あてはめることさえできる。時はたち、それぞれ年をとりAACKもノジャックなどの経験を経て

発展したはずだ。それなのに、何らの変化がないのは、現状維持というより、むしろ後退であるかもしれない。こんなことを書けば、そんなら五郎など当然はずすべきであった、ということになって損だが AACK のためとおもって書いているのだからしかたがない。隊員一人一人をとってみればそれぞれみな持味を活かして活躍し、もしなかったら困るという人たちがばかりである。しかし、いなければ成功しなかったとはいえない。

前述したように、サルトロ遠征に新鮮味がなかった理由のひとつは、この 10 名という人数と、チョゴリザと同じ構成にある。これだけ人数がいるとどうしても仕事が多くなり、粗雑になり、かつ、人のやることに批判的になる。私のようにサボリとして定評をもっているものでさえ、ノジャックのときは、これを自分が見なければ誰もしないで隊全体が困るのだとおもった。若い隊員が、自負と責任をもって、仕事をできるように隊の構成をもっていく。それは隊行動にとっても、また、各隊員の楽しみを増すためにも、重要なことである。

この点、今回も三人もの上層部がいたことはざんねんだ。文珠の智恵と反対の現象がしばしば起こる。私にいわせれば、指揮者はたいていのばあいどちらに進むべきか、箸を倒す役をしてくれればよいものと、おもっている。AACK の兵隊どもはそうとう優秀だから最重要のことがい、たいていそうとんでもないまちがいはしない。つぎつぎと多くの経験をうるにしたがって、皆がそれぞれの意見をもち隊のためにしんげんに、たたかわす。たいへんよいことであるが、どちらでもよいことも多い。また、そのために混乱や、不快感をもよおすことも多いことを考えるべきである。

チョゴリザのばあい、今川氏がやってくれた日本人の連絡将校の役を誰がするかが問題であった。しかし前年、許可をとるために活躍した高村がかちえた実力はたいしたものであった。パキスタン側とこちらの間に、はさまれたり、彼のおかれている特殊な立場のために、苦勞することが多かったが、実際称賛さるべき働きを示した。「かわいい子には旅をさせ」とはよくいったものである。皆それぞれ、自分の立場で、よくがんばり彼だけをほめるのはやや八百長的であるが、一応、彼の活躍は特筆すべきである。やや酒を飲みすぎるくらいはあるが。

連絡将校は、私個人的には決して好感を抱いていないが、有能であったといえるだろう。彼のとったクーリー達の統率方法など、今後参考にすべきことが多い。

「山」自身の性格、タクティックスに対する批判などは、それぞれ書かれるから省略する。簡単にいえばサルトロは登山技術的にはチョゴリザ、ノジャックに

くらべ、傾斜はもっとも急で、積雪も深く、いちばんむつかしい。しかし、作戦的には殆んど頂上まで一直線でルートもだいたい一定しており、用兵もたやすかったとおもう。問題はキャラバン、とくにピラフンド峠越えである。ピラフンド・ウォールを越すルートはなかったから問題はなかった。しかし、やや難かしいとしても近道があったばあい、さらに、隊がもっと小規模で機動性にとんでいたばあい、サルトロの登山史は大きくぬりかえられていただろう。

ざっと登ってざっと降った今回のタクティックスに私は大賛成である。あんな大人数のばあい 2 回も 3 回もアタック隊をだす必要はあるまい。どうしても頂上に登りたいならまた別の山をやればよい。

ただあのばあい、天候が悪かったのと食料など日数の関係でしかたなかったとしても、第三、第四キャンプの間は短かすぎた。ラッシュ戦法の要諦は、キャンプ間を大きく伸ばすことにあるとおもう。

高度順応のために、どんなにスピードを要求されるラッシュ・タクティックスでも、一度くだることがのぞましい。7000 m までは一挙に登ってもよいから、アタックの前に 6000 m でもよいおりにくると、たいへん楽になる。平井と私が CIII から CIV へ、翌朝 3 時におきて、CV へいったとき、二人は、他の連中に較べ疲勞はそうとうはげしかった。もし第 I、第 II アタック隊ともに失敗し、CIII から直接アタックにいったとしたら、その成功はちょっと疑わしい。できるだけ、第二次高度影響のおこる高さに少し突込んでくだり、一挙にアタックという方法をとりたい。

〔装備について〕

さすが経験をほこるわが装備係は、ごくスムーズに装備をととのえた。チョゴリザのときのような取りこし苦勞や、ひとつのものにのみ深入りして他がお留守になることなく、全体をみながら、準備したのは優秀であった。

ただあまり今までの経験をたのんで、おちつきすぎた結果、不親切または誠意がないとおもわれるものが少し目についた。たとえば布張りの分厚くて重いエアマットレス。キャラバン用のテントなど、人夫かがつぐのだから、10 回程遠征に使えるような重いものでもよい。しかしマットレスは最後まで隊員が背中にかついで運ぶものだ。紐でしばるヤッケの首周り。チョゴリザのときのベンリな綿具がつぶれやすかったからといって手で結ばせる手はあるまい。素人がへたにテントの設計などに介入せず、テント屋にまかせて急所だけをおさえ、装備係は細かい点の改良に力を入れてほしい。装備に限らず、何にでもいえることだが、粗いネジと細いネジをうまく使いわけるようにしたい。チョゴリザのときは、細いネジばかり使って精力消耗し、ノジャック、サルトロでは細いネジを使い忘れた

感がある。チョゴリザのときは何もかも始めてだったからたいへんだったが、もうこのふたつのネジを使い分けられるはずだ。

ぜひ改良、発展させてほしい装備類。いつものことながら、氷河上のテントは熱くてたまらない。アルミ箔を使ったフライシートがほしい。ジュラルミン製の長い軟雪用のベグ。たいへんよろしい。オーバ・シュウズ、ずらないように頼みます。氷河上の輸送人夫の足ぬれを予防する簡単な靴カバー。品質の安定した合成樹脂製ブタンガスボトル。

それから、できあがったものはかならず一回装備係が使用または着用してみたい。

〔食料〕

私は食料係でありましたから、批判はやりにくい。大綱はチョゴリザ、ノジャックと同じであるが、芥藤が食料係長となったのでだいぶまいものがふえた。

とくに冷凍真空乾燥による、卵・ネギなどは、特筆すべきである。その他全体的にうまくなった。食料係は、どんどん新しい感覚をもった人が代るべきで、同じのがやっていると定期的な発展はのぞみにくい。主観的なものが食料では支配的だから。カンパンは相かわらず。カンパンをもっと添え物のようにしないかぎり、カンパンだけをうまくすることは無理だろう。チョゴリザのとき、ラーメンとビーフンを朝食で交代につかい、前者が好評だった。しかし、こんどは乾燥米におされ、悪評ふんぶん。乾燥米は味のついていないのがよい。味つきは日がたつにつれて評判がわるくなる。

〔これからの遠征について〕

AACK は、ヒマラヤ経験者数十人をよする大クラブである。これがいちいち挙会一致態勢で準備をし一遠征隊を送りだすのはよほどの遠征だけにしたらどうだろうか。これからは、せいぜい 5、6 人集ってざっさとでていけるようにしたい。それも京都だけでなく、東京在住の、または大阪在住の AACK パーティというのがとてもよいだろう。京都の若手横暴の声をきく。就職好調で、若手の新入り少く京都では同じ顔ぶれが行く行かぬにかかわらず、落第の危険にさらされながらやっている。この状態が続けば AACK は多くのルンペンを抱え、だんだんガラが悪くなり、初めの A の字が肩身せまくなるかもしれない。それを知らながらも、なおまたいきたくさせるのが AACK の長所だろうか。

× × ×

× × ×

サルトロ新兵の言

上尾庄一郎

昨年のサルトロ・カンリ遠征隊に参加して、ヒマラヤ未経験でかつ最若輩の隊員としての自分の経験を反省して書いてみる事にする。

私はこの遠征隊の隊員に選ばれた時、私が AACK の最も若い世代、山岳部により近い世代の代表として選ばれたであろうことはすぐ理解出来た。特に同時に隊員に選ばれた同輩の前小屋はパキスタン留学中であり、かつ、確実に遠征に参加出来るかどうかは不明であったので、私には何か代表としての使命感のようなものさえあった。

その結果、遠征中の基本方針として、登攀に入ってから、特に 7000m 近くの高所で、絶対にバテないようにしよう。仮に頂上に行けなくてももしチャンスが与えられれば十分行けるだけの余裕を残して帰ってこようと決心した。

というのは過去二回の学生遠征隊での登頂の失敗やチョゴリザの経験からヒマラヤでは 30 歳前後が最も強く若いのはダメだということに AACK では決りかかってきていたようで、もし今回、私がバテればそういう結論になり、以後山岳部出たての若い会員は遠征隊に参加出来なくなってしまうと思ったからで、逆に私に高所でも十分の働きが出来れば同世代の若い会員にもより多く遠征隊参加のチャンスが与えられるだろうから、今度の遠征に協力してくれた若い会員や山岳部員に報いる事になると考えた。そしてそのために経験者の話をもととして

- (1) 出来るだけ気苦勞はしないこと。
- (2) 出来るだけ不要の仕事はしないこと。
- (3) 出来るだけ日本の山におけると同じようにすること。

この三点に留意することにした。若い者が弱いといわれる原因が主に以上のような点を守らないことから来ると思ったからだ。

以上は隊員になった時から出発までの考えだったが結局遠征中も変わらず努めて実行に移した。例えば(1)に関してはつまらぬことから怒られても、最初のうちは自分の正当性ばかりに気がつき、しゃくにさわっていつまでも気になるものだったが、次第に馴れて適度に聞き流すことも出来るようになり、たまには怒られるのを期待して話をするようにもなった。(2)に関しては人間は自分が仕事では他人が何もしていないとしゃくにさわり、どうしてもよい仕事でも命令したくなるものなのでそういう場合、先手を打って自分で何か仕事をする事にした。幸い私は写真係だったのでそれを利

用した。また休養は体の調子が良い時でも出来るだけとるように努めた。例えば C₂ を作った日、さらに先への偵察隊に参加しなかったことについて帰国後、谷さんから批判を受けたが、もし偵察隊が二隊に分れ別々のルートを見に行くのだったら私も当然参加したがあの場合全員で一つのルートの偵察は不要と考えあえてテントに残った。

③については使命感のようなものを持つこととすでに矛盾しているが、とにかく海外遠征ということ意識しすぎて能力以上のことまで手を出さないように努めた。町では出る幕がないのでその分を山で取り返そうなどと思わないようにした。

結果的には最終キャンプまで行き、かつ十分元気だったので、もし許可が得られれば頂上まで行けたと思う。その点初めの基本方針は達したことになる。しかしそれは上記の結果がもたらしたというよりは、もっと別の理由によるというよりよいだろう。

まず第一にすでにいわれている如く、高度順応が完全に行なわれたこと。これは 5500m の峠を越え、更に 5000m 近くで一月近く生活したあとで登攀にかかったためだ。

次に高所の滞在日数が割合少なかったことで、急峻な地型と登山法による。

更に隊の行動が計画通りに運び、余裕をもって登攀に当ることが出来たための心理的な余裕と自信。また同輩の前小屋が病後のため十分な活動が出来ないのでそれを補おうとする気持が働いたこと。またチョゴリザでは最若輩であった高村、岩坪両隊員が今回では隊

運営の中心となって活動しているので隊の重要事項も耳に入り、それから来る責任感、更に全隊員が最も若輩である私をかばうようにしてくれたこと、特に林登攀隊長はかつての自分の経験を考えてかその傾向が強かったと思う。

またパキスタン側隊員の能力がわれわれに比べ数段劣っていたので、それに調子を合わせるために生ずる余裕。以上のような理由をあげることが出来る。

とにかく今回の遠征では若い者の方が弱いという結果にはならなかったのではあるが、今や山岳部現役のみによるインドラサン (Indrasan) 遠征隊の見事な成功の例が出来たので、今後は高所登攀能力に関して隊員の年齢について以前のような議論はされなくなるだろう。

しかし、遠征全期間を通じての総合的能力という点に関しては話は別ではあるが、今回の遠征では年齢とは関係なしという印象を受けた。

私自身遠征を終って特に反省している点は前記のようなことを気にするあまり、自分で自分の行動を限定し、消極的にしてしまったことで、これは探検隊でなく登山隊の場合におちいりがちだとは思いますが、今後、もしまた遠征に参加する機会があれば、今度の経験を基にして、もっとのびのびと行動しようと思う。高所影響に対する恐怖心は経験者の話を聞いていただけではとれるものではなく、実際に経験してみてもその程度を知り初めて解消するものであることをつくづく実感した。これがヒマラヤ経験者が未経験者にくらべて持ちうるほとんど唯一の有利なことがらだろう。

木 旺 講 座 —その2—

アッサム・ヒマラヤ入門

高 橋 旨 象

*この講座は毎月一回夜 AACK ルームにおいて、主として若手を相手に講せられた講義に若干手を加えたものである。

I はじめに

アッサム・ヒマラヤ (Assam Himalaya) においては、偵察を含めて登山らしい登山はほとんどおこなわれていない。それはこの地域の苛酷な自然が山への接近を容易に許さないことにもよるが、何よりもこの地域の政治状況の悪さによるものであろう。第二次大戦前に測量や博物学的調査を目的としてアッサム山岳地帯に入りこんだ人々を悩ませた山岳ジャングルと未開民族には、インド政府の辺境統治の強化と3次にわたる5か年計画の施行により、ようやく文明が流れ始めている。しかし、チベット (Tibet) を治下に置いた中国勢力との接触は、多年にわたる国境紛争となって現われ、一向に好転のきざしを見せていない。ブータン (Bhutan) においても事情は同様である。外交権をインドに委譲し、保護国となっているブータンは、インドにとっていわば中国勢力の防波堤であり、他国にふれられたくない存在なのであろう。

アッサム・ヒマラヤの山々が、ブータンにおいてはチベットとの国境線上にたつたり、アッサムにおいては中国のマクマホン・ライン (MacMahon Line) 拒否により、チベット領内に引き入れられている現状は、ただちに行動に結びつく対象としてアッサム・ヒマラヤの登山と探検を考えることを不可能にしている。ソ連との対立により、中国がさらに孤立化の道を辿るとすれば、事情はますます悪くなる一方であろう。

だからといって、アッサム・ヒマラヤの登山と探検を全く不可能なものとして、関心を寄せないまま放置しておくべきではない。それに少しでも目を向けていくために、まずここでは、ありふれた教科書的なものではあるが、アッサム・ヒマラヤについての知識を整理することからはじめ、それを今後の研究の第一歩としたい。専門家にとってはまことにチャチなものではあるが、私を含めてあくまで初心者を対象として書いた。その点をご了承願いたい。

アッサム・ヒマラヤは約 290 km にわたってブータンの北限を形成し、さらに約 400 km アッサムの北限を作っている。このように広い範囲に及んでいるの

で、便宜上西部アッサム・ヒマラヤ(ブータン)と東部アッサム・ヒマラヤを区別し、章を分けて述べていきたい。

II 西部アッサム・ヒマラヤ(ブータン)

Bhutan という名はブータン人のつけたものではなく、インド人がつけた名を英国人がとったものらしい。インド人はチベットを Bhot といい、チベット人らしい人間を Bhotiya とか Bhutea とか呼んでいるからである。ブータン人は国の名を Druk-yul (Druk は電雷、竜。yul は村、国を指す。)と呼んでいる。

ブータンは面積約 50,000km²(九州は約 42,000km²)、人口 650,000 (北九州市福岡区とほぼ同じ)、したがって 13人/km² の人口密度を有する国で、その広がり東西約 300 km、南北約 140 km² である。アモ・チュウ (Amo Chu, Chu はチベット語で川の意)、ウオン・チュウ (Wang C.), モ・チュウ (Mo C.), トロンサ・チュウ (Tronsa C.), ブムタン・チュウ (Bumthang C.), クル・チュウ (Kuru C.) のチベットあるいはブータンに水源を発する溪谷が、いずれも南下して中流では小さい河岸段丘を作っている。これらの溪谷は、ヒマラヤ前山地帯を切断してヒンドスタン高原に出、ブラーマプトラ河 (Brahmaputra R.) に流れこんでいる。この 7000 m にわたる垂直的構造がこの国の性格を規定する重要なものとなっている。

以上は「新世界地理 5」における川喜田氏の記述による。⁽¹⁾ さらに同氏によると、「この地形上の特色は、気候と植生上の性格を加えて、この国の人文的性格と密接な関係を持っている。すなわち、この国はベンガル湾から北上するモンスーンの影響を受け、世界一の多雨地帯たる東ヒマラヤを占める。その多湿な森林におおわれた山地の性格は、この地域にのみ分布するミタン (Mithan) という変った牛が、またブータンにみられることにもうかがわれる。……山地がヒンドスタン平原にのぞむ山麓地帯はデュアル (Duar) と呼ばれる。そこは熱帯性の高温に加えるに、高温期の夏半年はまた雨期でもある。低湿と相まって、インド中でも不健康なおそるべき悪疫流行地帯である。……熱帯

性のジャラソウジュ (*Shorea robusta*) やフタバガキ科 (*Dipterocarpaceae*) の喬木が亭々と密林をなし、そこはヒヨウ、トラ、サイ、ゾウをはじめ、シカやイノシシのすみかとなっている。……このディユアル低地からヒマラヤ前山丘陵を上っていくと千数百メートルの高度で暖温帯性の照葉樹林帯に移行する。日本のそれに似て、常緑カン類やクリガシ属 (*Castanopsis*) の喬木から成る。こうしてブータンのヒマラヤ前山は、山頂まで見渡す限りの喬木におおわれている。湿度は多く、樹木の枝や幹には無数の蘚苔類がぶら下る蘚苔林 (*moss forest*) の光景もみられる。雨期にはほとんど交通が絶するほどで、山ヒルの襲撃がもっともはなはだしいのもこのあたりである。したがって、ブータン南部のこの密林地帯こそは、この国をインドの侵略から守ってきた防衛の壁でもあった。また同時に北方から南下したチベット人にも同化されない、ブータンで最末開の人々の隠れ家ともなってきた。このような不健康な条件は、前山山地の奥のブータン中枢部についても、多湿で高度の低い河谷には作用している。たとえば昔のブータンの首府であったプナカ (*Punakha*) なども、今では夏にはマラリヤの害のため人がほとんど住まなくなっているのである。北部の高地地方および中央部については、「5000m内外からは、万年雪の世界となっている。そしてチベットとの交通を阻む壁となってきた。しかし、それより幾分低い高度には数か所の高い峠があり、高地になれたチベット系人民は、両国の間を案外楽々と往復している。過去の氷河地形、なかんずく圏谷地形はブータンではよく保存されて残っている。この高地はまた多量の雨雪と相まって高山帯に至るまで牧草の繁茂は良好である。ブータン人の多くによって、夏牧場に利用されている。その下にはモミ、トウヒ、ツガ、ビャクシン、カンパ類などの亜高山帯森林もよく繁るが、ブータンは牧草地にめぐまれた国である。この高低寒暖両極の中間に、ブータンの中枢をなす温帯ないし冷温帯があるが、このうち特に注目すべきは南流する数個の河谷と、それに沿う河岸段丘地帯である。ここは不思議にも河谷沿いに気候が乾燥し、大陸性を帯び、マツ林その他の乾燥林がひろがっている。その好適な気候と相まって、ここがブータンの最重要中心地帯であった。……」

ブータンの自然の概観はこのようなものである。つぎにブータンの歴史を、同じく「新世界地理5」と中尾氏の「秘境ブータン」をもとにして述べていこう。ブータンにはもともとヒマラヤ固有の民族がいたらしいが、9世紀頃に北方からチベット族が南下して彼等を征服し、彼等と混血して今日のブータン人を作ったといわれている。そしてチベット人がヒマラヤを越えて南に進出して来るのは、ブータンだけの歴史ではなく、シッキムでもネパールでもみられている。17世紀

には妖僧ラム・サブト (*Lam Sabto*) がプナカを中心として勢力を伸ばし、ブータン全土をラマ教と化して活仏ダルマ・ラジア (*Dalma Raja*) を名乗り、全ブータンの精神的指導者となって、その後継ぎは生れかわりの転生の活仏によって継がれていった。そして活仏の秘書であるデブ・ラジア (*Deb Rajia*) がブータンの9郡の領主から選ばれ、一般政策をとりおこなっていた。このデブ・ラジアの推せん交代について各郡長はたがいに兵力をもって争い、国民の平和は常に乱れていた。

東インド会社の力により、インドに勢力を張りだしていた英国が、こうしたブータンという国の存在に気がついたのは1722年のことであった。当時まだ英国の支配権の及ばなかったブータン南方のヒンドスタン平原にあったクーチ・ベハール (*Cooch Behar*) 王国が、突然ヒマラヤの奥のジャングルから現われたブータン人の大襲撃を受け、国内は散々に荒され、王をはじめ多数の人民が捕虜となって連れ去られた。もっとも、東ヒマラヤの未開種族の中には、平野部地方を自分達の縄張りと考えて、後来の諸民族から貢献をとる風習があったようであり、この襲撃を理由のない単なる掠奪強盗とみるのはあやまっている。英国は軍隊を派遣して領土をとり返し、ブータンと講和をして王の身柄をとり返したが、その後もブータン人の襲撃はやまず、ついに1864~65年のブータン戦争へと発展した。南ブータンのジャングルでおこなわれたこの戦争は英軍にとって並大抵のものではなかったが、ついにブータンの活仏ダルマ・ラジアとの間に平和条約が結ばれた。この条約の結果、ブータンはチベットを除く諸外国との外交権を英国にゆずり渡すことになり、やがてブータンはチベット以外の国に対して鎖国をしてしまうことになった。一方、国内では長い戦国時代を経て、西方のパロ (*Paro*) 郡と中部のトロンサ (*Tronasa*) 郡が台頭してきた。1902~1904年に英国がヤングハズバンド (*Younghusband*) を使節としてチベットへ軍隊を派遣したとき、ブータンのチベット外交使節ウゲン・ワンチュック (*Ugyen Wangchuck*) は、ダライ・ラマ (*Dalai Lama*) と英国との講和締結に並々ならぬ貢献をした。これにより彼の勢力はますます国内に高まり、ついに1907年ブータン歴史上はじめての統一王国の世襲の王位に即位することになった。彼はダルマ・ラジアの支配をしりぞけて、各郡の郡長を任命制にあらため、独立国としての体裁をととのえた。今の王はその孫にあたる。一方、パロ郡の郡長の家柄はそれらの変動を通りぬけて、インドのカリンポン (*Kalingpong*) に住宅を持ち、ブータン人として最初の英国風教養を受け、今の総理大臣家となった。現在両家は親戚関係になっている。

1910年英国はブータンの統一を契機として、ブータ

ン戦争後に締結した条約をさらに強固なものにあらためた。以前の条約はブータンに中国の侵略がおこっても、英国は手を出せないものであったからである。ブータンは外交権を英国に委譲し、代償として英国は多額の年金をブータンにあたえ、内政には一切干渉しないというこの条約は現在そのままインドに引きつがれている。中国のブータンへの干渉を英国が怖れていたのは次のような見通しからであった。第1は中国がチベットを属国視していたからであり、第2はチベットがブータンを属国とみなしていたからである。事実、チベットは5年毎に北京へ朝貢使を送り、ブータンは毎年ラサ (*Lhasa*) へ年金を送っていたが、前者はこれを俗人の援助を受けていることへの礼であり、後者はラマ教の首長に対する宗教上の礼物であると考え、自らを属国であるとは思っていなかった。とはいえ、このような既成事実をもとにして、中国がブータンをも自らの属国とみなして干渉することを英国は恐れたのであった。実際、未開地が多く人口密度の少ないブータンに中国人が移住して来れば、政治的発言力を得る可能性は大いにあり、米を必要としながら生産できないチベットへの最大の米供給地であるブータンを抑えれば、中国がチベットを支配しやすくなることは明白であった。

こうした英国の保護政策によって、ブータンには平和な状態が続き、1951年中国との協定により、チベットが中国内の自治領となった現在も、インドの保護国として存在し続けている。しかし、インドの西北部におこっている中国との国境紛争が一服すれば、ネパールやブータンも両大国にはさまれて、押し寄せる近代化の波とともに、深刻な悩みを持つことであろう。

このような自然と歴史を持つ封鎖的なブータンに入りこんだ文明国人の数は少なく、ブータン戦争に従軍した英軍将校を除いて、今までに約30人といわれている。つぎにそれらの人の足跡を追ってみよう。

ヨーロッパ人ではじめてブータンへ入ったのはイエズス会修士のドイツ人カセラ (*Casella*) とカブラル (*Cabral*) で1628年のことである。彼等はアッサムのクーチ・ベハール王国を経て、ウオン・チュウに沿って、パロ・ゾン (*Dzong*, 城の意, 地方官がいる) に到着し、歓待を受けている (歓待されなかったという説もある⁽¹⁾)。その後彼等はトレモ・ラ (*Tremo La, La* は峠) を越えてチュンビ (*Chumbi*) 渓谷に入り、チベットに達した。1774年には東インド会社のボーグル (*Bogle*) がデブ・ラジアへの交易使節としてカセラらとほぼ同じ道を通り、パロ・ゾンに行っている⁽⁴⁾。彼はチベットのパンチェン・ラマ (*Panchen Lama*) とも貿易問題を討議すべく、チベットのシガツツエ (*Shigatse*) に行き、チベットに入った最初の英国人となった。このとき医師として随行したハミルトン (*Hamil-*

ton) は、1776、1777年の2回当時の首府プナカへ旅行している⁽³⁾。1783年のクーチ・ベハール襲撃事件の際の英国使節ターナー (*Turner*) 大尉もカセラらと同じコースをとっている⁽³⁾。1837年には植物学者のグリフス (*Griffith*) が野生の茶を求めて入っている⁽²⁾。

測量のための踏査を目的としてブータンに入った最初の人間は、1885~1886年にかけてモ・チュウおよびブムタン・チュウの流域を歩いたパンディット (*Pandit*)、リンジン・ナムギャル (*Rinjin Namgyal*) であった⁽³⁾。当時英国はチベットを支配下に入れる仕事に従事しており、チベットの地図作成が大きな問題となっていたが、英国人が国境付近の調査をすることは許されていなかった。そこで彼等はインド人やチベット人あるいはヒマラヤ山地の住民を養成して探検家とし、このヴェールを取り除こうとしたのである。インド医療局のウオデル (*Waddel*) 中佐の叙述によれば、「英国政府が、おこりうべき不慮の事態にそなえて、インドの国境から数百マイルも先にあるラマの国の広大な未知の領域の信頼できる地図を作ろうと思ったとき、その秘密調査スパイとして、大部分はチベット人を雇わなければならなかったが、これらのものは帰化した英国臣民としてヒマラヤ山脈のこちら側に定住していたのであり、その蒙古人的風貌は、その偽装の助けになった。——(彼等)は分光羅針盤 (筆者註、トランシットのこらしい) を使い、道程をはかり、地図を読み、六分儀を読み、恒星を認知し、高度を知るため沸騰寒暖計を使用する等その訓練を受けた——ナイン・シング (*Nain Singh*) は、ラダク (*Ladakh*) の商人に化け——ほとんどつねに、その祈禱車と珠数にかくれて彼の調査をなしとげた。彼はだれかが接近してくるのを見るとすぐ、その祈禱車を回しはじめるのだったが、りっぱな仏教徒ならばだれでも、そうしている時は宗教的思索にふけっているものと見られるのであるから妨害されることはほとんどなかった。彼の祈禱車には普通の祈禱用の巻物のかわりに、各地点の間の角度や町と町との間の歩数などを記録する細長い紙が入っていた。また後になってからは、それがつねに税関の検査をまぬがれたので、羅針盤をかくすことになった。彼の珠数は普通の108個の玉のかわりに、彼の歩数歩数をかぞえるために100個あって、彼は100歩歩くごとに玉を一つ落していった。——」

1906~1908年にはシッキム (*Sikkim*) の政務官のホワイト (*White*) が東部ブータンを旅行し、トラシ・ヤンツェ・チュウ (*Trashi Yangtse C.*) およびクル・チュウを横切ってブムタン地方に入り、困難な氷河の峠モン・ラ・カール・チュン・ラ [*Mon La Kar Chung La, 5316m*, 「秘境ブータン」] に述べられているムナカ・チュウ・ラ (*Munakha chu La*) と同じ。中尾氏の高度計では4900mであった。]を越えて、クラール・カ

ンリ (Kulha Kangri) の近くを通過してチベットに入っている⁽³⁾。1922年にはインド測量局のミード (Meade) 少佐とベイリー (Bailey) 大尉がこのあたりをざっと測量している⁽³⁾。

1933年ダライ・ラマが死亡したとき、パンチェン・ラマは10年前から逃亡した地、青海省におり、中国に接近していた。英国は中国が再びチベットに宗主権を主張することを恐れ、急いでシッキムの政務官のウィリアムソン (Williamson) を団長とする使節団を送った。彼はホワイトと同じくモン・ラ・カール・チュン・ラを越えてラサに到着したが、チベットの高度に耐えることができず、到着早々死んでしまった⁽⁵⁾。このとき英国の博物学者のラッドロウ (Ludlow) とシェリフ (Sheriff) はブタンまでウィリアムソンに同行し、東へ旅を続けてトラン・ヤンツェ・ゾンに達している⁽³⁾。彼等は1934年にも東部ブタンを旅行している⁽³⁾。

このようにして、ブタンに関する知識は徐々にふえてきたが、ブタンの山や氷河はほとんど訪れられぬままであった。

アッサム・ヒマラヤにおける最初にして唯一の登山は1937年英国のチャップマン (Chapman) によって、ブタン西端のチョモラーリ (Chomolhari, 7314m) でおこなわれた^{(3),(4),(6),(7)}。

彼は1936年ダライ・ラマの死亡後英国がウィリアムソンについて送った使節団の書記官としてラサに行き、チュンビ渓谷を通過して帰途この山の巨大なピラミッドを東方に見て登高意欲にとりつかれたのであった。この登山隊は彼のほか、カルカッタの化学工場の技師であったクロフォード (Crawford) と3人のシェルパ、ニマ・トンドウツ (Nima Tondrup), パサン・キクリ (Pasang Kikuli), パサン・シェルパ (Pasang Sherpa) から成っていた。ニマ・トンドウツは1924年のエベレスト、1930年のカンチェンジュンガ、1931年のカメットに、パサン・キクリは1933年のエベレスト、1934年のナンガ・パルバート、その他3度のカンチェンジュンガ遠征に参加した経験者であった。ブタンへの入国許可を得るのに非常な苦勞をしたあげく、一行は1937年5月12日ファリ・ゾン (Pahri D.) に着き、トレモ・ラの北にあるスル・ラ (Sur La) を越えてパロ・チュウの源流に入り、チョモラーリのブタン側からの接近路を偵察した。彼等は山頂から少し離れた地点で南西山稜に続いている南方尾根の一つをルートに選んだ。登攀は、サーブは30kg、シェルパは40kgの荷を背負い、深雪の中を進むという非常に困難なものであった。43歳のトンドウツがまず落伍し、ついで5月20日にはカルカッタから直接来て高度順化が十分でなかったクロフォードが、疲労の激しいパサン・キクリとともに6000mのキャンプから引き返した。チャップマンはパサン・シェルパと

ともに6600mにテントを上げ、5月21日4時30分キャンプを出発し、数多くのステップ・カッティングをくり返して正午過ぎ、7314mの頂上に達した。下降のときパサンがスリップして、2人は120m程斜面を滑落したが、チャップマンの頑張りのおかげにそれ以上の落下を食い止め、2人は3時にキャンプへ帰った。しかし、非常に疲労していた上に、吹雪になり24日まで彼等は下降することができず、やっと25日にヤクの番小屋の避難所に辿りついたのであった。

その後第二次大戦が始まり、文明国人のブタン訪問は途絶えてしまった。なお、1913年には日本人僧侶多田等観がブタンを経てラサへ巡礼しているが、その記録は明らかでない⁽²⁾。また1921年にはロナルドセイ (Ronaldshay) がブタン国王の招待を受けて入国している⁽²⁾。戦後になると、再びブタンへ入国する人は少しずつふえ始めた。ラッドロウやシェリフはカリンボンに居を定めて、ブタンの王家や総理大臣家と親しく交際してたびたびブタンに採集旅行をしていたが、インドの独立による英国勢力の後退にともなうて、彼等もほとんど英国に引きあげてしまい、ブタンへの接触は再びおとろえてしまった。そして1958年になって、中尾氏のブタン旅行がおこなわれた。このとき得られたブタン事情については「秘境ブタン」に詳しいし、中尾氏の話聞くにしくはない。それらをもとにして最後にブタンの山々をざっと眺めてみよう。

チャップマンらが登ったチョモラーリの北東には6590mのクンフウ (Kungphu) がつらなり、リンシー・ラ (Lingshi La) を経てギュ・コン (Gyu Khon), ツリム・コン (Turim Khon), タンドー・コン (Tando Khon) の山々が続いている。これらは100万分の1の英国空軍地図にはない山で、高さは7000~7300m級らしい。正確な測量は勿論されていない。ツリムコン、ギュ・コンから流れ出した氷河の作る典型的なU字氷蝕谷の末端に位置するリンシー・ゾンは3000m以上の高山植物帯の放牧場の山々にはさまれて、氷河研究に好適な所であるといわれている。

ツェンジャ・コン (Tse-jah Khon 6833m) を後方にみて、4800mのシンチェ・ラ (Shinche La) を越しラヤ (Laya) に入ると東にマサ・コン (Masa Khon 7165m), 西にはタカ・コン (Taka Khon 7300m) にはさまれて、6000~7000m級の山々が控えている。ラヤはキャンプ地も広く、物資、食糧の補給力もあり、将来ブタンで本格的な登山がおこなわれるときは、重要な根拠地になるであろう。マサ・コンはブタンの元の首府ブナカから晴天の日にはその白い姿が望まれる山で、ブタンでは聖山視されているチョモラーリについて有名な山である。マサコンからクラール・カンリへと東南東につらなる山脈については、インド

測量局の測量もされていないし、中尾氏もその地域に接近していないので、高い山があるのかどうか分らない。クラール・カンリ (7554m) はヒマラヤ主脈から北へ2日行程張り出しており、国境線上でなくチベット領内にあるようである。モン・ラ・カール・チュン・ラ (ムナカ・チュウ・ラ) から北への下りは大氷河になっており、その水を集めた水が東へ折れまがり、そこへクラール・カンリの南面の氷を集めた大氷河が合流している。峠から北へ下っている氷河の末端にはチベット人の村があるらしい。峠のすぐ西には1922年のミード少佐らの測量で7540m, 7515m および7328mの山々があると報告されているが、英国空軍地図には7480峰が一記録されているだけで、中尾氏もそれらの山々をみていない。いずれにせよクラール・カンリを含めたこれらの山々に近づくにはムナカ・チュウを上らなければならないが、オンディシリン (Ondi-Shiling) から北には大きな村がないので、大部隊では食糧の補給が困難であろう。

現在発行されているブタンの地図は、いずれも誤りだらけであり、地図を頼りにして行程を立ててもとまどうだけである。シェルパを連れて入ることは同じ仏教徒であるから問題にはならないであろうが、極度の貧乏人も乞食もいず、自給自足で安定しているブタン人を、文明への強い要求があるとはいえ、遠征隊の夫夫として集められるかどうか問題であろう。

近代化への道を踏み切りつつあるブタンではあるが、現在の国際情勢の見通しからはブタンの山への遠征は、やはり遠い将来のことといわねばなるまい。しかし、技術指導者として、学術研究を目指す者としてならば、ブタンへの道は今も閉ざされていないのではなかろうか。

III 東部アッサム・ヒマラヤ(アッサム)

東パキスタンに押しやられて、インドの東北部にころうじてつながった逆三角形のアッサム州は、北にブタンとチベット、東にビルマ、西に東パキスタンと、その周囲を四つの国にかこまれている。しかも北は東部アッサム・ヒマラヤに、北東から南西にかけてはナガ丘陵 (Naga Hills) とこれに続くアラカン・ヨマ (Arakan Yoma) 山脈などの山岳地帯に抑えられる一方、その中心部は東北東から西南西につらぬいているブラーマプトラ川の流域の広大な湿地帯によって占められ、山か沼地かどちらかといった地形である。ブラーマプトラ川は長さ600kmにわたって幅のせまい沖積平野を作っており、その南側にはカシ丘陵 (Khasi Hills) を中心とする標高300~1500mの丘陵がひろがっている。

チベットとの境界は長くヒマラヤの稜線におかれ

ていて、現在発行されている地図にもそうしたものが多く、中国の地図では、ブラーマプトラ川の流域地帯にまで引き下げられている。したがってナムチャ・バルワ (Namcha Barwa 7752m) は以前からそうであったが、東部アッサム・ヒマラヤの山々はすべてチベット領、ひいては中国領に引き入れられることになりこの地域へ入りこむことは、ブタンへの入国よりもはるかに困難で、現在は事実上不可能である。

そのことはしばらく忘れて、アッサムの自然と民族をちょっと眺めてみよう。

先に述べたようなアッサムの地形は、必然的に6~9月のモンスーンをまともに受けさせ、この地方を世界的多雨地域の一つとして特徴づけている。ブラーマプトラ川沿岸のシブサガル (Shibsagar) では年雨量2450mm、カシ丘陵斜面のチェラプンジ (Cherrapunji) は10818mmに達し、とくに1861年には20447mmの雨量を記録している。このような気候の植物相および動物相に与える影響はブタンの場合と同様である。しかし、ブタンにみられるような垂直的構造を持っていないので、東北東にのびる山脈の北斜面と南斜面では植生の変化がいちじるしい。降雨は大半南斜面に集中するため、そこでは厚い下生えの間にモクレン、カン、カバ、ジャクナゲなどが、ツル植物やコケ、地衣におおわれて生えている。一方、北斜面では禾本科草本をまばらな下生えとするトウヒ林が続くのみである⁽⁸⁾。このように東部アッサム・ヒマラヤでは南から旅行して峠を越えるごとに、照葉樹林帯と針葉樹林帯が交互に現われて来る。

東部アッサム・ヒマラヤの南側山岳地帯は辺境あるいは未開民族と呼ばれる山地住民の居住地として知られている。アッサムの住民は、その使用する言語によって1) アウストロアジア (Austro-Asia) 語族、2) チベットビルマ (Tibet-Burma) 語族、3) タイ (Tai) 語族、4) インドヨーロッパ (India-Europe) 語族に分けられているが、アッサム北部のこの山地住民はチベットビルマ語族の中の北アッサム群に属するものとされている。チベット系民族がヒマラヤ山脈を越えて南へ押し出して来る傾向のあることは前に述べた。アカ (Akas), ダフラ (Daflas), ミリ (Miris), アボル (Abors), ミジ (Miji), ミシュミ (Mishmi) 族は、英国人の残した記録によれば、野蛮な敵意ある民族であり、アッサムからチベットに入るには、ブタン東部を経由して、ヒマラヤ山脈がマナス川 (Manasu R.) に切断されている地帯からか、それより東のパーレリ川 (Bhareli R.) より北へ峠を越えてゴリョ・チュウ (Gorjo C.) (マナス川の源流の一つ) を横断する以外にないといわれてきた。東部アッサム・ヒマラヤの登山と探検の発展を妨げたのは、たしかにこのような民族事情による面も大きい。現在の事情は明らかではない

が、ブータンの章でも書いたように、英国人の現地住民に対する態度や考えには納得できない面がある。同じチベットビルマ語族でも、南部の丘陵地帯に住んでいるナガ群の住民には、日本軍のインパール (Inphar) 作戦やインド政府の5年計画による交通路の整備などで、文明の流入はかなり急速であろう。東部アッサム・ヒマラヤに入ることが許された場合には、何よりもこの山地住民についての研究が必要である。

つぎに、東部アッサム・ヒマラヤの山を、関連してなされた探検とともにふり返ってみよう。

アッサム・ヒマラヤの最高峰ナムチャ・バルワの名は、その位置を正確に記したベイリー大尉とモースヘッド (Morsehead) 大尉とともによく知られている。しかし、この山を発見したのは彼等ではない。ナムチャ・バルワをはじめ眺めた者として記録に残っているのは、先に述べたバンディットの、ネム・シング (Nem Singh) で、1879年のことである⁽³⁾。ついで同じくバンディットのキントウップ (Kinthup、このときはまだバンディットではなかったが) が1881年に⁽³⁾、また1900年にはインド測量局のロバートソン (Robertson) 大尉が、それぞれこの山を眺めていた。キントウップがこの山をみるまでのいきさつは以下のようであった。

ツァンポー川 (Tsangpo R.) とブラーマプトラ川が同じものであることは、ブータンの章で述べたボグルやターナーをはじめ、多くの探検家によって報告され、インド測量局でもこれをみとめていた。しかし、ヨーロッパの地理学者はこれに疑問を抱いていた。そこでインド測量局は1880年にバンディットのラマ僧をチベットへ派遣し、ツァンポー川を下流へ向って進み、行ける所まで行ってから丸太に印をつけて川へ流すように命じ、一方では人々をアッサムのブラーマプトラ流域の各所に配置して、この丸太の漂着を監視させた。しかし、2年たっても1本の丸太も漂着せず、この監視は打ち切られてしまった。ところが1884年の末になって、ソッキムの山地住民のキントウップというラマ僧の従者であった男が測量局を訪ねて来た。彼の物語によると、彼はそのラマ僧とツァンポー川を屈曲部近くのギャラ (Gyala) まで下ったが、ラマ僧は彼を裏切って奴隷に売り、中国へ行ってしまった。その後彼は脱走し、僧院に身を隠したり、聖地巡礼者に変装したりして川を下り続け、アッサム平野から60kmのところまで到達したが、それ以上は進めず、引き返してチベットを通過して帰って来たのであった。彼の報告は記憶だけに頼ったものであり、それにもとづいて作られた地図は測量局以外では信用されなかった。その後約30年たつて、ベイリーとモースヘッドのツァンポー川の屈曲部の踏査により、キントウップの報告の正確さが立証されたのであった。

ベイリーとモースヘッドのナムチャ・バルワへの接近は1911~1913年にかけてのアッサム・ヒマラヤ最東部地域の一連の測量事業の中でおこなわれたものである⁽³⁾。この測量事業のきっかけとなったのは、1911年3月にサディヤ (Sadiya) の政務補佐官であるウィリアムソン (Williamson, Noel) の一行がアボール族に殺害されたことであつた。インド政府はアボール徴罰隊を送るとともに、この機会を利用してこの地域の測量をおこなつた。

ガンター (Gunter) 大佐とカーディュー (Cardew) 大尉にひきいられた2隊はデイハン川 (Dihang R.) の東にあるミシュミ (Mishmi) 地方、主としてブラーマプトラ川の2大支流であるルーヒト川 (Lahit R.) とディバン川 (Dibang R.) との源流地域とイラワジー川 (Irrawadii R.) の源流地域の地図作成にあつた。なお、デイハン川とはアッサム・ヒマラヤのインド側におけるツァンポー川の、ディバン川およびルーヒト川との合流点までの部分を呼称するものとしてみとめられた名称である。モースヘッドはこのときミシュミの丘陵からナムチャバルワを視測し、さらに接近して眺めるべく翌1913年ベイリーとともに、ディバン川とデイハン川の分水嶺を越えて、ペマコイ (Pemakoi) 地方に入り、ツァンポー川の屈曲部を経て北側からこの山を眺めたのであつた。ツァンポー川をはさんで対しているギャラ・ペリ (Gyala Peri 7150m) はこのとき彼等が発見した山である。

1936年および1938年にはラッドロウ、シェリフおよびテイラー (Taylor) の一行がこの地域に入り、採集旅行をおこなっている。しかし、これらの山の登路については何ら報告されていない。もつとも、テイラーはナムチャ・バルワの北面を撮影している。その写真は雲や前山にさえぎられて、この山の全ぼうをよく伝えていないが、上部はすっきりとしたピラミッド型で顕著な岩尾根を派生させている。この写真からうかがえる限りでは、北面および東に続く主稜線に登路を求めるのは困難で、ナム・ラ (Nam La 5414m) に達して南から主稜線沿いに行く登路に可能性があるのではないかと推測される。テイラーの写真は7月上旬に写されたものであるが、北面はモンスーンの影響をあまり受けないのかあまり雪をつけていない。ギャラ・ペリはヒマラヤ主脈上にある山ではない。この山はチベットのトラドム (Tradom) の東から延々と北部ビルマへとつらなっているニンチェンタンラ (Nynchentangla) 山脈の、イロン・チュウ (Yigronga C.) とギャムダ・チュウ (Gyamda C.) にはさまれた一支脈の末端上に位置している。ナムチャ・バルワより約600m低い、テイラーによる南西の写真を見ると、鏡い山稜を持ち、どっしりとした白銀の山である。ラッドロウはギャラの村から約5km ツァンポー川に沿って

下り、ギャラ・ペリの全容を眺めたが、このときカメラを持っておらず、テイラーが翌日行つたが雲にさえぎられて撮影できなかった。

1935年には北部ビルマの探検で有名なキングドン・ウォード (Kingdon Ward) がツァンポー川屈曲部とつらなつて南東に流れるイロン・チュウを源流まで歩いているが、このとき彼はニンチェンタンラ山脈上に大きな雪の峰を幾つか眺めている。これらの山はナムラ・カルポ (Namla Karpo) 以外は名前も明らかでない。標高は7000mを越えることはないと思われる。

先に述べた1911~1913年の測量事業においては、前述の2隊の他にトレンチャード (Trenchard) 大尉のひきいたアボール測量隊とルイス (Lewis) 大尉にひきいられたスパンシリ川 (Subansiri R.) 源流のダブラおよびミリ地方測量隊があつた⁽³⁾。これら一連の測量事業により、デイハン川の兩岸とスパンシリ川源流に近い山々の位置と高さが測定された。しかし、ナムチャ・バルワから西南西につらなるヒマラヤ主脈はシヨーム川 (Siyom R.)、スパンシリ川およびマナス川によって切断され、7000m以上の高峰は少ない。マナス川の北東流域の東にゴリ・チェン (Gori Chen, 6587m)、カントー (Kangto, 7089m)、ニエギ・カンサン (Nyegi Kansang 7047m) などを数えるのみである。

1935年と1938年にはキングドン・ウォードがパーレリ川を横切り、ポシン・ラ (Poshing La 4019m) およびツエ・ラ (Tse La 4724m) を越えてゴリヨ・チュウを渡り、ツルン・ラ (Tulung La 5229m) でアッサム・ヒマラヤを越えてチベットへ入っている。1939年にはティルマン (Tilman) が3人のシェルバをつけて同じルートでゴリ・チェン・カントー、ニエギ・カンサンの偵察に出かけている。彼等は4月11日チャルデュアル (Charduar) を出発した。1日目のキャンプは海拔わずか150mのジャングル内であつたが、そのとき皆マラリアにかかってしまった。以後たびたびの発作、悪天候、人夫調達の不調に悩まされながらも、5月3日ゴリ・チェンの南東、ゴリヨ・チュウ流域のラップ (Lap 4381m) という村に到着した。ティルマンは偵察のためゴリヨ・チュウを上り、キャンプを設けたが、相変わらずマラリアの発作と悪天候にわざわざいされて何ら偵察をおこなえず、5月26日にはシェルバの1人が死んだため、ほとんど得る所なく帰途についてしまった。このような次第で、アッサム地域の山については、少数の山の位置と標高こそ明らかになっているが、登路や氷河などはほとんど分っていない。しかも現在これらの山々はチベット領に入っており、尋常の手段では手のつけられない状態である。日中友好協会にでも入会して、中国政府をたきつけるか、バンディットや河口慧海師のように、チベット人が中国

人に化けて潜入するなどせぬ限り、いつまでたつても遠いあこがれの地に終わってしまうだろう。ともあれ、アッサム・ヒマラヤが全世界のバイオニア・ワークを目指す人々にとっては、残された数少ない地域の一つであることはいうまでもない。

IV おわりに

アッサム・ヒマラヤという広い地域を対象にしたため、はじめから、まとまりのない原稿になるのは十分承知の上で書いた。機会があれば、つぎには焦点を定めて、政治および民族状況をまはつきりつかんだ、実動に結びつく可能性のあるものを書いてみたい。最後に、本文で参考にした文献と、さらに参照すべき文献をあげておく。

〔参考文献〕

- 1) 川喜田二郎(1961);「新世界地理5・インド・西亜」, 朝倉書店, (東京)
- 2) 中尾佐助(1959);「秘境ブータン」, 毎日新聞社, 東京
- 3) Mason, K. (1955); "Abode of Snow." Rupert Hart-Davis, London, (日本語訳, 田辺主計および望月達夫共訳(1957);「ヒマラヤーその探検と登山の歴史」, 白水社, 東京)
- 4) Winnington, A. (1957); "Tibet, The Record of a Journey," Lawrence and Wishart Ltd., London. [日本語訳, 阿部知二訳(1959);「チベット(上)(下)」, 岩波新書, 東京]
- 5) Mason, K. (1936); Frederick Williamson 1891—1935, Himalayan Journal, VIII; 141—142
- 6) Chapman, S. F. (1938); The Ascent of Chomolhari, H.J. X; 126—144.
- 7) Chapman, S. F. (1937); Chomolhari, Alpine Journal, 49; 203—209.
- 8) Tilman, H. W. (1940); Assam Himalaya unvisited, A. J., 52; 53—62.
- 9) 平凡社(1955);「世界大百科辞典1」(東京)
- 10) 中根千枝(1959);「未開の顔 文明の顔」, 中央公論社, (東京)
- 11) Ludlow, F. (1940); Takpo and Kongbo, S.E. Tibet, H. J., XII; 1—16.
- 12) Ludlow, F. (1938); The Sources of the Subansiri and the Siyom, H.J., X; 1—21.
- 13) Kingdon Ward, F. (1936); Across Southern Tibet, H. J., VIII; 125—129.

〔参照文献〕

- 1) Turner, S. (1800): An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama in Tibet, (London)
- 2) Oldham, R. D. (1894); Mr. Errol Gray's Jour-

- ney from Assam to the Sources of the Irawadi, Geographical Journal, 3 (3); 221—228.
- 3) Waddell, L. A. (1895): The Falls of the Tsangpo and Identity of that River with the Brahmaputra, G.J., 5 (3); 258—260.
- 4) Young, E. C. (1907): A Journey from Yün-Nan to Assam, G. J., 30 (2); 152—180.
- 5) Williamson, Noel (1909): The Lohit-Brahmaputra between Assam and South-Eastern Tibet, November, 1907, to January, 1908, G.J., 34 (4); 363—383.
- 6) White, J. C. (1909): Sikkim and Bhutan, Twenty-one years on the North-east Frontier, 1877—1908, (London)
- 7) —(1910): Journeys in Bhutan, G.J., 35 (1); 18—42.
- 8) Lumsden, D. M. and Noel Williamson (1911): A Journey into the Abor Country, 1909, G. J.; 37 (6); 621—629
- 9) Bailey, F. M. (1912): Journey through a Portion of South-Eastern Tibet and the Mishmi Hills, G. J., 39 (4); 334—347.
- 10) —(1912): Captain Bailey's Paper on "South-Eastern Tibet and the Mishmi Hills", G. J., 40 (6); 657.
- 11) Bentinck, A. (1913): The Abor Expedition, Geographical Results, G. J., 41 (2); 97—114.
- 12) — and C. du Riche Preller (1913): The Tsangpo and the Dihang, G. J., 41 (5); 499—502.
- 13) Preller, C. du Riche (1913): The Tsang-po and the Dihang, G. J., 41 (3); 293—295.
- 14) Bailey, F. M. (1913): The Tsang-po, G.J., 42 (1); 87—88.
- 15) —(1914): Note on the Exploration of the Tsang-po, G. J., 43 (2); 184—186.
- 16) —(1914): Exploration on the Tsang-po or Upper Brahmaputra, G. J., 44 (4); 341—364.
- 17) Preller, C. du Riche (1914): The Tsang-po, G. J., 44 (6); 594—595.
- 18) Survey of India (1914): Records of the Survey of India, IV; Explorations on the North-Eastern Frontier during 1911—12-13, (Calcutta).
- 19) Y. F. E. (1918): Mr. John Claude White, G. J., 51 (6); 407—408.
- 20) Kingdon Ward, F. (1919): On the Possible Prolongation of the Himalayan Axis beyond the Dihang, G.J., 54 (4): 231—241.
- 21) —(1922): The Glaciation of Chinese Tibet, G.J., 59 (5); 363—369.
- 22) —(1923): From the Yangtse to the Irrawaddy, G.J., 62 (1); 6—20.
- 23) Ronaldshay, Earl of (1923): Lands of the Thunderbolt, Sikkim, Chumbi and Bhutan, Costable Co., (London)
- 24) Mason, K. (1923): Kishen Singh and the Indian Explorers, G. J., 62 (6); 429—440.
<日本語訳, 山岳(34年1号)>
- 25) Bailey, F. M. (1924): Through Bhutan and Southern Tibet. Appendix: Meade, H. R. C.: Note on Bhutan and South Tibet Surveys, 1922, G.J., 64 (4); 291—297.
- 26) —(1925): Note on a Portion of the Tsangpo, G.J., 66 (6); 519—522.
- 27) Kingdon Ward, F. (1926): Explorations in South-Eastern Tibet, G. J., 67 (2); 97—123.
- 28) Mills, J. P. (1926): The Assam Burma Frontier, G. J., 67 (4); 289—301.
- 29) Featherstone, B.K. (1926): From Burma to Assam by the Kronjong Pass, G. J., 68 (1); 72—73.
- 30) Kingdon Ward, F. (1927): The Mishni Country, G. J., 69 (3); 287—288.
- 31) Weatherbe, D' Arcy (1927): From Burma to Assam by the Kronjong Pass, G. J., 69 (6); 602—604.
- 32) Rickmers, W. Rickmer (1929): Mountain Names on the Indian Border, G.J., 74 (3); 274—277.
- 33) Kingdon Ward, F. (1929): Botanical Exploration in the Mishmi Hills, H.J., i; 51—59.
- 34) Y., F. E. (1931): Lieut.-Colonel Henry Treise Morsehead, G. J., 78 (3); 320.
- 35) Kingdon Ward, F. (1932): Explorations on the Burma-Tibet Frontier, G. J., 80 (6); 465—483.
- 36) Kaulback, Ronald (1934): The Assam Border of Tibet, G. J., 83 (3); 177—190.
- 37) Kingdon Ward, F. (1934): The Himalaya East of the Tsangpo, G. J., 84(5); 369—397.
- 38) Morris, C. J. (1935): A Journey in Bhutan, G. J., 86 (3); 201—217.
- 39) Kingdon Ward, F. (1936): Botanical and Geographical Explorations in Tibet, 1935, G.J., 88 (5); 385—413.
- 40) Lambert, E. T. D. (1937): From the Brahmaputra to the Chindwin, G. J., 89 (4); 309—326.
- 41) Kaulback, Ronald (1938): A Journey in the

- Salween and Tsangpo Basins, South-Eastern Tibet, G. J., 91 (2): 97—122.
- 42) Chapman, S. F. (1938): The Future of Climbing in Tibet, H. J., X; 171—176.
- 43) Tilman, H. W. (1939): Peaks of the Assam Himalaya, G. J., 94 (5); 402—404.
- 44) Kingdon Ward, F. (1940): Botanical and Geographical Explorations in the Assam Himalaya, G. J., 96 (1); 1—13.
- 45) Bailey, F. M. (1941): The Spelling of Tibetan Place Names, G. J., 97 (2); 120—122.
- 46) Reid, Robert (1944): The Excluded Areas of Assam, G. J., 103 (1.2); 18—29.
- 47) Heaney, G. F. (1952): The Survey of India since the Second World War, G. J., 118 (3); 280—296.
- 48) Kingdon Ward, F. (1953): The Assam Earthquake of 1950, G. J., 119 (2); 169—182.
- 49) — (1955): Aftermath of the Great Assam Earthquake of 1950, G.J., 121 (3); 290—303.
- 50) Lewis, Clinton (1956): "Himalayan Barbary" (Rev.), G. J., 122 (3); 403—404.
- 51) Mills, J. P. (1958): Frank Kingdon Ward, G. J., 124 (3); 422.
- 52) 齊藤吉史(1959):「第三の世界—変貌するインド—」東洋経済新報社, (東京)
- 53) 修道社(1960):「世界の旅」17, 特集・新しい中国, (東京)
- 54) Moraes, F. (1960): "The Revolution in Tibet", Macmillan Company, (New York) <日本語訳, 入江通雄訳(1960):「チベットの反乱」, 時事通信社, (東京)>
- 55) 北京外交社(1960):「中印境界問題文献集」(北京), 日本語(極東書店)
- 56) 北京外交社:(1962)「中印境界問題」(北京), 日本語(極東書店)

会 員 紹 介 (サルトロ遠征隊員)

四手井綱彦博士	岩坪五郎氏
上尾庄一郎氏	平井一正氏
加藤泰安氏	前小屋端氏
谷 泰 氏	高村泰雄氏
芥藤惇生氏	林 一 彦氏

四手井綱彦博士

四手井綱彦博士の紹介には他に適当なかたがたがおられるのに私にお鉢が廻って来たのはどうも腑におち



ない。私自身は四手井博士と山行を共にしたこともないし、都会での日常の交際も、これは可成り長いものであるが、常に先輩対後輩としてのものである。そのような私に博士の真髓が紹介できるわけがない。恐らく他の適当なかたがたは皆様いづれもご多忙のため不適格な私が強引に引き受けさせられたのであろう。したがってこの紹介は博士について私が感心していることの一部を披露させて頂くにすぎないことを予めお断りしておく。

四手井博士は改めて申し上げるまでもなく、実験物理学の泰斗であり、原子工学の権威者である。そしてわが学士山岳会では創始者の一人であり、理論派の総帥と申し上げてよいと思う。学士山岳会の主要メンバーの中には、いわゆる field scientist と laboratory scientist があり、その両者の間には当然のことながら多少なりとも考えかたに相異が見られる。一口にいえば前者は行動的であり、後者は理論的である。一つの目標が与えられた際にそれを達成する手段について両者の間に意見の食い違いが生ずることがよくあったが、目的を達成するためには手段を選ばないという傾向のある行動派に対して、常に道順を踏み筋を通すことを最も強く主張されるのが四手井博士であった。かつては小人数の同志の結合体であった学士山岳会も年

とともに会員数も増加し、したがって会の運営もある程度規定に従って行なわれねばならない時期に来ていると思われる。このようなときに行動派の総帥と目される今西錦司会長のもとに副会長として博士が留任されたことはわが山岳会のためにまことに喜ばしいことといえよう。

四手井博士はサルトロ・カンリ遠征隊長になられるまで長期間京大山岳部長を勤めて学生の面倒をよく見てこられた。今回のインドラサン学生遠征隊が立派な成果をおさめた際には、この計画の実現のために尽された博士の大きな努力があったことはいまでもないし、また続々と優秀な若手会員が輩出するのも山岳部長としての博士の人望・手腕が与っていることは明らかである。

サルトロ・カンリの成功を機として学士山岳会は内外両面にわたって一つの転期にさしかかっているようである。この時期においてサルトロ・カンリ遠征隊長であり、山岳部長であった四手井博士のわが学士山岳会への一層のご尽力を期待するのは私だけではあるまい。(鈴木 信)

上尾庄一郎氏

写真でご覧の通り AACK の若手の集まりである木旺会でもぐっと若い方である。といっても木旺会には



精神年齢と実際の年齢とに差のあるお方が多いので、彼が名実共に若いとは言えないかもしれない。サルトロ遠征では既婚隊員のお世辞にも上品とは言えないノロケ話にも動じなかったそうだし、ロマンストづらもしていないが、女の子の扱いは巧みで、ちゃんと恋人も持っている。小まわりがきて自分の判断でチャカチャカ要領よくやってしまう。ガミガミ言われてもへいへいと丁稚のような返事をするので、小憎らしい奴と評する先輩もいる。サルトロ遠征隊員の最年少者としての彼の感想がこの時報にのせられている。遠征中に来た手紙には同じ写真係の関係もあって、林さんと時々やり合ったが、あまり気にもなりませんと書いていた。という事は大いに気になっていたのかもしれないが、チョゴリザ遠征隊の最年少者よりは年を食っていたので、エクスペディション・シュールレの苦勞はそれ程味わずにすんだらしい。

山岳部では前小屋を助けてサブリーダーをつとめていた。岩登りよし、スキーよしの前小屋とくらべてあまり派手な山行はしていないが、冬の知床、春冬の立山東面など意欲的な山行は多い。よく山行を共にしたが、体力抜群という方でもないの、サルトロではどうかと思っていたが、大いに活躍している。

釣りについては一家言の持主で、AACK では今西さんに次ぐ者はこの俺だとひそかに思っているのかもしれない。馬鹿な魚は相手にしないと、サルトロ遠征で他の隊員が釣りに興じている時も、全然糸を垂れなかったという。

昭和13年京都に生れ、京都で育った。家は先祖代々の薬問屋。父は京大薬学部教授。彼も同じ薬学部大学院博士課程の学生。姉は京都薬大出身。弟は京大医学部在学中と相変らず医薬関係でかためている。

昨年暮れの薬学部の火事で、親子共にこれまでの研究の大半をファイにしてしまった。あまりガッカリした顔もしていないが、やはり相当のショックであったろう。今後の奮起を望んでやまない。(高橋旨象)

加藤泰安氏

三高山岳部と京大旅行部の対抗野球試合があった。旅行部の投手は鈴木信。三高の投手は失念したが、とある回、旅行部の一人の男が折からの直球を大きくヒットした。スワットとボールを追おうとしたとき、そのバッターはやにわに三塁にむかって走り出した。見物人の爆笑。泰安を知ったそもそもの始まりであった。昭和11~12年頃の話である。

泰安といえばその軍服姿を思い出す。その気骨リョーリョーたるころは、入隊後も隊長と意見あわず、ために前線にかり出されて苦勞する。押し出しは立派



で部下の掌握がうまい。中隊長、大隊長として立派に務めあげた。終戦直後、オマワリさんになりたいともらしていたが、どう誤ったか土建会社を創した。しかしこれは彼の自宅を建てただけでつぶれてしまったという話だ。その後シュラフをつくる会社の重役をしたり、またバケツをつくる会社の重役になったりしたが、遠征の度に会社がつぶれたりして、現在は不二音響テレビの社長。

一見大マカでルーズのようだが、性格は非常にきちりした人で、話が屢々面白くなりすぎて人を煙にまく悪癖がある。

昭和10年(1935年)、白頭山遠征に経済学部学生として参加したのを皮切りに、その翌年、旅行部現役を率いて冬の大興安嶺(1936年)、更に翌年の夏、単身ホルンバイルから内モンゴリアへ(1937年)。長い間の憧れの地に入って彼はウジュムチンの土を握ってポロポロ涙を流したというのは有名な話。更に翌年、1938年には木原均教授の率いる内モンゴリア遠征に参加し、自動車旅行ではあったが、東は熱河より北はダブス・ノール、西は百靈廟まで2か月にわたってくまなくかけめぐった。

打ち続く遠征に、休む暇ない体でありながら、どうやってすりぬけたか大学をうまく卒業した後、満州航空に入社する。当時の国策、欧亚連絡航路の開発と、折からの東京オリンピックを機会に、聖火のシルクロードリレーを立案しこれを推進したが戦争のためやむなく中止。それが四半世紀後の今日になって、オリンピックはやつと実現の運びとなつたが、これを知ってもわれわれの仲間が如何に卓抜な idea を持っていたかが良くわかるであろう。戦争の激しくなった後は、カルガン(張河口)の西北研究所の所員として、内蒙の生態学的研究に従う。ときけば異様に思う人があるかも知れぬが、所長は今西錦司、所員に川喜田二郎、中尾佐助、梅棹忠夫ときけば納得がいくであろう。不幸にして同研究所は今西所長を最初の最後として終戦を迎え、寧夏から青海、チベットへの夢は挫折した。

戦後は1953年に第一次マナスル隊、1958年チョゴ

リザ、1962年サルトロと、老の身にムチ打つだけではものたりず、ヤルカンドダリアの彼方、コンロンノ奥に猶若き日の夢を追いつづける。老顔の青年、情熱の士。美人の誉れたかいヒロ子夫人と二男の父。当年52歳。
(梅棹忠夫談・北村泰一筆)

谷 泰 氏

昭和9年福岡生まれ、小倉高校を卒業して文学部入学は昭和27年。西洋史学を専攻し、ルネッサンスに



興味をもち、卒業論文はミケランジェロを扱ったものである。かれの部屋には、さぞかし丸善を儲けさせただろうと思われる数10冊のイタリア語の書物が並んでいて、不細工に吊られた危なげな書棚とともに、みる人を驚かすに充分であった。

35年、人文科学研究員となり、このごろは科学史・社会学・人類学などとりくんで、猛烈な意欲を燃やしている。所の内外を問わず信用は絶大であって、かれの悪口を聞くことはむづかしい。イタリア語、ギリシア語、ラテン語に強いには敬服の他にないが、パキスタンで仕入れてきたあやしげなウルドゥ語で人をまごつかせることがあるのは、よくない癖というべきであろう。

冗談はともかく、当時野球で鳴らした高校の出ではあっても、この人にバットを振らせたら、三星の方へ駆けだすだろうと思われるふしがあるが、俗事一般にはうといお人柄であるという評価がある。かと思うと最新流行のカタカナのポピュラーソングを口ずさんであせんとさせられることもあるのだ。その天真爛漫の人となりはまことに愛すべきであって、われわれとは友誼とりわけこまやかである。共に酔うことあれば、ときに高歌放吟し、きわめて稀には暴力を發揮するの挙に出ることがあるのは、伝え聞くところによれば、カラチのホテルで実証されている。

年に5、6本みる西部劇映画の熱心なファンであるが、監督や俳優の名を覚えたことは未だかつてない。

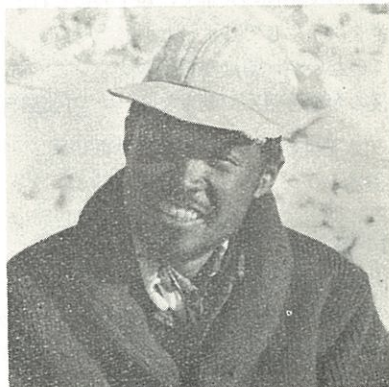
一時キャンヴァスに向かうことがあったことは、強いタッチで描かれた自画像を部屋の隅に発見したことによりわかるが、現在の趣味は川釣りや腕角力。
(酒井敬明)

斉藤 惇 生 氏

斉藤の出生には1つのエピソードがある。彼の母上は彼の兄貴達を生んだ後、輸卵管を人為的に閉鎖したところが数年後に、はからずも母上のオナカがふくらみ始め、この世に生れ出たのが斉藤君なのである。「俺は普通の人間よりもずっと強い生命力を持っている。」これが彼の自慢であった。

さて、人呼んで彼を「Y」という。Y歌Y談が好きだからというのであるが、それも何もとりたてて彼がそう呼ばれなければならない程卑猥な男ではないのにいつの間にかそうってしまった。それは彼が物にこだわらず、そんなことを一向気にしないので、人も平気で彼をそう呼ぶことが出来たということの結果である。しかし彼は私にこう述懐したことがある。「レディから、なぜあなたはYさんなの？と尋ねられた時には返事に困るなあ。」

人生意気に感ず、とは彼の好んで口にするとところであるが、その言葉はまさに彼のために存在する。彼は感激屋である。感激のあまり何をするかわからない。チョゴリザの時私に手紙して曰く。「ラジオで快報聞いたとたん、思わずはいていたパンツをぬいで、新しいのを取りかえた。何んでそんなことをしたのかわからないが、そうせずつおれなかった。」チョゴリザでそうなのだから、今度のサルトロの頂上ではどんなだったろう。



彼はロマンチストである。奥さんとは恋愛結婚であるが、その最初の出合いの様子はこうだ。「俺は彼女を見たときに、こんな女に惚れられたいと思った。ところが向うはその時、こんな男に愛されたい、と思っていたんだそうだ。」まさに相思相愛。いいカップルである。

思いつくままに彼の美点を列挙してみよう。○彼は陽気な楽道家。クヨクヨしない。人も一緒に楽しくなる。○涙もろくて人情家。人には親切の上なく、同情的で暖い。患者さんにうけのよい所以。○酒が好きで、飲めば、笑って語って歌って踊る。天下泰平。向う所敵なし。○人と争わず、人の意見はよく聞いて一座をとりまとめ、しかも自分の信念は貫く。リーダーの器。○料理を作るのが好きで、凝り、従ってそれは大変うまい。彼と一緒に山に行つて得られる楽しみの最たるもの。○気がよくて、人から頼まれるとすぐ引受ける。しかも引き受けた以上は断じてやりとげるから信頼がおける。エトセトラ。

チトほめすぎたか。否、まだほめ足りない位である。彼の良さは煙銀のよさである。ケラケラしていないが、見れば見る程良くなるという、深い味わいのよさである。

こういう男を友達に持った者は誰でも幸せである。彼は人をしてよき友を持った喜びを味わわせ、この世の生き甲斐を感じしめる。

九州は熊本の産。昭和24年、旧制五高から新制京大に転じた。私とは共に山岳部に入り、共に医科に進み、その最後まで現役に留ったただ二人のお互いという仲である。医科には山岳部の同期で三人受験したが競争率は四倍だから、三人のうち一人通ればよい方で、だとすればこの二人はあかんやろと言われながら、見事合格してみせたその二人組という仲で、なかなか因縁浅からぬ間柄なのである。

(中島道郎・本仁久一郎)

岩 坪 五 郎 氏

僕は岩坪五郎と申します。お菓子屋のイワツボの息子ではありません。僕のことを「岩坪君」と呼んでくれるのは学校の先生が公式の席上で呼ばれるときだけで、普通は「ゴロー」としか誰も呼んでくれません。まして最近の度重なる海外遠征で要領よく立ちまわつ



たことから、いつのまにや三人称では「ずる五郎」というありがたくない形容詞までつきましました。生れてから現在までの約30年間の自己紹介をしても余り興味も湧かないと思いますので、山岳部に入ってからのお話を二つ三つ申します。

そもそも入岳手続きのいきさつは、昔々、ボックス(ルームというは程遠い、木造板張りの小屋が今のテニスコートの近くにあった時のことです)の前の枯草の上で旦那・Yさん等が今から思うと春山帰りのテントを干しておられた時に、丈のヒロロ長く、ポーとした変な奴が「僕でも山岳部に入れまっしゃるか」とおずおず訊ねたのが事の始まりでした。

その後、比良の新人歓迎山行では学生帽にカッターシャツ、ぼろの学生ズボンに腰の白手拭、大きい運動靴、背には肩に食い入る(ように思えた)重いリュックサック。三つあるポケットや、フックにはアルミのコップ、地図入れのケースに磁石、万能ナイフに水筒、はんごう等々が飾れるだけ飾ってあって、直立の姿勢がチャップリンの活動写真そっくりだったということでした。

そんなうちに笹ヶ峰でのスキー合宿が始まりました。初めのうち僕のようなガニ股でもキチント2本のスキーがそろうだろうかと非常に心配しましたが、今では僕にクリスチャニヤを教えてくれという者まで出る程に上達しております。

この合宿で僕の寝言が評判になりました。昼間の猛練習で寝苦しい夜が続いたある真夜中、「Yさん(当時のリーダー)苦シイ! 助ケテ!」と突拍子もない声と同時に無意識にシュラフのチャックをさつと開け、「アー助カッタ、オオキニ、ムニヤ、ムニヤ……」とまた寝入ったということでした。

僕の大喰いも有名で、春の毛勝合宿も無事終り、下山の途中、発電所で一泊した日の夕食の時なんか、食道まで詰る程食って、苦しさでフンゾリ返ってフーフー言っていた時のことです。まだ何か食い足りない連中が2、3人追加の飯を僕に炊かせている間に一風呂浴びに行き、帰って来た時には炊き具合はどうかと僕が飯ごう一杯のめしを試食し終っていたということでその連中からはいまだに怨まれております。

さらに僕のズボラさも大吹聴されております。二回生の夏山で穂高から日本海までの後立縦走の折、白馬も過ぎやつと人影を見なくなったお花畑での休みの一とき、立って小便するのもメンドウと、キスリングから腕をはずすことなく、地面に寝ころがったまま両脚を大きく開いてやつたところ、前がビショ濡れになった上に地面を流れ返って来たやつで尻まで濡れた臭い経験もあります。

このように朝寝して宵寝するまで昼寝して時々おき居眠りなどしているうちに、気がついたら六回生に

なっており、あわてて大学を卒業し、AACK に入ると同時に大学院に入学、今度こそと勉強したお蔭で修士課程修了の時には全学の総代を勤めました。おまけに博士課程にも何なくパスした上に、才たけて眉目美しい妻をも娶ることができ幸せで一杯です。

とはいえ、山登りを止めた訳ではなく AACK という学校は入岳式はあっても卒業式というようなものはなく、今後いかにして学問と岳術とを両立させるかということが僕の人生にとっての一つの課題となっております。

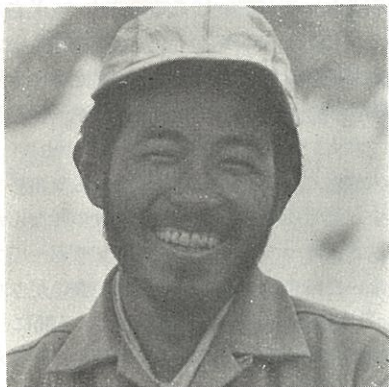
以上、ノラリクマリと取り止めのないことばかり申して参りましたが僕という男は一口に言ってそういう男でして、それでいて人に憎まれぬのが取得といえは取得なのではないかと思っております。

最後に一寸、規定により遠征歴を記しておきます。

1957 バンジャブ 1958 チョゴリザ
1960 ノジャック (高野昭吾)

平井 一正 氏

しあわせなことに私は多くの山の先輩・友人がある。そしてその人たちと数多くの山を登った。しかし大小の山の計画をたてると先ず平井一正君に同行をもとめ、彼も同様に私をさそった。そんなところから編集者はこの原稿を依頼したのである。



しかし平井（以後は愛称ポコと言わせていただく）といえばチョゴリザの初登頂者の1人、サルトロの隊員として AACK は言うにおよばず、大げさにいえば日本の生んだ大登山家であるから彼の紹介は大変むずかしい。しかしもう原稿の締切日とあっては今更断るわけにはいかない。いそいで筆を走らせてみよう。

彼は京大工学部電気工学科を出て大学院にすすみ、昭和31年修士、現在京大附設工業教員養成所助教である。この助教という肩書とポコとがしっかりと結びつかないせいか、専門分野での彼を知らない木旺会の面々が京大の権威も地におちたとなげいているそ

うだが、これに関しては私の論評する限りではない。

本来ならば彼持前のねばりでじっくりと自動制御に関する研究ととり組み、青白い秀才と伍してこの分野のホープになっていたかもしれない。しかしどんな動機からかは知らないが大学入学と同時に山岳部に入りそれに熱をあげるようになって彼の人生は少し変わってしまったようだ。

山登りに関しては全くどん慾で（もっともOさんという愛妻をむかえて少しは変わったようだが）、5尺余り、13貫足らずの安物の盆栽のような身体のくせに強さほどの荷を背負い、どんな難場も息一つはずませることなくこなしていく様子は、どこにそんな力をかくしているのか驚くばかりだ。彼が相談に来る山行はすごい大計画であり、実現可能な計画にするべく大骨をおったものだった。

彼はまた理解ある両親のもと、すこぶるあたたかな家庭で何の苦勞もなしに育って来た。そのせいか天真らんまんそのもので山岳部の仲間からは大変愛されてきた。ポコに加わる山行はそのパーティーを非常ににぎやかなものにする。といっても彼がおしゃべりだということではなく、彼の顔をみるとつい相手になってみたい気になるらしい。

人の言ったことは何でも真にうけて感心し、味痴であって同じニンニクでも隣人が文句を言えば彼もまずくて食べられなくなり、他の隣人がうまいとほめれば彼も大変喜んで食うといった面があり、また平井は拾うに通ずるのか、人の捨てていったものは何でも拾って珍妙な更生品を作る特技の持主で、しかもそれを鬼の首でもとったように自慢する子供らしさを多分にのこしている等々。

今の現役が聞き伝えている先輩のエピソードの中でも彼のものが最も多いのは人徳の致すところである。とにかく彼は過去の記録でも示されているようによい登山者であり、人間的にもとても良い男である。

だが、しかし、少し注文を言わせていただけるならば、彼はいつまでも大砲のタマであってはならない。引金であり射手であるようになってもらいたいと言いたい。教育者の卵の教育者である現在、彼は人間的にも修練を強いられているとは思いますが、もう少し精神命令を積んで木旺会は勿論のこと、現役等若いグループの持っているエネルギーをうまく集中させて、然るべきところに命中させる仕事をしてもらいたいものだ。好漢ポコよ期待してるぞ。

1958 チョゴリザ (脇坂 誠)

前小屋 端 氏

秋田県は青森県との県境に近い大館市の産。仇名をズンムという。ズンムは神武である。背が高く、骨太で筋肉質。頬がはり、鼻は大きく、その風貌は意志の強さを感じさせる。性質は実直でねばり強い。高校



時代はスキー部に在籍し、距離の選手をしていたという。京大山岳部時代の彼の輝かしい山歴についてはいまさらいうまでもあるまい。四回生の時にはそれまでの小教精鋭の山岳部から60人もの大世帯に移る転換期にリーダーを務めた。何かとやり方が大まかという風評もあったが、土居、上尾という適切なサブリーダーを得て近年まれな大型リーダーという声が高かった。

彼と大きな山行を数度共にした某氏に彼の人物評をたずねると「そうですね、何でもよく知ってる管なんですけどね、人物評といわれるとスーパーとしていてつかみどころがないし……、ともかく彼をみると何となく信頼感が湧いてくるんですね」。前小屋は一口にいってそういう人物である。岩登りもスキーもうまい。が全国的にみて特に際立っているという程でもない。しかし山における確実な身についた技術、適確な判断、適度な厳しさが同輩、後輩に何とはなしに信頼感を抱かせる。またその謙虚な態度故に先輩諸氏にも評判が良い。

専攻は理学部の地質学。先年パキスタンに留学し、サルトロ・カンリ遠征隊にも現地参加した。現在は身体を少し悪くして慎んでいるが酒は底なしの強さ。酒を飲むと親しい友人に対して分類学としての地質学の将来、分類学からの脱皮、力学の導入などについて訥弁ではあるが熱心に論ずるという。

麻雀はいかにも田舎麻雀だが、基は2段階という。昭和11年生れの現在27歳。独身 (敬称略)

(松尾 稔)

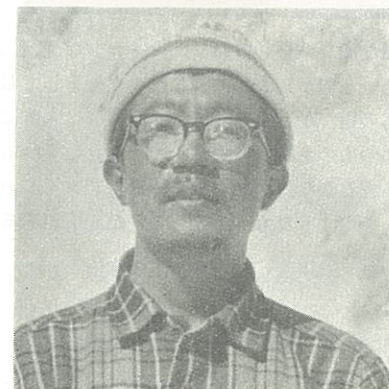
高村 泰雄 氏

1934年大阪の産。高津高校から京大山岳部および農学部農学科に入学したのが10年前の1953年。当時の彼は現在よりももっとおとなしかった。しかし何をやってもわれわれ同級生の中でトップクラスである。

岩登り、スキーの達人でありまたその一方いかなる根曲り笹のやぶこぎも、胸までもぐるラッセルも、十有八貫のぼっかをもいとわぬオールラウンドの活躍をしたのでたちまち注目の的となる。温厚な性格も相まって1956年度の山岳部リーダーをつとめた。この時代は探検部が設立された時期で彼は探検部と山岳部の交渉にあたり苦慮し、端目にも気の毒であった。自分の責任外の事にまで責任を感じ一人で悩み毎晩のように百万辺の屋台でうさ晴しに飲んでいるのを見ても誰もが「デルファーは一寸可哀そうやな。助けたりか」という気持ちになり結局は万事がうまく片付く。彼の人の徳のいたす所であろう。

学部時代彼は地道に国内の山を歩きその後の海外遠征の基礎をかためた。山岳部員の留年が相続く中において、この山岳部優等生は学部を四か年で終えて大学院に進む。

彼の力量が残りなく発揮されたのは先ずチョゴリザの準備であった。パーミッションがおりてから出発までの短期間に装備係として走りまわり莫大な装備を設計、発注して間に合せた腕は見事であった。チョゴリザ登はんでも頂上アタック隊のサポートの重責をはたしている。この程度の活躍は彼にとっては当然であろうが、次のサルトロ計画においての活躍(むしろ業績といった方が適切かも知れない)にはただ目を見張った。1961年の夏、パキスタンにおもむき現地政府にスッポンのように喰いつき、遂にパーミッションをものにした彼の政治折衝なしには今回の遠征の成功は考えられないであろう。正直な所、あのしんきくさいパキ



スタン政府を口説き落す甲斐性と根性はそれまでのスマートな高村像とは異質な感じがする程である。いざ鎌倉となれば何でもやるのが高村の偉さと思う。本番の遠征での彼の活躍は衆知の通り。下手な紹介をする

までもない。

本職は目下大学院博士課程の学生で、水稻の研究をしている。稲は夏の作物なので遠征参加イコール一年間の実験中止となるらしく研究熱心の彼には第一の泣所ようだ。それでも年々研究室での信任が厚い所をみると着々と研究成果をあげているらしい。

趣味はスポーツ一般なんでもやるが、ひまがない様子。酒の飲みっぷりは一流である。高村を飲みに誘って断られた事がないから相当なものである。飲めば飲むほどに能弁となり一晩語り明す事も珍らしくない。今夜あたりも何処か場末の飲屋に沈没して「おれを何度でもだまってヒマラヤに行かしてくれるお嫁さんはいないかな」と嘆いているかもしれない。彼も28歳の年頃ですからネ。

1958 チョゴリザ

(田附重夫)

林 一彦氏

〇一見壮士風に感じたこと——

林との初対面は、終戦の年の晩秋、旧旅行部のルームにおいてであった。小柄で、色は黒い方である。サ



ムライ風な面ツキをしており、セイカンな感じがする。何というのか、表現に苦しむホウ髪をしており、始終五本の指でかき上げていた。服装は、大体において長いめのものを纏っており、キチンとしている時はかぞえる程しかない。初対面の時は、グレイがかったカッポーギのようなものを纏っていた記憶がある。つ

まり、今の彼から若々しさを取り去れば同じような感じとなる。(失礼)

〇こわいような男と感じたこと——

藤平の語るところによれば、私など到底足もとにも及ばぬような「山登りをするために生れて来たような」クライマーであり、伊藤洋平と某日、ルームで行なわれた「ヒマラヤ」に関する白熱した大論争によれば途方もない情熱をもって、登山についての科学に通暁している。「セオリスト」であり、後輩の指導については峻烈、水も凍るばかりの指導原理を実践する、鬼のような存在であり——しかも、ルームの腰掛や古いスキーを、バリバリとたたき壊しては、事もなげにストーブに放り込むサマに接しては、何ともコワイような男だという意識が先に立って、私は彼と会ってから幾何の時も経ずして、一種の脅迫観念に似た感じを彼に対して抱くようにすらなった。

かいつまんで言えば、林一彦が山に登っている姿を想像する時、学究的な外科医のタマゴや、口角泡をとばして激論するセオリスト林の姿は、忽然と消えうせて、その代りにサルやカモンカが、ビッケルをかざしアイゼンをはいてあらわれて来るのであった。後年、谷川岳東面のカタズミ岩のαルンゼの奥で、私は、林がキャッキヤッと叫んだのではなかったかと思える程の身軽さと度胸を目の当り見せられる事となる。

〇途中の色々の事は省略して——一足とびに現在の彼について書かせて貰おう。

彼の Family 内での立場

彼の医者という稼業における立場

彼の現在までの AACK における立場

のそれぞれについて、よく判らぬ乍らも、私は彼の演じた役割の重要さと、そしてそれを敢えて果して来た、彼のバイタリティーと人間性を心から称賛し評価したいと思う。

サルトロ・カンリから帰って来た夜、羽田で娘をダッコしている林を眺め乍ら、私はもう二度と林に、ビッケルをかざしたサルのイメージがダブルことはないだろうと思った。

現在、彼は AACK 会員であると否とを問わず、私のもっとも畏敬する友である。

1952 マナスル

(舟橋明賢)

〔遠征隊行動日程〕 平井 一 正

4月5日 日産汽船日産丸で齊藤、平井、谷、上尾 神戸港発。

4月28日 林、高村羽田発。

5月6日 齊藤以下カラチ着、林、高村と合流す。

5月9日 平井、上尾トラック2台に分乗してカラチ出発。

5月10日 四手井、加藤、岩坪羽田発。

5月11日 四手井以下カラチ着。

5月11日 上尾ラワルビンディ着。

5月13日 平井ラワルビンディ着。

5月15日 齊藤、谷、岩坪カラチ発飛行機でラワルビンディへ、四手井以下はラホールへ行き、カラコルムクラブと打合せ。

5月16日 四手井、加藤、林、高村、連絡将校、それから大使館員牧内氏ラホールよりラワルビンディ着。

5月21日 四手井以下前小屋を除く全隊員、バシール (R. Bashir)、連絡将校全員12名スカルド着。

5月24日 岩坪、バシール、カバル (Khapalu) へ。

5月25日 上尾、人夫頭グラムラスール、カバルへ。

5月26日 高村、カバルへ。

5月27日 加藤、林、カバルへ。

5月28日 前小屋、スカルド着。

5月29日 谷、前小屋、コックのタキ、カバルへ。

5月30日 四手井、齊藤、カバルへ。

5月31日 牧内氏スカルド発ラワルビンディへ。平井、連絡将校カバルへ。テント地はカバルの対岸サリン (Saling) で、全員サリン集結。

6月2日 サリンからフルディ (Huldi)

6月3日 フルディからチノ (Chino)

6月4日 チノからマンディク (Mandik)

6月5日 マンディクからゴマ (Goma)

6月6日～8日 ゴマで滞在。

6月9日 ゴマからギャリ (Ghayri)

6月10日 ギャリからナラム (Naram)

6月11日 ナラムから B.C.

6月18日 加藤以下3名先発隊として出発。前小屋はギャリに静養におきる。

7月1日 四手井以下全員 ABC 着、すべての物資のトランスポートを終る。

7月5日 林、齊藤、谷、上尾、バシール第1キャンプへ。

7月7日 加藤、平井、高村、岩坪、第1キャンプへ。

7月9日 加藤隊、林隊第2キャンプに集結、14日まで連日風雪に苦しめられる。

7月10日 カラコルムクラブ、ベグ (Beg)、ハイヤ

ット (Hyat)、ベルベッツ (Parvez) ABC 着。

7月11日 ベルベッツ C₂ 着、加藤隊に合流す。

7月15日 ハイヤット C₂ 着。

7月16日 林隊 C₃ へ。ハイヤット下山する。

7月18日 加藤隊 C₃ へ、林隊と合流する。アタック隊を齊藤、高村に決定する。

7月20日 前小屋体快復しギャリ出発。

7月21日 林隊 C₄ へ。バシールを登頂隊に加えることを決定。四手井、ベグ、連絡将校 C₂ へ。

7月22日 齊藤、高村、バシールの登頂隊 C₃ へ。

7月23日 登頂隊 午前4時 C₃ 発、雪深く午後1時ビヴァークと決定。前小屋 C₂ 着。平井、岩坪 C₄ にあがり、林、谷、上尾のサポート隊に加わる。

7月24日 登頂隊 午前10時45分登頂成功、C₅ へ。

7月25日 加藤以下全員 C₃ へ集結。

7月26日 四手井、ベグ以下全員 C₂ 集結。登頂をよろこびあう。

7月27日 ベグ、バシール、ベルベッツ C₂ 発、下山す。

7月28日 連絡将校、クーリーをよびに下山。

7月30日 四手井以下全員 C₂ 発、C₁ へ。

7月31日 全員 ABC 帰着。

8月4日 全員 ABC 出発、ロロフォンドキャンプへ。

8月5日 ロロフォンドキャンプよりもとの B.C. へ。

8月6日 B.C. からギャリへ。

8月7日 ギャリで1日滞在、サーダ、谷、前小屋はガガル (Gagalu) へ。

8月8日 全員ガガルへ。連絡将校と再会。

8月9日 ガガルからパラオ (Paron)

8月10日 パラオからフルディ (Huldi)

8月11日 フルディからマルチガオン (Multigaon)

8月12日 マルチガオンからカバル

8月13日 林、岩坪、ジープでスカルドへ。

8月14日 連絡将校、スカルドへ。

8月15日 四手井、平井、スカルドへ。

8月17日 林、岩坪、ラワルビンディへ。齊藤、前小屋、スカルドへ。

8月20日 高村、上尾、スカルドへ。カバルを引払う。

8月22日 四手井、齊藤、谷、前小屋、上尾、高村ビンディへ。

8月23日 加藤、平井、連絡将校、ビンディへ。

8月29日 全員カラチ集結。

9月3日 林、齊藤、平井、ホンコンへ。

9月4日 四手井以下全員カラチ発、ホンコンから林以下2名合流、全員羽田着。

編 集 後 記

★本号は「サルトロ遠征速報」とした。しかし遠征隊の帰国より既に十カ月、速報でもなくなったのは編集者として申し訳なく思っている。

本号はやがて間もなく出版されるであろうサルトロ遠征の正式報告書の前衛で、その原稿を兼ねて、また正式報告にはのせられないようなものまで、気の向くままに書きなぐって貰った。とはいえ本号は本号のまま、一つのまとまったものにしたかったけれど、正式報告書の作成に忙しい執筆者にこれ以上負担もかけられず、またその思想まで含めたサルトロ遠征の一貫したものは正式報告に織り込まれるであろう事を考慮して、本号はこの範囲に止めざるを得なかった。編集者としては、前号にサルトロの準備段階としてチョゴリザ以後の AACK の動き(平井一正)、高村のパキスタン交渉のいきさつ(高村、谷、高橋代筆)のをせ、それに本号、さらに本号にもれた医学的考察、および AACK の最初の A に関する部分とサルトロ遠征に関する批判座談会の模様を次号にのせ、この三号のシリーズをもって AACK 時報のサルトロ報告を完結したいと希望している。

★サルトロ速報にレクチャーとして「アッサムの山々」のをせたことはいささか異なる感じがしない訳ではな

い。しかしわれわれとしてはサルトロの後仕末の忙しさの中にあっても続けていたレクチャーのしめくりとして、敢えてこれを載せた。なお、AACK の 30 年史は本号は平井一正が執筆の予定であったが、これは残念ながら本号の性質からみて割愛した。

★次号はインドラサン特別寄稿と、前記のサルトロ批判座談会を主に編集の予定である。一般会員よりの遠慮のない批判、希望をもあわせてのせたいので投稿を大いに期待している。

★つい一ヶ月程前から、再び次回遠征への気運が盛上って来た。遠征計画については従来の計画の推進方法の欠点を反省し、計画の推進をより良いものとする為に、なるべく広い層からの意見を聴くべく、5月25日全関西木曜会と称して関西在住の若手会員の集りを、更に6月7日全日本木曜会として東京の若手会員をも加えた会をもち、計画の推進について種々討議をした。この会は何しろ、時期的にアプリケーションの提出日が六月中と限られているために、急に提案されたもので、連絡も充分ではなく、或いは連絡もれになった若手会員には申し訳ない次第であるが、以上の事情を察せられて諒とせられたく希望している。

(北村)

一般会員の投稿を募る

テーマ

- (1) サルトロ遠征の種々の立場よりの批判、紙上匿名可。
- (2) AACK の将来問題、遠征のアイディア。
- (3) その他(時報の内容……何でも可)

期 日

8月30日

送り先

京都市左京区

京都大学工学部冶金学教室

近藤良夫 宛

昭和38年7月20日 発行

発行所 京都市左京区吉田本町 京都大学
社団法人 京都大学 学士山岳会
TEL (77) 4111 内192

代表者 AACK会長 今西錦司

印刷所 株式会社 文功社